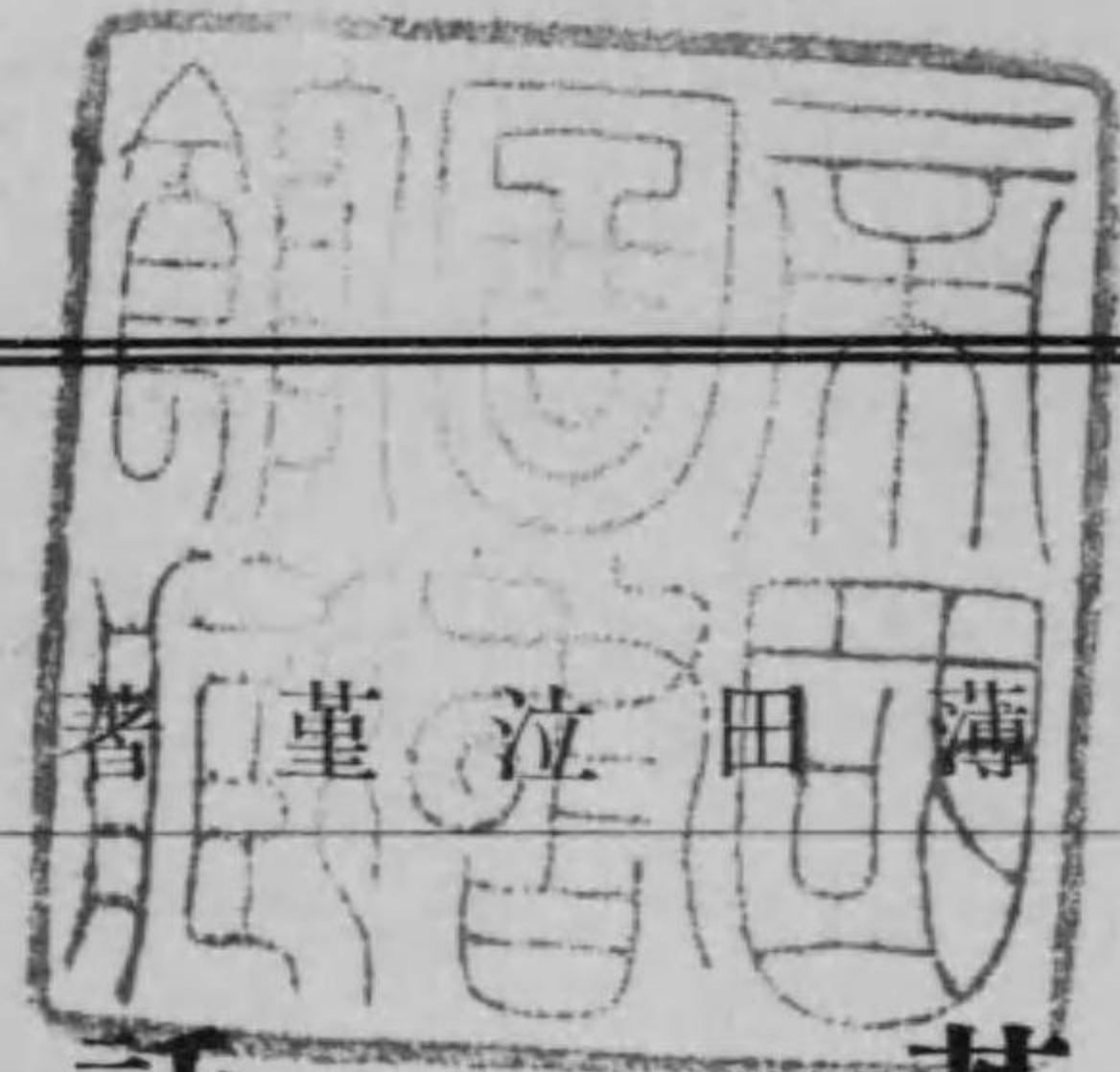


始



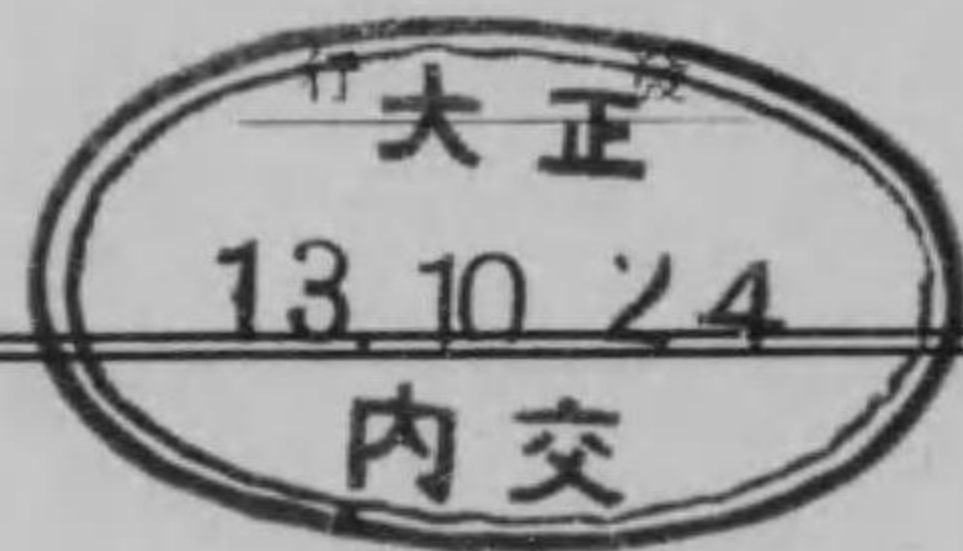


話

茶

卷 下

社聞新日每阪大



大正

13.10.24

内交

71-5931

目次

喜捨金一文……………一
 結婚司會に夫婦喧嘩を説く……………四
 喫煙禁止……………七
 巴里の安料理……………一〇
 料理屋はその一つ……………一三
 滴水と峨山……………一七
 實業家の義太夫……………一九
 義太夫を呼べ……………二二
 呂昇の浪花師……………二五
 豫言者……………二七
 司令官と兵卒……………二九

新聞の購讀中止……………三一
 前大統領の嘘……………三三
 硯と殿様……………三五
 古松研……………三六
 接吻……………三八
 英雄の軀體……………四〇
 机……………四三
 禿山……………四五
 お水……………四七
 女性慾……………四九
 女の手……………五一

目次

一

目次

奉納	五三
醜女の家	五五
女連れ	五六
女を賢くする法	五七
親切	五九
心得	六〇
焼棒杭	六二
口は調法	六四
鱒	六六
書物	六八
死人の下駄	七〇
俘虜研究	七二
天才	七四
虱	七六
狐と狸	七八
高野の英霊塔	八〇
酒	八一
床柱	八二
鬼	八三
お湯嫌ひ	八四
さくだみ	八五
蟲の聲	九一
赤梅檀	九三
隠し藝	九五
油が足りない	九七
大きな鼻	九九

目次

唾	一〇〇
幽霊	一〇二
鐵扇	一〇四
涙	一〇六
紋	一〇八
男装婦人	一一〇
獨身儒家	一一二
俳優の家	一一四
果物	一一六
胃の腑	一一七
女と薪	一一九
洋傘	一二〇
明恵と雑炊	一二二
道成寺の石段	一二四
栗鼠	一二六
女博士	一二八
臺灣と考事	一三〇
首蓓	一三二
蜜蜂	一三三
楊柳	一三五
魔法使	一三六
食物と格言	一三八
毒草の味	一三九
十三年目	一四一
新書	一四三
佛書	一四四

縁青	一四六
畫の鑑定	一四八
天井畫	一五〇
畫家と商人	一五一
畫家と書物	一五三
馬車の葬式	一五五
呂昇の咽喉	一五六
雷	一五七
京の水	一五九
親	一六〇
帽子	一六二
玄關	一六三
墓石	一六四
風藥	一六六
強制妊娠	一六七
狸	一六九
節用集を食ふ	一七一
角田川	一七三
記者凹む	一七五
もつと善い物	一七六
男のお産	一七八
音楽家の頭	一八一
馬が悪い	一八二
蝦の書	一八五
手品師と蕃山	一八七
女の舌を	一八九

將軍の手紙	一九二
病氣必治法	一九四
小粒金	一九六
畫の催促	一九九
結婚と奴隸	二〇〇
長命の秘訣	二〇三
相阿彌と鸚哥	二〇五
喫煙家	二〇七
出世の秘法	二一〇
隈侯の進物	二一一
哲學者の寄附金	二一三
就職口	二一五
天神様の子供衆	二一七
女優と監督	二一九
象山と江川	二二一
鼻	二二三
華盛頓は死んでる	二二五
元帥の諧諷	二二七
火も亦涼し	二二九
ラムの祈禱	二三一
生き髭	二三三
悪戯小僧	二三五
作り髭	二三七
牡蠣を食ふ馬	二三九
尻ミ腹	二四一
黒ん坊の教會	二四三

魚の骨……………二四六
 物識り娘……………二四八
 三十六計……………二五〇
 馬具屋……………二五二
 水神の供物……………二五四
 珍書……………二五六
 長い紐……………二五八
 越路の『山科』……………二六〇
 帽子……………二六二
 郭公……………二六四
 天文學者……………二六六
 無識の得……………二六七
 苟問答……………二七〇

審判の日……………二七二
 若芽蕪……………二七四
 大食併優……………二七六
 食べ方……………二七八
 生食……………二八〇
 氣轉……………二八一
 避暑法……………二八三
 小包の紐……………二八五
 四國猿……………二八七
 斜視睨み……………二八八
 光琳の羽織……………二九〇
 阿父の着物……………二九二
 儉約人……………二九四

辯護士……………二九六
 畫の交換……………二九八
 落書……………三〇〇
 大統領夫人……………三〇二
 旅錢代用……………三〇四
 主人ご番頭……………三〇五
 茶匙……………三〇七
 タフトご子供……………三〇九
 女の辛抱……………三一〇
 黒人の盗み……………三一三
 金びか革……………三一四
 大雅の拍子木……………三一七
 狂人……………三一九

鼠の貿易……………三二〇
 畫家ご名妓……………三二二
 米人のお國自慢……………三二四
 歐陽詢ご石碑……………三二六
 袂に珠數……………三二八
 子福者の歌妓……………三三〇
 雷神ごお茶……………三三二
 名士ご好物……………三三四
 切手蒐集家……………三三五
 俳優の盗み……………三三七
 教育家氣質……………三三八
 牧師の杖……………三四〇
 指頭畫……………三四二

ピアノの前……………三四三
 士を圓めて……………三四四
 難船した人……………三四六
 選舉人……………三四七
 支那の活動寫眞……………三四八
 獨木舟……………三五〇
 狂人になる書物……………三五二
 子供……………三五三
 佛語通……………三五四
 墓の中……………三五六
 是眞の啖呵……………三五八
 肉饅頭……………三六〇
 王羲之の扇賣……………三六二

原稿集め……………三六四
 蛇……………三六六
 著書の無心……………三六八
 武器としての番曲……………三七〇
 利休の女夫喧嘩……………三七二
 句讀點……………三七三
 小説家の面會……………三七六
 葵の上……………三七八
 蟹選み……………三八〇
 片腕……………三八三
 山葵……………三八五
 天國……………三八七
 細君選擇法……………三八九

痘面の笑顔……………三九一
 音樂通……………三九三
 怖い物……………三九五
 惡物食ひ……………三九七
 馬の目潰し……………三九九
 玉蜀黍……………四〇一
 鶉……………四〇三
 幽霊の芝居見……………四〇五
 京都の偉人……………四〇七
 賭博家……………四〇九
 食卓語……………四一一
 茶人……………四一三
 臆病な象……………四一四

伍廷芳の皮肉……………四一六
 懸賞短篇小説……………四一八
 皮肉……………四一九
 青磁の皿……………四二一
 高い塔……………四二三
 獨帝の癖……………四二五
 膾無し男……………四二七
 襟飾……………四三〇
 缺け皿……………四三二
 リンカンの戯談……………四三三
 髻の有無……………四三五
 猶太人三狗……………四三七
 三十一文字……………四三八

道樂	四四〇
馬の上から	四四二
伶俐者	四四四
三人畫家	四四六
新聞記者なる法	四四八
演説の用意	四五〇
肥大婦	四五二
皮肉な子供	四五三
飛青磁	四五五
霧山三娘	四五八
明恵三解脱	四六〇
静かな死	四六一
保険屋	四六二

喜捨金一文



時鳥が啼くやうになつた。——この鳥が啼く頃になると、いつも、青葉若葉の滴るやうな黄驥の空がちぎに思ひ出される。

黄驥といへば、那處には名高い鐵眼和尚の一切經の木版が遺つて居る。此の木版に就いては、かういふ話が言ひ傳へられて居る。

鐵眼は一切經の版行を思ひ立つと同時に、それは一人や二人の富豪の手で出来上るものではない。一體經を出版するに、それに干係した人達は、その功德によつて、きつて淨土へ生れる。富豪はちつとやつこの費用の喜捨は出来ようが、淨土へ生れるには恰好人達でないことを知つて居るので、成るべく一切の衆生からその寄附を受ける事にした。

で、先づ其の手始めに、京の栗田口に立つて往來の人に勸化をする事にした。鐵眼は暫く人通りの絶えた午過ぎの大通りをあちこち見廻した。するに、土に塗れた水呑百姓が、大きな黒牛を追ひ乍ら、のそのそ通り掛つて來るのが目についた。正直で、お剩りに沈黙家の牛だ、出來る

となら功徳によつて浄土へ入れてやりたかつたが、牛は百姓と同じやうに喜捨金を持ち合はさな
いらしかつたので、鐵眼は黙つて見送つた。

牛がそこらの木立に隠れると、行き違ひにきりゝした若侍が急ぎ足に西から東へ通り掛つ
て來た。鐵眼はすぐに飛出した。

「一切經の印行を思ひ立つた坊主でございます。何分の御喜捨をお願い申します。」

若侍はじろり尻目に鐵眼の顔を見た。此の男は人に物を貰ふと一緒、人に物をくれる
とも嫌ひだつたらしかつた。で、素知らぬ顔をして行き過ぎようとした。

鐵眼は一足先へ廻つた。そして侍の前に立塞がりながら、

「さうぞ、御喜捨をお願い申します。」

さ佛様がわざと見本にこさへたらしい大きな頭を下けた。若侍はさつこ身を解しさま、器用
にすり抜けて急ぎ足にすたすたさ歩を早めた。

鐵眼は後から追追つた。そして、道の二三町も歩くこ、また後から

「さうぞ御喜捨をお願い申します。」

さ、うるさく呼び掛けた。若侍はそんなには少しの頓着もなく、小唄か何かを謡ひ乍らす
たすたさ道を急いだ。

鐵眼も同じやうに道を急いだ。恚うして道の一里半も來ると、若侍は溜りかねたらしく、た
うさう振返つた。

「うるさい坊主だな。」

「うるさいと思召したらさうぞ御喜捨を……」

「ぢや、喜捨して遣はさう。」若侍は腰の巾着から一文錢をたつた一枚取出した。そして鐵眼
の大きな掌面にのつけた。「いゝか、これが俺の喜捨金だぞ。」

「有難うございます。重々御禮を申し上げます。」

鐵眼は頭が地面につくまで叮嚀にお辭儀をした。高が一文錢の喜捨にしては、お禮が少し貧
け過ぎて居ると思つたらしい若侍は不思議さうに聞いた。

「一文錢やそこいらのお金に、何だつてそんなにお礼をするんだね。」

鐵眼は頭を持ち上げた。眼は鐵のやうな強い光に輝いて居た。そして自分が今度一切經の版行

を思ひ立つた事から、今日はその勸化の第一日なので、もしか思ひ込んだ此の人から喜捨を得なかつたら、折角の自分の志が挫けはしまいかと思つて、かうして一里半の阪道をうるさく追ひ纏つて来たのだといふとを打ち明けた。

『さうでしたか。若侍が初めて言、を改めた。』

『それは御奇特な事で……』

若侍は一文銭のやうに地面に穴があるものなら身を隠したいと思つたらしかつた。しかしその上喜捨金を出さうとも言はなかつた。

結婚司會に夫婦喧嘩を説く

結婚はお葬式と同じやうに、色々儀式もあつて、その選擇は自由である。こゝに千葉縣の片田舎に、Bさんといふ若い男があつて、或る娘と相思の仲になつた。で、非常に勇氣を奮つて（結婚には人殺しをするのと同じやうに非常な勇氣が要る。何故か言つて結婚といふものは、事に依るに自分をも殺し、また相手方をも殺し兼ねないものであるから）結婚しようといふことになつた。

ところが結婚式をみんなにしたものか、Bさんは一向い、考へが頭に浮んで來なかつた。幸ひBさんはふだんから文學者のT氏を非常に崇拜してゐる所から、T氏に頼んで結婚として貰ふ事にしり決めた。

場所は東京丸の内中央俱樂部だつた。新郎新婦とその親戚友人の顔が揃ふに、T氏は洋服姿の夫人と連れ立つて、すつと席の真中に押し進んだ。そしていつもの飾りつ氣のない、ぶつさらほうな調子でお説教を始めた。

『皆さん、本當の平和は本當の争ひの後でなくちやありません。歐羅巴も今度の物凄い戦争を経て、初めて眞の平和に近い平和が得られさうになつてきました。夫婦の仲もこれと同じです。』

T氏は、じつと差し俯向いてゐる花嫁花婿の顔を見た。二人は酸漿のやうに赤くなつてゐた。

『だから、あなた方にお勧めする、さうか精々夫婦喧嘩をなさい、喧嘩をしないに、みんな夫婦だつて相手方のほんたうの氣心が知れやう筈がありません、さうぞ思ひ切つて喧嘩をしない、私達もこれで今日まで随分喧嘩をしたものです。何事も喧嘩ですよ、喧嘩ですよ。』

T氏はかう言つて一寸言葉を切つた。
座に居合はす人達は互に顔を見合した。此人達はこれまで幾度か日出度い結婚式に顔を出したが、いつも目出度い事ばかり聞かされて居たので、何だかだしぬけに、薪雜棒で後からさやしつけられた様な氣持がしたに相違ない。

皆がおし黙つてゐるのを見るに、T氏はきつこ花嫁花婚の顔をみつめた、そして出雲の神様が
お託宣をする時のやうに、腹一杯の聲を張り上げて叫んだ。

「それでは今日からこのお二人を夫婦と認めます。」

慥う言つたと思ふと、夫人と一緒に座を立つて、づかづか自分の席にかへつた。

皆は呆氣にさらされた。變な結婚式もあればあるものだと思つたやうな顔をした。

「變ですね。」

「さうも少し變つてゐるやうです。」

「少しどころぢやありませんよ、あまり變り過ぎて居ます。」

かういふ囁きがそこらからひそひそ起つた。するに花嫁のすぐ隣に並んでゐたその父親は、そ

の時までじつと手を拱いて考へ込んでゐたらしかつたが、急に顔を揚げて自分の女房さんの方を見ながら言つた。

「どうも感心しちまいました。いや全く感心しましたよ。ね、お前だつてさうだらう。」

「ほんごにさうですわね。」

花嫁のお母さんはかう言つて、心から感心したやうにほつこ溜息をついた。

長年の間口争を仕續けて、やつこ皺くちやなこの頃になつて永遠の平和といふものを初めて味

はつたらしい溜息であつた。

喫煙禁止

教化したしなみのない大阪人の不作法は名高いものだが、さりわけ劇場や電車や、すべて喫煙禁止の場所、平氣ですば煙草を喫かす人があるのは、困つたものだ。

グラントミ言へば、南北戦争の將軍として、十八代目の米國大統領として名高い人だが、此の人が大統領に就任してから當分の間、田舎の自宅からワシントンへ汽車で通つて居たことがあつ

た。或日のこと、グラントはいつものやうに借切列車に腰を下しながら、ポケットから葉巻を一本取出して静かにそれに火をつけた。そして香の高い紫色の煙に、犬のやうに鼻をくんくんさせながら、大統領は一人でいゝ氣持になつて居た。汽車が途中の或る小さな驛に停まるに、着飾つた一人の貴婦人が一寸した小荷物を抱へ乍ら慌しく入つて來た。

婦人はグラントの前に席を占めた。それまで南北戦争當時の追懐か何かに耽つて居た大統領は眠さうな眼を一寸開けて、自分の前に坐つた婦人の様子をちらちら見たりしたが、性來婦人といふものに、あまり趣味を持つて居なかつたこの軍人大統領は、其のまゝ又眼を細めてじつと葉巻に吸耽つて居た。

するにだしぬけに癪走つた女の聲が聞えた。グラントは晝寢をしてゐた驚のやうに、大儀さうに片眼を開けた。見るに件の婦人が、目鯨立ててじつとこちらを睨んで居た。

「あなたさうぞ煙草をお止め下さい、妾煙つほくて堪りませんから。」

グラントはそれを聞くに、喫しさしの葉巻をそのまゝ窓の外に投げ棄てた。そして開けて居た片眼をもこのやうに靜かに閉ぢた。無口な大統領は此の場合何一つものを言はなかつた。

グラントが汽車に乗り合はした婦人客に、何一つものを言はなかつたには、何の不思議もなかつた。氏は生れ付のむつゝりやで、何時だつたか氏が大統領に在職當時、世界博覽會が米國に開かれたことがあつた。開會式の當日、統裁として何か際立つた演説をしなければならなかつたので、平素の氏を知つて居る人達の中には、この沈黙家がこんな挨拶をするだらうか可なり面白い話題となつて居た。するに、其の當日氏は椅子から立上りながら馬の上から兵卒でも指揮するやうな調子で、

「今日から博覽會を開きます。皆さん御遠慮なく御見物して下さい。」

と言つた切り、外に何一つ喋舌らなかつた位だから。

件の婦人客が、不作法な紳士をやりこめた嬉しさに胸をわくわくさせて居るに、汽車は又次の停車場に着いた。すると驛長が靜かに扉を開けて入つて來た。そして件の婦人客を見るなり聲を尖らして言つた。

「貴女、すぐ此處を出て行つて下さい。こちらは大統領閣下の借切列車なんですから。」

大統領の借切に聞くに婦人は顔を眞赤にした、そして小荷物を抱へるなり逃げるやうにして姿

を隠した。

巴里の安料理

少し話は古い、前代議士のO氏が、講和全權大使西園寺侯のお供をして、パリへ行つて居た時の事、氏は何でも一ぱしの巴里通にならうとして、いろんな所へ出入した。そして人の知らない間に、こつそりいろいろなとを覺えたものだ。

或日の事、O氏は同行の公爵K氏に言つた。

「Kさん、かう時勢が變つて、物事がすべて民主的になつて來ては、貴方なごも今迄通りのお公卿さんではなかく、通られませんかよ」O氏はかう言つて、日本中の平民の代表者の様な民主的な顔をした。民主的な顔さいふのは猿のやうな表情をする事なのだ。『かうなつたからには、下々のする事は、何でも見ておく事ですよ。ついでには一ついゝ所へ御案内しませうか。』

「有りがたう、いゝ所つて一體何處なんですか。』

K公爵はオスカー・ワイルドの社會主義を翻譯した繊細な手で襟飾を直しながら訊いた。

「安い料理屋なんですよ。まあ、日本で言つたら繩暖簾さいふ所でせう。O氏はそんな所迄知りぬいて居るのを自慢するらしく、狗のやうに鼻をびくびくさせた。『それで、うまく喰はせる事にかけては、巴里一流のホテルや、料理屋もみんな裸足さいつた所ださうですよ。』

「へえ、そんな所があるんですか、ぢやあ連れてつて頂きませう。』

公爵にしても、美味くて、加之に値段の安い料理が嫌ひでない點にかけては、O氏同様民主的であつた。

二人はオテル・プリストルの旅館を出た。飲食するには勿體ないやうな日和で、プラス・ヴァンドームの廣つ場には、ナポレオンの像が平民のやうな顔をしてにこにこしてゐた。二人は細い路次に折れて、直右側の小料理屋に入つて行つた。

「こゝですよ、レストラン・ボアソンに言つてね。O氏は給仕から受取つた献立をお公卿さんに見せながら言つた。『御覽なさい、ビステキがと書いてある。今時五〇サンチム（一サンチムは四厘弱）のビステキは安いぢやありませんか。』

「五〇サンチムのビステキ！ほんまに安いですね。』若い公爵は感心したらしく首をふつた。

二人は饜腹飲んだり食つたりした。そして勘定書をこつてみた。勘定書には三百七十五フランを書いてあつた。O氏は眼を白黒さした。

「三百七十五フラン！ どうしたんだらう、勘定違ひではないでせうか。」

「えゝつ、三百七十五フランですつて。」若いお公卿さんは卓子の向ふから勘定書を覗きこんで考へた。

「してみると、500あるのは、サンチイムぢやなくて、フランですよ、屹度。」

「フランでせうか、驚いたなあ、それではちつとも廉かない。」

O氏は酔も何も一時に醒めた様な顔をした。

「Kさん、甚だ相濟みませんが、三百フラン許りお持ち合せでせうか。」

「あひにく持ち合せがないんです、實はお廉いやうに伺つたものですから。」

公爵は恥かしさうに言譯らしく言つた、實際其日に限つて若いお公卿さんの懐中物は、O氏と同様最も民主的に瘠せきつてゐた。

二人は早速ホテル。ブリストルの全權本部に電話をかけて、仲間の某氏に金を持つて来る様に

纏んだ、二人は給仕の目つきを氣にしながら、一杯の冷えた紅茶をちびりちびり小鳥のやうな口元をして甜めつけてゐた。紅茶がなくなつた頃にやつと金がいよいよ。

二人は外へ出て、一緒にほつと溜息をついた。見るま、プラス。ヴァンドームの廣つ場にはナボレオンの像が金持の次男のやうな顔をしてにや／＼笑つてゐた。二人は顔を見合して又一つかい溜息をついた。

それ以後O氏は友達と散歩の途すがら、さうかしてレストラン・ボアソンの前に出るま、慌てて友達の腕をついて言つた、「君、此處は怖い家だよ、滅多には入るんぢやないよ。」

料理屋はその一つ

早稻田系統の實業家、日清生命のT氏、藤本銀行のI氏が、こないだ京都で會つた事があつた。二人は夕飯を食へに、祇園の安井神社の境内にある『つるや』の支店に入つて往つた。

二人は料理屋へ入ると、京都には久しい以前早稻田で自分達を教へてくれた文學博士F氏があつた。二人は料理屋へ入ると、京都には久しい以前早稻田で自分達を教へてくれた文學博士F氏があつた。二人は料理屋へ入ると、京都には久しい以前早稻田で自分達を教へてくれた文學博士F氏があつた。二人は料理屋へ入ると、京都には久しい以前早稻田で自分達を教へてくれた文學博士F氏があつた。二人は料理屋へ入ると、京都には久しい以前早稻田で自分達を教へてくれた文學博士F氏があつた。

出す時分には、大抵その人は亡くなつて居るものだが、此の場合F氏が生きてびんびんして居たのは、飛んだ幸福だつた。何故といつて、二人は早速手紙を書いてF氏をつるやへ招待するにと取極めたのだから。

I氏は手紙を書いた。届け先は文科大學のF氏宛にして、こちらは安井神社境内のつるやまして置いた。——手紙を出すに、二人は待つ間の退屈しのぎに、雲行きの怪しい今の財界の模様なき話しつゞけた。

いくら二人が話し合つても、この不景氣をどうする事も出来なかつた。で、二人は戀の話をしようとした。ところが、困つたことには、二人も煙草を喫つて居た、一體煙草といふものは戀の墓場の煙言はれるもので、戀をするものは決して煙草など喫はない。煙草好きに限つて、眞劍な戀など出来つことはないものだ。二人が戀を語つたつもりで、實は女の噂をして居たに過ぎなかつた。二人も可成り腹が空いて居た。——だが、肝腎のF氏が未だ姿を見せなかつた。

「先生は遅いね。」

「うん、遅い、さうしたんだらう。」

「腹が空いた。そろそろ酒でも初めて待つとにしようか。」

「よからう。」

二人は早速酒を取寄せて、ちびりちびり盃の縁を嘗めてゐた。そして幾本か空の銚子がお膳の前に並んだ頃、F氏は汗を拭き拭き、やつと座敷に入つて來た。

「や、さうも遅くなりました。」

倫理學者はソクラテス以來の道徳が一ぱい詰つて居る頭を下けた。「ちよつと寄り道をしたものですから。」

「さあさうぞ。」I氏は座蒲團を博士の方へ押やつた。「寄り道つて、こちらへですか。」

「え。一寸その……」F氏は何か思ひ出したらしくにやにや笑つて居た。

「一寸、さうなさいました。」

二人は聲を揃へて訊いた。するに博士は聲を立て、笑ひ出した。そして二人が嚴重に秘密をいつてくれるなら、來遅れた理由を打明けてもよいと言ひ出した。二人は安井神社の神様に誓ひを

立て、秘密を守ることを約束した。

F氏は学校の講堂で倫理の講義をしなければ東北辯で話し出した。それによるF氏は招き状の裏に書いてあつた安井神社の境内まで来は来たが、どうしても肝腎の料理屋が見出せなかつた。恰度折よくそこを頭の圓い坊さんが通り掛つたので、F氏はその人の前に頭を下けた。

「一寸伺ひますが、この邊に門百屋といふ料理屋はございますまいか。」

「門百屋？」坊さんはつるり頭を撫た。「はてな、ねつからこの邊にはおへんやうござすな。」

F氏はうろたへ出した。そして行き合ふ人をつかまへては「門百屋」の在所を訊いたが、誰一人知つて居るものはなかつた。そこへ折よく學校歸りの小娘が通り掛つたので、此の大學教授は又しても「門百屋」の在所を訊いた。

「門百屋はん？ そないな家はおへんが。」小娘は可愛らしい眼を上げて汗でぐしょぐしょになつた博士の顔を見た。「ごないな字を書きまんねん。」

博士は早速持ち合せた洋杖で地面に招き状にある通りの文字を書いた。

「あゝ、つるやぎすか。」小娘は小鳥のやうに笑ひ出した。

「つるやはんならそことどすがな。」

博士はかうして娘つ子に教へられて、やつみつるやに辿りついたといふのだつた。

博士は尊敬すべき哲學者である。ハムレット曰く「ホレシオよ、此の天地の間には汝の哲學の思ひも及ばぬ大事がござるぞ。」——本當に大事は幾つもござる、少くも料理屋はその一つだて

滴水と峨山

宗風の森嚴なので聞えた天龍寺の由利滴水が、確か死ぬる三四日前の事だつた。いつも自分の側で看病してゐてくれる橋本峨山を呼んで、今更らしく訊いた事があつた。

「お前、天龍寺を再建してさうしようと思つておいでなのだい。」

天龍寺は維新の當時、薩摩の村田新八に焼捨てられたのを、その後峨山が再建に無中になつて漸く出来上るばかりになつてゐたのだ。峨山は師僧の氣に入るやうに聲を和けて言つた。

「老師の御病氣御全快を待つて、那堂で、今一度宗風を揚げていたゞきたいと存じまして。」
それを聞くに、滴水は乾葡萄のやうな干からびた顔に眼を光らせた。

「俺が死んだらさうするのぢや。」

滴水は自分の生命が明日が日も持たない事をよく知つてゐた。禪坊主の癖で、その短い時日も静かに味はうさするよりも、何か問答に費したいらしかつた。峨山は病人の枕もこに手をついて言つた。

「その折には、誰か高德な方を招いて、法燈をついで戴きませう。」

滴水の眼は意地悪さうにまた光つた。喘息を病んだ風琴のやうな、變にしやがれた聲で、うるさく附け込んで来た。

「それから其の次ぎはさうするのぢや。」

それを聞くと、峨山は急に鷹のやうにむつくり頭を持ち上げた。そして腹一杯の聲を張りあげて言つた。

「御心配は御無用でございます。」

大きな聲が、病室一杯に響き、藥壘に響き、そして鞆くちやな病人の胸の底迄響く、病人の眼は初めて和らいだ。そして氣に入つたやうになつてこり笑つた。

實業家の義太夫

東京の實業家S氏の令嬢が、大阪の實業家M氏の孫息子、今は大蔵省のお役人を勤めて居るY氏に嫁いた事は、新聞の花嫁花婿欄に氣を付けて居る人の、誰しも記憶して居る事だらう。

その披露の宴に、S氏は遙々大阪までやつて来た。M家では花嫁の父親として、丁寧に待遇をした。M氏は火災保険會社や、銀行の取締役として聞えてゐる。同時に、能樂や義太夫の達者にして、相應に名を賣つてゐる人である。大きい聲では言へないが、S氏も義太夫にかけては、天狗の一人である。

宴席には、色々餘興もあるもので、いつもM氏の絃をつまめる三味線彈きの某がやつて來てゐた。M氏は豫てS氏が義太夫好きな事を聞いてゐたので、別室にその三味線彈きを呼んで、そつこ小聲で囁いた。

「今二階に東京からSさんといふ人が來て居られるが、大層な淨瑠璃好きで、餘興に一つお願ひしたいと思つてゐるのだから、お前一寸上つて行つて絃を合せて來てお呉れでないか。」

三味線弾きは二つ返事で、三味線を抱へて氣輕に二階へ上つて行つた。暫くするに變な音が、ほつんほつん續いたり止んだりして居たが、急にそれが止つたかと思ふに、泣き出しさうな顔をして三味線弾きが下りてきた。

『旦那はん』三味線弾きはM氏の顔を見て悲しさに言つた。『堪忍しこくなはれ、那の方の絃を弾くのだけは、私どうも溜りまへんよつてな。』

M氏は不思議さうに聞いた。

『溜らんで一體さうしたんだい。』

『淨瑠璃好きや言ひなはるから、ちつこは語られるのかと思つてましたんやが。』

三味線弾きは可笑しさ悲しさかごつちやになつたやうな變な表情をした。

『全でわやだんがな、あんな事やつたら、淨瑠璃も何もあらしまへん、絃に合ふ筈がおまへんやないか。』

『さうか』M氏は急に可笑しさが込み上げて來るのを、會社の重役の技倆で、やつこ奥齒の邊で噛みしめた。そしてわざと蟹のやうな嚴つい顔をした。

『そんな氣儘を言ふものぢやない、あの人は東京では名代の義太夫道楽なんだから。』

『そら知つてまんねやけど、逆もわたの手にはおへまへん。』

三味線弾きは涙ぐんだ目つきをして言つた。

『それぢや、困る。那の方はお前も知つてる通り、孫の花嫁のお父さんだ、家にとつては大事な客なんだから。そこを何とかうまくやつて呉れないぢや困るぢやないか。』

M氏は押し宥めるやうな調子で言つた。

三味線弾きは暫く考へてゐたが、やがて決死の色を顔に浮べて立ち上つた。

『よろしおま。そない譯やつたら、兎も角もやつてみまつさ。』

暫くするに二階では又ほつんほつん變な三味線の調子が聞え出した。

宴席が開かれるに、餘興として當日の花嫁のお父さんS氏の義太夫が披露された。皆は手打つて喜んだ。上下姿のS氏は三味線弾きをつれて別室から頭を下けた。

暫くするに義太夫が始まつた。始まるに直に、皆は呆氣にこられた。

『さうも變な義太夫だんな。』

「さうだつせなあ、まるで牛が吼えるやうやおまへんか。」
 「まあ、黙つて聞きなはれ、だん／＼變になつて來ますよつてなあ。」
 「わて、もう叶ひまへん。」
 たう／＼居合す客の一人は、聲を出して吹き出してしまつた。する／＼それにつれて、皆が一度に聲を揃へて笑ひ出した。

M氏も笑つた。花婿も笑つた。花嫁も笑つた。盃も笑つた。お銚子も笑つた。そして最後にS氏も顔をへし曲げるやうにしてお附き合ひに少し笑つた。
 たつた一人三味線弾きだけは眞つ青な顔をして少しも笑はなかつた。

義太夫を呼べ

専門學校昇格問題できこえた文部大臣N氏が、或時知合の二三人に誘はれて廊に行つたこゝがあつた。

酒が始まる／＼、知合の一人は盃をN氏に差しながら言つた。

「何だか藝妓許りでは座敷がしみていかん。義太夫を呼ばうぢやありませんか。」

「義太夫か。」N氏は盃を受けながら大きく顔をしゃくつた。「そいつは面白からう、早速呼んでくれ給へ。」

狸好きのN氏が、狸のやうにお腹を撫でていつもの大笑ひをする頃になる／＼、そこへ年増の女義太夫がすつこ入つて來た。そして太棹の調子を合しながら骨つほい顔を歪めて一くさり「酒屋」を語つた。

皆は感心したやうな手を打つて喜んだ。N氏も皆の後から急に思ひ出したやうに、手を打つて感心した。女義太夫は面目を施して引下つた。

それからまた一しきり酒がはずんだ。暫くする／＼N氏は直ぐ側に居る知合の一人を突つた。

「君、義太夫は遅いね、まだ來ないのかしら。」

「義太夫？」突かれた男は不思議さうな顔をしてN氏を見た。

「義太夫はもう來たぢやありませんか。」

「もう來たつて？ なあにまだ來やしないさ。」

N氏は胡麻白の頭を揮つた。相手はN氏をすつかり酔つ拂つたものだ。こも思つたらしく、わざと有めるやうに言った。

「来ましたよ、さつき太棹の弾き語りをして歸つた女があつたぢやありませんか。」

N氏は腑に落ちなさうに狸のやうな表情をした。

「あれは君、淨瑠璃ぢやないか、義太夫は未だ来やしないよ。」

知合は呆氣に取られた。酔つた眼を一ぱいに障りながら、じつとN氏の顔を見つめたが、つい氣の毒になつたので同じやうな事を言つて調子を合した。

「本當にさう言へば義太夫は未だ来ないやうですね。」

「それ見給へ、まだ来やしないんだよ、おい、誰か早く義太夫を呼ばないか。」N氏は圖に乗つて得意さうに大きく喚いたが、そこに居合せた人達は、みんな可笑しさで悲しさのこつちやになつたやうな表情をして、誰一人義太夫を呼びに起たうもしなかつた。お客も、藝妓も、床の掛物も、そしてまた腹のすいたお鏡子までも。

呂昇の浪花節

今はD大學總長のE氏が、まだH教會の牧師をしてゐた頃、教會員が打寄つて親睦會を開かうといふ事になつた。

羊のやうにおこなしい、そして羊のやうに塊まつてゐる耶穌教の信者達だ、親睦會を開くにしても成るべく天國に近いやうな場所を選ばねばならなかつた。それには丁度恰好なところがあつた。それは書肆K社の主人F氏の大森にある別邸だつた。そこには鳩が飼つてあつたので、少し安價だつたが、天國らしい氣持がしないこもなかつた。

餘興には何がよからうといふ事になつた。地面を嫌ふ耶穌教信者も矢張り餘興は人並みに面白かつた。色々證議の末が其頃有樂齋に来て居た豊竹呂昇の淨瑠璃を聴くこもになつた。——呂昇は藝人ではあるが、熱心な基督信者である。そして洗禮を受けると同時に、これまで深く思ひ込んで居た自分の戀を鏝錢のやうに投げ棄てた女である。戀は信仰の妨げになると言つて。

呂昇は「堀川」を語つた。居合せた信者達は、四福音書の中で、悪魔がお尻から入つた豚が、其

のまゝ海に溺れて死んだ話は聞いて居るが、與次郎の飼つて居る猿きらが、お初徳兵衛の祝言をするやうな目出度いとはあまり知らなかつたので、みんな手を拍つて感心した。するに髯髯の長いE氏の後に坐つて、肩越しに伸び上り、伸び上り、呂昇に見惚れ聞き惚れて居た或る女傳道師は少し臍に落ちなさうな顔をしてそつとE氏に訊いた。

「先生、あれは何ぞ仰しやるお方？」

「あれですか。E氏は神のしろしめす世界のとだつたら、何一つ知らないとはないやうな自信のある調子で答へた『あれが豊竹呂昇です。』

女傳道師は感心したやうに深い溜息をついた。

「そして、あれが浪花節といふものなんですか？」

E氏は禿頭に荆の冠を被せられたやうな痛さうな顔をした。しかし露骨にあれが淨瑠璃だとも言ひ兼ねて、少し砂糖に水を混て返事をするこゝにした。

「浪花節？ いや、さうでもないが、まあ似たやうなものですよ。」

豫言者

京都の工科大學教授N氏が、世界戦役當時、ある新聞記者との對談にその頃方々に頭をもちあけて来た化學工業會社がさう成り往くものか、例へば鹽酸加里の會社にしても、戦前はたつた一つしか無かつたのが、戦争が始まるに、さつと四十にも殖えた。もしか戦争が濟んだら三つ四つしか残らないかも知れないといふ事を話した。

N氏は、その翌る朝京都を發つて九州地方まで旅をしなければならなかつた。混み合つた汽車に乗つて、うとうとしてゐるに、ふと誰か自分の名を呼んでゐる者があるので、驚いて目をさました。それは隣席に坐つて、新聞を擴げてゐる會社の重役でもありさうな、でつぶり肥つた大阪辯の男だつた。その男は向ふ側に胡坐をかいた自分の道連れらしいのに話しかけてゐた。

「この新聞で見ると、京都大學のNたらいふ男が、今四十もある鹽酸加里の事業が、戦後になつたら、たつた三つほか残らん言ふさるが、たつた三つとは何で決めたもんやらうて。」

「たつた三つ？ 怪つ體な事言ひよるな」胡坐をかいた男は鼻の先で笑つた。「そやつたら、こち

「この會社はさうなるんや、阿呆らしい。」

N氏は吃驚した。首を延ばして隣の男の繰擴けて居る新聞紙を覗いて見た。成る程其の男の言つた通り、記事には今の夥しい、鹽酸加里事業が、戦後には三つに減つて終ふと、きつぱりと書いてあつた。N氏は自分が「三つ四つしか残るまい」と言つた言葉を思ひ出して、それをきつぱり三つにしてしまつた新聞記者の勇敢なのに驚いた。そしてかういふ新聞記者を外科醫者にしたら、敗者の患者などはきつぱり片脚を切り揃へて終ふだらうと思つた。で、その正誤旁、自分がその談話をした當人のN教授だといふとを打明けようと思つたが、でも、さうするに、隣の男はきつと鹽酸加里會社の株を幾らか持つてくれと言ふだらうと思つて、そのまゝ黙つて過す事にした。

所が、戦争も濟んで此の頃になつて見るに、N氏の言つたやうに、數ある鹽酸加里の會社は、次から次へこ倒れて行つて、残るものはたつた三つになつた。N氏は人の顔さへ見るに得意さうに以前の話を持ち出して

「さうだい君、僕が豫言したやうに會社が本當に三つになつたから驚くぢやないか。」

司令官と一兵卒

「豫言者約翰のやうな顔をして言ひ言ひして居る。」

遠歐米軍の司令官バアシング將軍が、ある日自分の兵卒の宿舎を巡視に出かけた事があつた。多くの兵卒が風琴を鳴らしたり、骨牌を弄つたりしてゐるなかに、たつた一人、一番年齢の若さうなのが、人の居ない隅つこで、じつと書物に読み耽つてゐるのが將軍の氣をひいた。

將軍はづかづか其の若者の方に近づいて往つた。

「何を讀んぢるな。」

若い兵卒はひよいと後ろを振かへつて、怖く立つて敬禮した。そして愛相つ氣のない調子で返辭した。

「はい、本を讀んでました。」

「本は解つゝる。將軍は蟹のやうに殿つべらしい顔をした。だが、何の本だか訊いとるのぢや。若い兵卒は今まで讀み耽つてゐた書物を黙つて將軍の手に渡した。將軍はちらと表紙の名前に

眼をやつたが、それだけでは何の本だか解り込めないらしく、中味を二三ページめくつてみて、やつと自分達にはとても解りさうにない本だ、こいふ事だけが解つたらしかつた。將軍は書物から離した眼をじつと兵卒の顔に注いだ。

「かなり難かしいこゝが書いてあるらしいが、お前にこんな本が解るかいい。」

「はい、解ります。」

若い兵卒はきつぱりと言ひきつた。

「ほう、それは偉いな。」將軍は胡散さうな顔つきをして、書物を兵卒の手に返した。「だが、さうしてお前に夫が解かるな。」

「何うしてつて、別に不思議はありません。」若い兵卒は心もち顔を染めながら言つた。「私はこの本の著者なんでございますから。」

「ほう、お前がこの本の著者ぢやいお言ひか。」

バアシング將軍は慌てたやうに二つ三つ瞬きをして、じつと兵卒の顔を見た。尊敬すべき若い著作家は、別段異つた顔もしてゐなかつた。馬に似た人間の多い世の中に。

新聞の購讀中止

数多い新聞雑誌の讀者のなかには、新聞雑誌を自分一人のために出来てゐるものゝ信じて、少しでも自分に面白くない、もしくは關係の薄い記事を見るに、直ぐ蟹のやうにぶつぶつ呟き出す者がある。

米國で聞えた新聞紙紐育トリビユウンの創立者ホオレエス・グレイイリイは、優れた新聞記者の多い米國でも、ミりわけ優れた記者として聞えた男だが、ある日政府筋の役人に會ふに、その役人はいつにない嚴つべらしい顔をして言つた。

「グレイイリイ君、君にはお氣の毒だが、僕は今日限り君のこの新聞を禁めたよ。さうも社説の議論が氣に喰はないもんだからね。」

「さうか、それは困つたな。」新聞記者は一寸驚いたやうな表情をした。「だが、仕方がない、社説が氣に觸つたこいふなら。」

その翌日グレイイリイはまたその役人に會つた。新聞記者は言つた。

「君は昨日僕がこの新聞を禁めたと言つてゐたつねね。」
役人は得意さうに煙をすうと吹いた。

「さうだ、確かに然う言つたよ。」

新聞記者は腑に落ちなさうな顔をした。

「でも、不思議な事もあるんだね、僕は今こゝへ來がけに、社に寄つてみたが、いつもの通り機械も動いてるし、社員もみなせつせつ働いてたよ。君が禁めたつていふのに、随分訝しうぢやないか。」

役人は慌てゝ手をふつた。

「君それは違ふ、ひさい違ひだよ。僕が禁めた言ふのは、新聞の發行をぢやないんだ。唯購讀を止めたといふに過ぎないんだ。」

「え、購讀を止めた事なんか。」新聞記者はわざと驚いたやうな素振をしてみせた。「何だ、馬鹿馬鹿しい。君一人購讀を止めた位で、それで新聞の記事を何うかしようなんて、そんな大それた考へは持たない方がいゝんだよ。新聞は君ひみじりの爲めに出來てるものぢやないんだからね。」

前大統領の嘘

米國の前大統領タフト氏が、ある時自分の政黨員から頼まれて、Somervilleの田舎町に講演に出かけて往つた事があつた。講演が無事に済むで、その晩タフト氏は、田舎町の狭く苦しい旅籠屋に、象のやうな大きな體軀を投げ出して、ぐつすり寢込むだ。

あくる朝、食事を早く済ますと、タフト氏は直ぐに停車場に急いだ。田舎の旅籠屋で、氣のながい訪問客につかまつたら、こんな酷い目に遭ふかも知れないといふ事をタフト氏はよく知つてゐた。だが、停車場に乗りつけてみるに、氏があてにした汽車は特別急行で、そんな田舎町の驛へは立ち停まらないといふ事がわかつた。

タフト氏は當惑した。外套の隠しに兩手を突込むで、停車場前の廣つ場を歩きながら、大きな靴の踵で暴に地面を蹴散らしてみたら地面を蹴つたところで急行列車がこまる譯でもなかつた。

さうかうするうちに、タフト氏はいい事を考へついた。で、早速停車場から鐵道管理局あてに次のやうな至急電報を打つた。

「大きな團體客が待つてゐる。特別急行列車を Somerville の停車場にこめてくれまいか。」
暫くするに、管理局から返電が来た。タフト氏はその電報をあげてみて、にやりとした。なかには次のやうに書いてあつた。

「承知した。」

時間が来るに、急行列車はけたたましい地響きをさせながら入つて来た。前大統領は手提鞆をさけながらのつそり客車に入つて往つた、するに、擦れ違ひに出て来た列車長は、がらんとしたブラットフォームを見渡しながら不思議さうにはやいた。

「大きな團體客つてここに居るんだらう。」

「それは乃公の事だよ。」

タフト氏は済ました顔で言つた。

列車長は黙つて前の大統領を見上げた。成程大きな團體は一寸した團體客ほどの重みがありさうに思はれた。

二人は「ははは」の聲を合はせて笑つた。

硯と殿様

大養木堂の「硯の話」(大阪毎日所載)は、那の人の外交談や政治談よりはすつこ有益だ。その硯については面白い話がある。徳川の末期に鶴笑道人といふ印刻家があつた。硯の善いのを澤山持ち合せてゐるが、その一つの蓋に大養堂の筆で「天然研」を書いたのがあつた。阿波の殿様が夫を見て、自分の秘蔵の研七枚までも出すから、取り替へては呉れまいかとの談話があつたが、鶴笑はなかく「諾」は言はなかつた。

呉れぬ物が猶ほ欲しくなるのは、殿様や子供の持つて生れた性分で、阿波の殿様は、望みこあらば何でも呉れてやらうから、達て「天然研」を譲つて貰ひたいと執念く持ちかけて来た。鶴笑は一寸顔を曇らせた。

「ぢや仕方が無い、阿波の國半分だけ戴く事にしませう。」

と切り出した。鶴笑の積りでは夫でも大分見切つた上の申出らしかつた。何故かいつて阿波の國は半分割いた處で別段差支もなかつたが、硯だけは半分に割つては何うする事も出来なかつた。

那の内閣や政黨を毀す事の大好きな木堂ですら、『鋒』みやらを見るためには、硝酸銀で硯を焼かなければならぬ、そんな勿體ない事が出来るものぢやないさいつてゐる位だから。
だが勘定高い殿様はそれを聞くさ、
『仕方がない、この硯は鳴門の瀬戸は俺の力にも及ばぬものさ見えるて。』
さ、溜息を吐いてあきらめた。殿様がこの場合鳴門の瀬戸を思ひ出したのは賢い方法で、人間の力で自由にならないものは澤山あるのだから、その中からそんな物を引合ひに出さうさ自分の勝手である。恚うして斷念がつけばそんな廉價な事は無い筈だ。

古松研

先日硯阿波侯についての話しを書いたが、姫路藩にも硯について逸話が一つある。藩の家老職に河合寸翁といふ男があつて、頼山陽の硯が大好きなので聞えてゐた。
頼山陽を硯に比べたら、那の通りの慷慨家だけに、ぶり／＼憤り出すかも知れないが、實際の事を言ふさ、河合翁は山陽よりもまだ硯の方が好きだつたらしい。珍しい硯を百面以上も集めて

百硯筆筒さいつて凝つた筆筒に藏ひ込んで女房や鼠なさは滅多に其處へ寄せ付けなかつた。
同じ藩に松平太夫といふ幕府の御附家老があつて、之はまた『古松研』といふ紫石端溪の素暗しい名硯を持合せてゐた。何でも此の硯一つで河合家の百硯に對抗するさいふ代物で、山陽の賞めちぎつた箱書さへ添はつてゐるので、硯好きの河合はい、機會があつたら何でも自分の方に捲き上げたものださ、始終氏神様に願掛けしてゐたさいふ事だ。
ある日河合と松平は例のやうに碁を打つてゐた。河合は態さ一二番負けて置いて、それからそろ／＼、
『何うも今日は厭に負が込む。こんな日には賭碁でもしたら氣が引立つかも知れない。何うだい貴公には古松研、拙者には沈南蘋の名碁があるが、那を一つ賭けてみようぢやないか。』
さ切り出して見た。
松平は二つ返事で承知をした。
『お氣の毒だが、沈南蘋は拙者が頂くかな。』
なご、戯談を言ひ言ひ、また打ち始めたが、かね／＼お賽錢を費つてゐる氏神様のお力で、河

接吻

合は手もなく松平を負かして、名高い「古松研」は到頭河合の手に渡つて了つた。
 維新後河合家の名親はそれ／＼百観筆筒から飛び出して知らぬ人を買ひ取られて往つた。大阪の八田氏の賣立會に出てゐた「金星銀絲硯」なども其の一つだが、例の「古松研」は今神戸の某實業家の手に入つて、細君以上に可愛がられてゐるさういふことだ。

マベル。ボードマン嬢さういふのは、米國の赤十字社でちやき／＼の働き手だが、嬢の意見によるこ、赤十字の勤務は、ひゞり戦時のみでなく、平常の衛生状態をも、もつこ立派にし、そして出来る事なら天國へ送る死人の健康状態をも申分の無いものに仕なければならぬのださうだ。
 嬢は先頃南米地方へ旅行をした事があつた。その折ある地方で、皮膚の赤茶けた土人が、地面に蹲居つて玉蜀黍の煙管で脂くさい煙草をすばすばやつてゐるのを見かけた。

ボードマン嬢は雌狗のやうに鼻を動かした。そして言つた。
 「爺や、お前そんな脂臭い呼吸をして天國へ往けるさお思ひかゝ。」

「ひひひ……」土人は齒の扱けた口で笑ひ出した。

「脂臭え呼吸だと言はつしやるが、おいら死ぬ時や呼吸引き取りますだよ。」

むかし道命さういふ名高い坊さんがあつた。怖ろしく聲の美しい人で、お經を誦むその調子が自然に律呂に合つて、まるで音楽でも聴くやうな氣持がするので、道命が法華を誦むさなるこ、大峯から熊野から、住吉から、松尾から色々の神様が態々聴きに來たものだ。そんな折には、道命は一寸後を振り向いてみて、

「今日も神様が來てるな……。」

さ、得意になつて一段と聲を張り上げて讀んだ。

道命は和泉式部さういふ好い仲だつた。道命だつて男だから女を愛するのに不思議はないが、僧侶さういふ身分に對して稍不都合だと思はれる向は、さうか成るべく内聞にして置いて欲しい。道命も名僧だし和泉式部も聞えた歌人の事だから、ある夜式部の家で寢て、翌る朝何喰はぬ顔で寺へ歸つて、例のやうに法華を誦みにかゝつた。

ふさ後方を振り返つてみるこ、いつも見馴れた立派な神様達の代りに、薄汚い乞食のやうな佛

様が一人居る。道命はお經を誦みさして訊いた。

「貴方は誰方ですかい。」

佛様は一寸お辭儀をした。

「私は五條西洞院邊にゐる佛ぢやが、つね々々評判のお前様の讀經を聴きたい〜と思つてゐたが、平素は梵天帝釋なごのお入來があるので遠慮してゐた。所が今日は前様の身體が汚れてゐるから、他様はお出でがない、そこで遣つて來ましたぢや。」

成程氣がついてみるに、道命は前の夜和泉式部と好い事をした口を、其儘滌がないでお經を誦んでゐたのだつた。

英雄の觸體

清教徒の英雄オリヴァ・クロムエルの觸體はオックスフォード大學の圖書館に珍藏せられて世界に名高いものだが、其後メエラント附近の牧師キルキンソンが発見したものが、今一つ倫敦の考古學博物館に納まつてゐる。つまり頭をたつた一つしか有なかつた英雄に、觸體が二つ出た

事になるのだ。

政治家や實業家には「良心」を、詩人や音楽家には「心臓」を幾つも持合せて、夫を自慢にしてゐるのがある。その事を思ふに、クロムエルの觸體が二つ出たところで格別差支はない。或はもつと捜したらもつと出るかも知れない。

山科の上醍醐寺の寶藏に「平中將將門」の觸體がある。桐の二重箱に入れて、大切に藏つてある。將門が醍醐の開基理源大師の法力で縛められ、梟し首に遣つたのを残念がつて、首が空を飛んで來たのを拾つたのだといふが、事に依つたら、大師が申請したのかも知れない。

ある夏醍醐に遊んでゐるに、その頃の京都府知事O氏が山へ上つて來た。山の坊さん連は知事に何を見せたものだらうか色々證議の末が、

「宋版の一切經や山樂の屏風を見せたところで、解りさうにもなし、やつぱり將門の觸體を見せるに限る。那ならばまさか貰つて歸ることも言ふまいから。」

こ言ふので、寶藏から例の觸體を出して見せた。

O氏はためつすがめつ觸體を見てゐた。恰ど梅雨時分の事で、觸體からは官吏や會社の重

役の古手から出るやうな、微臭い香氣がふんとした。

「成程よくは判らないが、矢張將門の骨らしいな。こゝに叛骨が出てゐる工合から見ると……」

暫く経つてから、知事は櫛つたさうな顔をして言つた。

「へえ……叛骨と申しますと……」

坊さんが安つほさうな頭を突き出した。

「いゝさ。こゝの骨さ、叛骨といふのは……」

O氏は扇の端で一寸觸體の後部を突つた。

「むかし蜀の曹操が關羽の頭を見て、此奴は叛骨が飛び出しているから叛反をすると言つた……」

「へえ、其方も矢張り叛反をおしやした。争はれんもんぢすなあ。」

坊さんは感心したやうに頸窩へ手をやつた。

見ると、O氏の頭にも、安つほい坊さんの頭にも、夫らしい骨が一寸飛び出している。なに飛び出してゐたつて心配するが物はない。叛反にも色々ある、男爵になりたいのも、金持の權家が欲しいのも、實際叛反には相違ないのだから。

机

今の中村歌右衛門の父、芝翫は随分常識外れの妙な癖で聞えた男だが、この俳優の数ある癖のなかで一番面白いのは、そら火事だといふに、みんな遠方でも構はない、印半纏を引つけて直ぐ飛び出した事で、火の粉の散るなをうろく、駆けすり廻つて、歸途には茶飯の一杯も掻き込んでいゝ氣で納まつてゐた。

今一つ妙な癖は指物が好きで、閑さへあれば何かこつ／＼指物師の眞似事をしてゐたが、手際はから下手な癖に講釋だけは他一倍やかましく、鉋、鋸などは名人の使つたのでない。手にしなかつた。中でも一番文句が多かつたのは指物に使ふ木で、那邊でもない恁様でもない。贅を言つてゐるが、一度なぞは一日土藏に入つてこつこつやつてゐて、日の暮れ方に漸々外へ這ひ出して來た。

「かう見ねえ、立派な煙草盆が出来上つたよ。」

見ると歪形の煙草盆を大事さうに掌面に載つけてゐる。もしやと思つて土藏を覗いてみるに、女

房が一番大事の唐木筆筒をすつかり引つ剥してしまつてゐたさうだ。噂によるに、國學者のNさんもよく指物をした。洒落た机が拵へたい、夫には伐つてから百五十年以上経つた材木で無いさ、狂ひが出来るからさういつて、方々捜し廻つてゐるうち、下谷の古い薬舗で恰好の看板を見つけて、漸く夫を手に入れた。

脚には何がよからう、名人の吹いた尺八が面白からう。さうだ、夫に限るさういつて、閑にまかせて方々の道具屋を尋ね歩いた。

「お店には名人の吹いた尺八がありませんまいか、四本ばかりでいゝんだが……」

仕合せ道具屋は名人を拵へる事にかけては、其道の師匠よりもすつこ傑れた腕を持つてゐるので、Nさんは十日も経ぬうちに名人の吹いた尺八を三本まで手に入れた。

だが机の脚は馬の脚と同じやうに四本無くてはならない。あこの一本を發見するためにはNさん二週間程無駄足を踏んだ。二週間さういへば十四日である。男が女を忘れるには三日あれば十分だ。女が男を忘れるには七日で不足はない筈だ。二週間も経つ間にNさんはすつかり机の事を忘れてしまつた。忘れてよかつた。すべて自分に都合の悪い事は忘れるに越した事はないのだから。

山 禿

講道館の嘉納治五郎氏は、書畫を娛み度いが、正眞物の書畫は値段が張つて迎も買へないからさういつて、書畫代用の妙案を實行してゐる。

夫は他でもない相模や紀州の海岸で、人里離れた、眺望のいゝ山を買込んで、自分の別荘地としておくのだ。別荘地さういつたところで、堀立小屋一つ建てたのでは無く、夏になると、南向きの恰好な足場に天幕を張つて、飯だけは近くにある田舎町の旅館から運ばせる事にして、日がない一日天幕を出たり入つたりして自然を娛むのだ。

「眞物の山水のなかへ浸つて、自分も景物の一つになつて暮らす氣持は、雪舟の名幅を見るよりも、すつこ氣が利いてゐるからな。」

ミ氏は言ひくしてゐる。

そなただつたら何も自分で山を買はなくとも、何處でも構はない景色の美しい土地へ勝手に天幕を持込んだらよかりさうなものだが、嘉納氏に言はせるに、然うは往かない。

「人間には所持慾つて奴があつて、自分の有にしないでは落付いて娯まれないのだ。兎一つ棲まないやうな禿山だつて、自分の有にするこまた格別だからな。」

成程聞いてみれば無理もない、世の中には髪の一毛一本生へてない禿頭を、自分の持物だといふだけで、毎朝磨きをかけてゐる人間もある事だから。

「相模や紀州の突端だけに、往來が不自由で、さうくは出掛けられないが、然し雪舟の名幅だつて、何時も掛け通しにして置く譯のものでは無い、一年に一度が精々なのを思ふと、夏休みに一度でも禿山を見舞つたら、夫で十分ぢやないか。」

と言つてゐる、嘉納氏は、

「さういふ雪舟代用の山だつたら、一度見せて貰ひ度いものだ。」

と愛相を言ふ人があるに、急に顔の相好を崩して

「是非見て貰ひ度い、富豪が雪舟を見せ度がる格で、禿山でも自分の者になるに、矢張見て貰ひたくてなあ。」

風景畫好きの嘉納氏が雪舟の代りに禿山を堀出したまでは差支ないが、これを美人畫好きに應

用したらどんな事になるだらう。

お

水

一心寺に元和の往時、天王寺で討死した本多忠朝の家来九人を葬つた墳のある事は、誰もがよく知つてゐる筈だ。

忠朝は生きてゐる間は、鐵の棒を揮りまはす外には何の能も無かつた男に相違ないが、死んでからは面白い内職にありついでゐる。内職といふのは、禁酒の願を聞くといふ事なのだ。一體男に禁酒させるのは、女に有難がられる第一の功德で、世の中に仕事といふ仕事は澤山あるが、女に有難がられる仕事はさび行き甲斐のあるものは無い。

忠朝の墓前に小さな壺があつていつも蓋がしてあるが、中には銀のやうな水が溢れてゐる。酒を断たうとする者は、その水を戴いて飲む、何日の間にか酒嫌ひになるといふ事だ。

ある日其處を通りかゝると、頭を島田に結つた十七八の女が、壺から水を掬むで、家から持つて来たらしい硝子瓶に入れてゐるのがある。

「何うするんだね。」

「訊くミ、」

「旦那は酒癖が悪うおますよつて、ぶぶうに入れて上げるのだつせ。」

「女は『救世主』のやうな、おせつかいな顔をして私を見た。實際女は私に、その飲物のなかへ色々な物を摘み込むのが好きで溜らぬらしい。夫が酒断の水であらうミ、鹽であらうミ、莫見比澄であらうミ、悉皆持合せのおせつかいからする事なので、男は目を閉つて謹んで夫を戴かなければならぬ。」

ハウプトマンの『沈鐘』を読むミ、鐘師のハイリツヒが山の上で怪しい女ミ酒を飲んで踊つてゐるミ、村に残した子供二人が大事さうに小さな瓶を提げて坂を上つて来る。瓶のなかには何かあるのだと訊くミ、悲しさうな顔をして

「母様の涙ですわ。」

「いふ條がある。」

母様の涙は少し鹹つほいが、忠朝の墓の水は冷つこい。さちらも妙に酒飲みの阿父さんには効

力がある。

性

慾

トルストイ伯は、息子のイリヤが十八歳の頃、ある日屏風の裏表で背中合せになつて、

「イリヤ、こゝでは誰も聞いては居ないし私達もお互に顔が見えないから、恥かしい事は無い。」

お前は今日まで女と關係した事があるかい。」

「訊いた。」

息子のイリヤが

「否、そんな事はありません。」

「答へると、トルストイは急に歎息をし出した。そして子供のやうにおい／＼聲を立て、泣き出すので、息子のイリヤも屏風の裏でしく／＼泣き入つたといふ事だ。」

トルストイは私に相談して泣いた譯でも無かつたから、何故息子の返事を聞いて泣き出したか解る筈もないが、察する所、自分が若い頃の不品行に比べて、息子の純潔なのについに知らず感激

させられたものらしい。
T 大学のM博士は、自分が近眼の原因をある學生に訊かれた時、次の室の夫人に聞えないやうに聲を低めて、

『無論本も讀んだには讀んだがね、然し本を幾ら讀んだからつて、人間は近眼になるものぢやない。僕は學生時代にね……』と『安小説』の表紙のやうに一寸顔を紅くして『氣耻しい譯だが性慾の自己満足を餘り行り過ぎたもんでね……』

と言つて、口が酸っぱくなる程性慾の自己満足を戒めたさうだ。

M博士が自分の近眼と性慾の自己満足を結びつけて、深く後悔して居るのは善い事だが、世の中には近眼者といつても澤山居る事だし、その近眼者が皆が皆まで博士のやうな『後悔』を持合せてゐるまいから、達て近眼を耻ぢよと言つた所でさう／＼耻ぢもすまい。

聖アントニウスは那の通りの道心堅固な生涯を送りながら、猶側の人目に見える淫性慾の煩悶に陥つてゐた。アントニウスの眼の前には毎夜のやうに裸の美人が映つて、聖者を誘惑しようとして有ゆる戯けた姿をして踊り狂つてゐたといふ事だ。

男の聖者が多く女の聖者を渴仰するに對して、女の聖者は大抵男の聖者に歸依をする。ロヨラは聖母マリヤの信仰家であつたが、婦人の多くはナザレの耶穌と精神的結婚を遂てゐるのだ。もし耶穌が那の年齢で髪の毛の縮れた女房でも迎へてゐたなら、大抵の女は教會で欠伸か居睡りかをするだらう。實際女は猫のやうなもので、鼠のゐない時には屹度欠伸か居睡りをする事を知つてゐる。

女の手

少し談話が古いが、日獨の國交が斷絶して、獨逸の日本留學生が一纏めに店立を食はされた時の事、皆は和蘭經由で英吉利に落ち延びようとして、日を定めて一緒に伯林のレアター停車場を發つた。

何がさて、急場の事なり、書物や古履や日本魂などいふ、やくざな荷厄介の物は、皆一纏めに下宿の押入に取残した儘逃げて來たので、皆は腑抜のやうな顔をして溜息ばかり吐いてゐた。もしか兵隊さんの大きな面が窓越しに覗きでもしようものなら、皆は護謨毬のやうに一度に腰掛

から飛上つたかも知れない。
 汽車がレアナアの次ぎの驛に着くに、一人の若い娘が入つて来て空席に腰をおろした。夫を見
 るに其邊の黄いろい萎びた顔が一度に灯が点いたやうに明るくなつた。——夫に何の無理があ
 らう、娘の直ぐ隣には、A 醫學士がゐた。醫學士は、女をバラビンのやうに掌面に丸め込む事に馴
 れてゐる男だ。

皆は言ひ合せたやうに、眼を閉ぢて睡つた風をしてゐた。醫學士は娘に向つて、一言二言話し
 てるうちに、例も女を蕩す折にするやうに、掌面の講釋を始めた。支那の哲學者が言つたやう
 に（A 醫學士は哲學者さか、袋鼠さか、自分の知らない物は悉皆支那に棲んでゐると思つてゐる
 のだ。）人間一生の「幸運」は掌面の恰好に大きさに現れてゐるさういふ前置で、

『お嬢さんのご僕のと、何方が掌面が大きいでせう、一つ比べてみませんか。』

と言つて、安々に娘の暖さうな掌面を、不恰好な自分のとをびたりと合せたと思ふに、その儘
 凝り握り締めた。

狸寝入の連中は、もう胸をわくわくさせ出した。娘が別に振切らうもしないのに味をしめた

醫學士は、圓まつちい娘の首根つこを抱いたと思ふに、いきなり唇を鳴らした。

『うまい事を行つたのう。』

すぐ前のK 法學士が、溜らなさうに喚いて眼を露くし、皆は一度に眼を開いて笑ひ出した。
 娘はたうさう居溜らなくなつてこそ、次の室に逃げ出したさうだ。

國境へ立退きのどさくさにも、まだ女の唇を忘れないのは流石に醫者だけある。醫者といふ
 者は、死人の枕もとに坐つて、藥代の胸算用が出来る程餘裕のある人間だ。

メフィストフェレスは若い學生に、女の手を握らうと思へば醫者になれと勧めた。實際醫學は
 ご詰らぬ學問も少ないが、唯一つ女の手が握れるので埋合せがつく。

奉

納

ある彫金家が法隆寺の峯の藥師で取調べたところに據るに、お藥師様に奉納物の鏡には、随分
 傑れた價値のものも少くなかつたが、同じ献上物の刀劍は皆なまくらで、鏡に比べたらんで談
 話にもならなかつたさうだ。峯の藥師は祈願を籠めるに、靈驗のあらたかなので聞えた佛様で、

大願成就の曉には、その祈願者の身につけた物のうちで、一番大切な物を奉納しなければならぬ言傳へになつてゐる。

身につけた物のうちで、一番大切な物といふは、往時はいふ迄も無く男には刀、女には鏡で無ければならなかつた。といふ譯で、峯の薬師には刀劍鏡がぎつさりあつて、何れも素晴らしい名作揃ひだといふ噂だつたが、調べてみるに鏡には逸品が鮮くないのに、刀は揃ひも揃つてなまから許りとは飛んだ愛嬌である。

これで見ると、女には正直者が多いが、男には佛様の前でもペテンを行き兼ねない手合が少なくないといふ事になる。願を掛けて願が叶ふ。掛けた當座は腰の業物を奉納しようと思ひながら、願が叶ふといふ夫が惜しくなつて、飛んだ贖物で胡麻化してしまふ。お薬師様が刀の鑑定に下手で、加之に無口だから可いやうなもの、若しか犬養木堂のやうな鑑定自慢で、口汚ない佛様だつたら溜つたものでは無からう。

しかし今では女も男に負けぬ程なつた。大隈侯が願を掛けたら、屹度義足を奉納する、貞奴だつたら桃介さんの心の臓でも納めよう。彼等は孰方も、もつと立派な掛替のあることを知つ

てゐるから……。

醜女の家

伊勢の山田から二里ばかりの在所に磯村といふ土地がある。言ひ傳へによるに、白拍子静が母の磯禪師はこゝに住むでゐるのださうで、禪師の血統は其後も傳はつてゐるが、産れる娘は皆醜婦揃ひである。

これは静が人並外れた美人だつたので、多くの男にも苦勞をさせ、女自身にも悲しい夢ばかり見て來たのを思ふに、もう美人は凝り凝りだといつて、

「娘が生れます事なら、いつそ醜女にしてやつて下さい。」
ご神様に祈願を籠めたのが、引請けられたからださうだ。

美人を生ませて下さい、願を籠めたところで、神様は滅多に承引しては下さらないが、醜女を孕ませて下さいと頼むに、大抵はお引請になる。お引請になるのは、何も神様の手並が拙くて醜女の方が「度手頃なからでは更々ない。神様は女に哲學を教へようになさるからだ。」

女は美人に生れるこ、悲哀が多い、『藝術』が必要な所以だ。醜女に生れると紀念めなければならぬ『哲學』が無くてはならぬ譯である。

女 連 れ

七月三十一日午後六時過ぎの事、阪神電車の梅田停留場から神戸行の電車に乗込んだ。鈴が鳴つて電車がこれから出かゝらうとした時、席の真中程から慌しく衝立ち上つた若い男がある。その男は目敏く自分の兩側を見渡した。

『何うだ。みんな野郎ばかりだ。女氣ミいつたらこれつばかりも居やしない。』

と誰かに話してもしてやうな調子で、

『次ぎを待たう、次ぎまで待たなくつちや仕方が無い。』

と言ひ捨てゝあつた下りて往つた。

皆は氣が注いたやうに車のなかを見渡した。成程男ばかりだ。揃ひも揃つて、安つほい顔に安つほい帽子を被つた男ばかりだ。

『成程野郎ばかりだな。はゝゝ……』

誰かど詰らなさゝうに笑つたが、夫でも誰一人續いて下りようとはしなかつた。

下りた男は何所の誰か判らない、女が好きなのか、男が嫌ひなのか、それも判らない。次ぎの電車で望み通りに若い美しい女ミ差し向ひに坐る事が出来たらうか、それもまた判らない。

女は教會へ往くにも、地獄へ落ちるにも好い道連たるを失はない。眞實の事をいふこ、始終一緒に居ても厄介なものだが、さうか言つて離れても居られないのが女の取柄である。

男ばかりの電車は、少し逆上氣味で獸のやうに風を切つて飛んだが、漸く大物まで来て一人の女を乗せる事が出来た。女ミいふのは四十近い、四角い顔をした、愛國婦人會の幹事でもしさうな女だつた。

女を賢くする法

今中座で『マクベス』を演つてゐる東儀鐵笛氏に、誰かが
『君も義齒の数が殖えたやうだが、今のうちに戀でも試つておいたら何うだね。』

と言ふこ、東儀氏は那の牛のやうな大きな眼をぐりぐりさせて
『人間も横鼻禪一つで子供の枕もこで蚊を焼いて歩くやうになつちや、もうから意氣地もない』
と嘆してゐた。

舊文藝協會當時、東儀氏が例の明けつ放しの氣質からちよいと松井須磨子に戯談でもいふこ
側で見てゐる島村抱月氏は、

『東儀君、松井を可愛がるのは止して貰ひ度いもんだな。』

と倫理の教師のやうな悲しさうな顔をして、

『君が可愛がるこ子供が出来るが、僕が可愛がるこ頭が出来るんだからね……』

流石に島村氏は學者だけに巧い事をいつたものだ。

『君が可愛がるこ子供が出来るが、僕が可愛がるこ頭が出来る。』

ほんまに然うだと東儀氏は感心をして、又と戯談を言はなくなつた。

女に頭を拵へるには、島村氏のやうな溫和しい學者に可愛がつて貰ふのもよいが、一番良いのは戀人に棄て貰ふ事だ。女は男に突き放されるこ、一度に十年も賢くなる。

親切

むかし津山藩主の何とかいつた奥方は、餘程格氣深い性だつたこ見えて、殿の愛妾を縊め殺した上、脛の肉を切り取り、夫を羹にして何喰はぬ顔で殿が晩酌の膳に上しておいた。殿が何の肉だこ訊くこ、

『貴方様の御好物でございますよ。』

こいつて、にやりこ笑つたといふ事だ。

大和屋の妓濱勇は、亡くなつた秋月桂太郎こ好い仲だつたが、いつだつたか秋月が病氣の全快祝に、赤飯だけの工面はついたが、帛紗の持合せが無いので思案に餘つて濱勇に相談した事があつた。濱勇にしても色氣は有り餘る程たつぶり持合せてるが、肝腎のお錢といつては一文も無かつた。こいつて男の頼みを無下に斷る譯にも往かなかつたので、思案の末が唯一枚きりの縮緬の腰巻を外した。

『これなこ染替へておこし』

こいつて新しく色揚をして、帛紗に仕立て、間に合はせたさうだ。
畫家のミレエの細君は貧乏で食べる物が無くなつた時には、雲脂だらけな頭をした亭主を胸に抱へて、麴麴の代りだといつて、熱い接吻をして呉れたものださうだ。
散錢に色々文字替りがあるやうに、顔立で別けるさ女にも色々種類はあるが、大抵は皆男に親切なものさ。

心得

新橋の老妓M子はその往時、雛妓として初めて座敷へ突き出された時、姐さんから、假にも妓の忘るまじき三箇條の心得を説き聞かされた。

三箇條さいふのは、第一、お客の悪てんがうに腹を立てぬ事。第二、晴衣の汚れを氣にしない事。第三、七里けつばいお客に惚ない事、萬一惚ねばならぬ時は、成るべくよほくの老人を見立てる事。

M子は、この三箇條の心得を、ちやんこ頭に疊み込んでお座敷に出た。M子はその頃まだ男よ

りも、チヨコレエトの方が好きな年頃だったのでお座敷で客に惚れる程の冒險はしなかつた。よしんば什麼冒險好きな妓でも、チヨコレエトの代りに男に惚れるやうな心得違はしない筈だ。妓といふものは、十人が十人、先づチヨコレエトを喰べて、夫から徐々男に惚るものなのだ。

だが、M子はおこの二箇條には、お座敷へ出る早々、ぶつ突かつた。其の時のお客は、若い醫者で、ごんな醫者にも共通な自惚だけはたつぷり持合はせてゐた。で、耳を嚙んだり、鼻先を押へたり色々な戯けた振をしてM子に調弄つた。

M子はてんで頓着しなかつた。夫が癪に觸る言つて、お客はM子の頭から熱痢の酒をぶつ掛けた。酒は肩から膝一面に流れた。紅い長襦袢の色は透綾の表にまでしみ透つて来たが、M子は眉毛一つ動かさうとしなかつた。

姐さんは夫を聞いて、大喜びに喜んで、代りの晴着を拵へて呉れた。お客は酔から醒めて、眞青な顔をして謝りに来た。匙加減や見立違ひで人を殺しておいて、託言一つ言つた事のない醫者にまつて、謝りに来るのは、魂を嘔吐すよりも苦しかつたに相違ない。

燒 棒 杭

神様の数多い作品のなかで女が第一の傑作であるといふ事は、多くの婦人雑誌が主張する所で、自分も夫に就いては少しの異議もない。女の美しさ——それだけでも十分なのに、加之にまた女の狡さ、これを傑作と呼ばないのは盲目である。

怒ういふ神様の傑作も、竈の前へ置きつ放しにしておくに、何時もなく煤ばんで来る。するに浅果な男心は直ぐ我樂多のやうな、ぞんざいな扱ひ風を見せて、何うかするにその存在までも忘れたりする。

この頃西洋新聞を見るに、ある男女が結婚して四五年経つに、互に鼻に附き出して、顔を見るのも厭になつた。そこで寧ろ別れようといふ事で、日を定めて辯護士の許に落合つて、其の手續をする事に談話を運んだ。

その日になつて、女は素晴しく着飾つて来た。身動きする度に、絹摩れの音がして、麝香猫のやうな香がぶん／＼する。男は眩ひがさうになつて来た。

「見違へる程美しいぢやないか、何うしたんだね。」

「いえね、貴方にお別れすれば、獨身でも居られないしと思つて、嫁入口を捜しに往つて来たんですわ。」

「怖しく早手廻しだな、良いのが見つかったらう。」

男は吐き出すやうにいふ。

「もう御存じなの、貴方にも宜しくつて言つてたわ。」

女は一寸笑つてみせた。

男はいきなり女の手を取つて、少し相談があると言つて辯護士の家を出て往つた。三十分後には、この二人は活動寫眞館に入つて、夫婦鳩のやうに肩を並べて戯け散らしてゐたさうだ。

謹んで世上の女に告げる。男は皆怒うしたものだ。彼は「女」の鑑定家としては最も奥みし易いやくさ者である。

口は調法

英詩人野口米次郎氏の頭の天邊は、夙くから馬鈴薯のやうな生地を出しかけてゐた。氏は無氣味さうに一寸夫に觸つてみて、

「これは帽子を被りつけてゐるからさ。つまり一種の文明病だな。」
と言ひ／＼してゐる。

サミュエル・ジョンソンは自分の英辭書で「大麥」こいふ語の下に
「英蘭では馬の餌。蘇格蘭では人間の食物。」

こいふ皮肉な解釋を下したが、例のT博士の説によるに、日本人は英蘭の馬ではないが、麥飯さへ食つて居れば、哲學を考へたり、女房と唾み合つたりするのに少しの不足も無いさうだ。

T博士は病家を診察して、病人が鯛の刺身や吸物でも食べてゐるのを見るに、
「こんな物を食つちや可かん。麥飯だけで十分さ。」

と言つて、何うかするに自分で其御馳走をべろり食べてしまふ。そして

「俺は構はん、俺は醫者だからな。」
と濟ましてゐる。

その麥飯主義もまだ十分で無いと見えて、T博士は其後「裸頭跣足」主義を標榜してゐるが、近頃また關西地方へお説教旁出掛けて來るこいつてゐる。「裸頭跣足」は言ふ迄もなく、帽子も被らず、履も穿かない主義で、一口にいふと、日本人を生蕃人にしようとするのだ。生蕃人を日本人にしようとするよりも、この方が寧ろ近道かも知れない。

何分T博士の事だ。講演會の席上で上等のパナマ帽でも見つかるに、例の調子で、

「そんな物を被つちや可かん。おや、履まで穿いてるぢやないか。」
と、いきなり引つ手繰つて自分の頭を足に、夫を穿めるかも知れない。

「俺は構はん、俺は醫者だからな。」と言つて。

金森通倫氏が政府の御用辯士で貯金の勧めをしてゐた頃、某處で

「散髪なんか一々理髮床でするには及ばない。めい／＼、缺で剪り切る事にしたら、散髪代だけ儲かる。」

「言つた。するこ、正直な聴客の一人が
「貴方の頭はやはり御自分でお刈りになりますか。」
「訊いた。金森氏は酢を嘗めたやうな口元をして、
「私は自分では刈らない。私は貯金の演説をするので、貯金をするのは貴方方ですから。」
「答へた。——口は調法なもの、出来る事なら、その口に帽子を被せて、尋でに上等な履までも
穿かせてやりたい。」

鯛

劇評家のAさんは剽軽な面白い爺さんだが、夫人はなか／＼の確り者なので、お尻の長い、友
達衆は、平素は餘り寄付かない癖に、夫人が不在だに聞くこ、直ぐ駈けつける。Aさん自身も夫
人が旅立でもするこ「おい、女房が不在になつたから遊びに来い」こ態々使を出して催促する。
ある夏の事、御多分に洩れぬKこいふ老人が、夫人の不在を覗つて無駄話に尻を腐らせてゐる
こ、表を鯛賣が通つた。K老人は急に話を止めた。

「おい、Aさん、那の鯛を呼んでくれ、今日は拙者が一つ御馳走をしてくれるから。」
鯛を買つた老人は、葱を買ひに主人を近所の八百屋に走らせた。茶氣のあるAさんは一錢がと
こ葱を提げて嬉しさに歸つて来た。平素女房にいたぶられてゐる亭主は、女房の不在に臺所の
隅で光つてゐる菜切庖丁や、葱の尻尾に觸つてみるのが愉快で溜らぬものだ。
「や、いゝ葱だね。序でに氣の毒だが、扇子の古いのを一本発見出して呉れないか。」
「扇子？ 扇子を何うするんだい。」
Aさんは片手に葱をぶら提げながら、神聖な夫人の居間を捜して破けた扇子を一本持ち出して
来た。
K老人は料理人がするやうに、手拭を襷に効々しく袂を絞つて臺所で組板を洗つてゐた。
「や、御苦勞／＼、ぢや君は其處で見てる給へ。鯛は惣うやつて下すものなのさ。」
老人は無駄口を叩き／＼、古扇子の骨の間に鯛の骨を挿んで、さつこ抜くこ、魚は器用に
に下された。
「な、なある程、巧いもんだな。」

Aさんは、帝劇で、松助の藝を賞めるやうに、禿頭をふりく感心した。
 小一時間も経つ頃、漸に鯛の「ぬた」が出来上つて、食膳の皿に盛られる。味利きだといつて
 K老人は一箸口へ頬張つて、もぐもぐさせてゐたが、急に變な顔をして考へ出した。思ふふ、は
 た膝を叩いて笑ひ出した。
 『失敗つた。あんまり急いだもんだから、鯛の鱗をふくの、すつかり忘れちやつた。』
 『さうかい……』と言つて、Aさんも箸をつけたが、
 『なに、美味く出来てるぢやないか。』
 ミむしやノ、食へ出した。ほんとに鯛の鱗は除つてなかつたが、不斷女の刺のある言葉を食べつ
 けてゐる者にミつては、魚の鱗なミは何でもなかつた。

書物

ある男が慶應大學の鎌田榮吉氏に、ほんの愛相のつもりで、
 『近頃はどんな本をお読みですか。』

ミ訊いてみた。するに鎌田氏は馬のやうに氣取つて、そして馬のやうにやりとして、
 『近頃は本なぞ些も読みません。世間は私や門野君を——』
 ミ、その折側に居合はせた門野幾之進氏を一寸振り返つて、
 『まるで本ばかり読んでゐる男のやうに思つてる。見えて、よくそんな質問に出會しますがね。』
 ミ言つてゐた。
 先日まで京都圖書館長をしてゐた湯淺半月氏に、
 『君の顔は、ミこかフロオベルに肖てゐる。』
 ミ出鱈目の挨拶をした者がある。すると湯淺氏は禿かゝつた前額をつりミ撫で下して、
 『誰やらそんな事を言つたけが……』
 ミ言つて、その翌日これまで圖書館に持合はさなかつたフロオベル全集の英譯を丸善に注文した
 ミいふ事だ。
 湯淺氏がフロオベルに少しも肖てゐないやうに、誰も鎌田氏を讀書人だと思ふものも無からう
 が、當人になつてみるに、世間がそんな思違ひをしてゐるらしく思はれるものが見える。

だが、慙う言つた所で鎌田氏も失望するが物は無い。本を讀むといふ事は、ココアを啜るといふ事と同じで、何も大した事では無いのだ。澁澤男爵などは、婚の阪谷男が萬國經濟會議に出掛ける饒別にポケット論語を贈つたさうだが、那なごも何ういふ氣でした事か一寸考へ及ばれない論語は善い本だ。善い本だから言つて、夫で人生が引くり覆るものなら、この世は幾度か既う引くり覆つてゐる筈だ。

死人の下駄

人間といふものは、生れて來る時下駄を穿いて來なかつた故か、投身でもして死ぬる時は屹度履物を脱いでゐる。それも其邊へだらしく投げ出さないで、きちんと爪先を揃へた儘脱ぎ捨ててゐる。恰で借た物を返すといった風だ。得て投身でもする人は、借た金を返さないやうな輩に多いが、履物だけは自分の持合せでありながら、借物でももあるやうにきちんと取揃へてゐる。だから芝居でも夫に倣つて、舞臺で情死者の投身をする時には、俳優は極つたやうに履物を揃へる。

それも古風な身投なきの場合に限らず、電車や汽車で轢死をする場合にも、履物だけはちやんこ揃へてゐるから可笑しい。どんな粗忽屋でも下駄を穿いた儘で、軌道に飛び込むやうな無作法な事はしない。家鴨が外套を脱いで鴨鍋へ飛び込むやうに、自殺でもしようといふ心掛のある者は、履物を脱ぎ揃へて軌道に横になる位の儀式はちやんこ心得てゐる。

電車の車掌なども、轢死者があつた場合は、それが男か女か、老人か子供か、馬鹿か伶俐かを吟味する前に、先づ履物を調べる。そして履物がちやんこ揃へて脱ぎ捨て、あるのを見るこゝ、「占めた。やつぱり自殺だつた。」

こゝ、吻み胸先を撫でおろさうだ。だから間違つて電車に轢き殺される場合には、成るべく履物を後先へ、片々は天國へ、片々は地獄へ届く程跳ね飛ばす事だけは忘れてはならない。さもないこゝ、自殺に定められて、慰藉金も貰へない上に、理窟の立たない厭世觀さへ抱かされるやうな事になる。

同じ淵でも投身をする場所は大抵定つてゐるやうに、長い電車線路でも轢死する場所は、大抵見當がついてゐるさうだ。だから、狡い運轉手になるこゝ、其區間だけは速力の加減をする事を忘

れない。

もしか大隈伯が投身でもする場合には、矢張履物を脱いで、義足を露出しに死ぬるだらうか、疑つた者がある。するこ、いや那の人の事だ、死ぬ前に義足は割引で賣つてしまふだらうと言つたものがある。

俘虜研究

伊豫の松山は日露戦争以來俘虜の收容地になつてゐるので、そんな事から、彼地の實業家井上要氏は、色々な方面の報道を集めて俘虜研究を行つてゐる。

井上氏の言葉によると、露西亞の俘虜は一向研究心が無いから、長い間日本に居ても、日本語はからきし解らなかつたのに、獨逸の俘虜は大抵日本語が解る。解るのみならず、上手に夫を操る事が出来る。

物を買ふにも、露西亞の俘虜は行きつけの店へ入つて、お昵懇の積りで笑顔の一つも見せる事を知つてゐるが、獨逸の俘虜には一向行きつけの店も無い、機一つ買ふにも、市中

の雜貨商を二三軒歩き廻つた上、一番廉い店を買ふ事にする。

露西亞人は俘虜になつても、自分は大國の國民だ、澤庵を嚙つて紙ミ木片とで出来上つた家に住んでゐる日本人なごゝ比べ物にはならないといふので、日本人が滅多に手も着けない飛切の上等品の買込むが、獨逸人は夢にもそんな贅澤な真似はしない。買ふ物も買ふ物も、みんな日本人が手に取らうもしない下等品で、値段が廉くさへあれば、喜んで買ひ取る。

だから露西亞の俘虜は何時でも借金だらけで、「靈魂」が抵當になるものなら、書入れに少しの躊躇もしないが、可憎日本では「靈魂」の相場が安過ぎるので、詮事無しに自分達が本國から送つて貰ふ筈の月給を抵當に、行きつけの店から借り出すものが多かつたが、獨逸人は借金どころか毎週定つたやうに貯金をする。もしか日本の監督將校が首でも縊りさうな顔をしてゐるこ、

『何うだ金が必要なのか、利子さへきちんこ拂つたら、幾らでも立替へるぞ。』
こいふやうな事をいふ。

露西亞人はあゝした暢氣な、お人好しの國民だから、俘虜になつても、例のオプロモフ主義で喰つては寢轉び、偶に女の顔を見てにや／＼する位が落だが、獨逸人になるこ例の研究好きで、

暇さへあると何か取調を始める。誰だつたか獨逸人を地獄へ墮したら、屹度地獄に伯林との比較研究を始めて、地獄の道にも伯林の大通のやうに菩提樹の並樹を植付けた。夫には自分に受負はせて呉れたら、格安に勉強するでも言ふだらうと言つたが、松山に居る獨逸の俘虜で日本の紋の研究を始めて、材料をまつさり集めてゐるのがあるさうだ。
獨逸の俘虜は物を買ふのに、屹度雨降の日を選つて出掛ける、雨降りだこ、日本人がうるさく付き纏はないから、鞆一つ買ふにも町中歩きまはつて、ゆつくり値段の廉いのを捜す事が出来るからさうだ。

天

才

一部の畫家仲間には天才人言はれた青木繁氏は借金の名人で、こんな畫家でも出合頭にこの男が取り出したくなつたさういふ事だ。尤も畫家なさいふものは、無駄口も同情も他一倍持合せてゐる癖に、金さいつては散錢一つ持つてない輩が多いが、さういふ輩は財布を開ける代りに、青

木氏を自分の宅に連れ込んで、一月二月は立養ひをしたものださうだ。
青木氏が東京に居られなくなつて浴衣一枚で九州落をした事がある。その折門司か何處かで、自分が子供の時の先生が、土地の小學校長をしてゐるのを思ひ出した。青木氏は倒れ込むには恰好の家だこは思つたが、流石に着のみ着の儘の自分の姿が振りかへられた。
所へ魚釣の歸途らしい子供が一人通りかゝつた、手には小鮒を四五尾提げてゐる。青木氏は懐中の寫生帖から子供の好きさうな畫を一枚引き裂いて、夫を小鮒の二尾程取り替つこをした。
『いゝ物が手に入つた、これさへあれば大手を振つて先生の家へ倒れ込まれる。』
青木氏は獨語を言ひく、久し振に校長の宅を訪ねた。校長は玄關へ飛び出して来た。(念のため言つておくが、學校教員さいふものは自宅では立關番をしたり、子供の襦袢を洗つたりするものなのだ。)
青木氏は校長の顔を見て、
『先日から門司へ寫生に來てゐましたが、今日は一寸釣りに出掛けて、歸り途に丁度お門を逆り掛つたものですから……』

と言つて辯術のやうに小鮒を校長の鼻先で振つて見せた。校長は、『さうか、よく訪ねて呉れた。』
 と言つて、手を執る許りにして、青木氏を座敷へ引張り上げた。
 何處を何う言ひ繕つたものか、青木氏は其儘二月程校長の宅に平氣でごろ／＼してゐたさうだ。——これを天才といふに何の不思議もない筈だ。他人が顔を根めないでは居られない事を、平氣で遣つて退ける事が出来るのだもの。

虱

今日阪神電車に乗るに、私の前に齡の頃は四十恰好の職人風らしい男が腰をかけてゐた。木綿物だが小瀟洒した身装をしてゐるのにメリヤスの裾袴のみは垢染んで薄汚かつた。閉てきつた鍔戸に烏打帽の頭を當てがつて、こくり／＼居睡りをしてゐたが、電車が入物を出た頃に、ひよいミ頭を持ち直して、ぱつちり眼を開けた。そして手早く胸釦を外して、シャツを裏返したと思ふに、指先に何かちよつぱり爪むで左の掌面に載けた。——よく見るに、會社の重役のやうに血を

吸つて眞紅になつてゐる虱なのだ。
 虱は慌てゝ其邊を這ひ廻つたが、職人の掌面は職人の住てゐる世界よりもすつ／＼廣かつた。虱は方角を取り損つて中指にのほりかけた。生れて唯一度も運を擲んだ事のない掌面だけに、指も普通よりはすつ／＼短かつたので、虱は直ミ指先に上りきつた。
 職人はわざ／＼皆に見えるやうに中指を鼻先に持つて来て、四邊を見廻してにやり／＼笑つた。此無作法な風を見て誰一人怒り出さうもしなかつた。皆は顔を見合せて苦笑ひするより外に仕方が無つた。

虱に小つほけな馬車を牽かす蚤飼の話は噂に聞いてゐるのみで、實地見た事はないが、虱は唯もう其邊を這ひ廻るのみで、藝人としては一向價値が無い。
 職人は暫くそんな悪戯をしてゐたが、最後に袂を探つて、マッチを取り出したと思ふに、ぱつ／＼火を磨つて虱の背に當てがつた、この懶惰な藝人は手脚をもじもじさせてゐたが、びち／＼爆ぜたやうな音がしたと思ふに、身體はその儘見えなくなつてしまつた。恰ど耶穌の死骸が墓のなかで紛失したやうなもので、不思議は四福音書にあるやうに、職人の掌面にもあるものなのだ。

狐と狸

「人は自分の蛋を殺すには、自分の流儀を使ふ外には仕方が無い。」
——佛蘭西人はよくこんな事をいふが、眞實だなと思つた。

兵庫の場末には化狸が間違つて婆さんを叩き殺した者があるさうだ。そんな過失のないやうに狸退治の極意を一寸こゝにお話するこゝ（何うか成るべく口の中で低聲で讀んで欲しい、さもない狸が立聞するかも知れないから）狸はよく雨夜に出て悪戯をする。春雨のしきり降る折、夜道を一人通るこゝ、だしぬけに傘が重くなる事がある。

「狸だな、やい誰だと思つてるんだ。間違ふない。」
獨語を言ひく、つつきり狸が傘の上に乗つかつてゐるものと思つて、誰でもが唯もう無中になつて頭の方ばかり氣にする。

だが、是は飛んだ間違ひで、實はこの時狸は傘の柄にぶら下つてゐるのだ。だから夜途で雨傘が重くなつたら、いきなり拳を固めて厭さう程柄の下を擲つてみる。すると、狸は其儘氣絶

をするか、さもなければ這ひ躡つて屹度謝罪をする。
序でに狐退治の極意を披露するこゝ、田舎の一軒屋なごでは、夜が更けるこゝ、狐がきん／＼扉を叩いて悪戯をする事がある。その時狐は後向になつて持前の太い尻尾で扉に觸つてゐるのだ。さういふ折には何氣ない調子で、

「どなた？」

こ訊いておいて、暫くしてから扉を開けるこゝ、狐は屹度其邊の小蔭に身を潜めてゐる。

態さぶつくさ言ひながら、また扉を閉て切るこゝ、直ぐ後からきん／＼こ聞える。

「どなた？」

こ扉を開けるこゝ、狐は既う居ない、三度目が愈々の正念場で、扉を閉めて暫く待つてゐるこゝ、興にはづんだ狐の脚音がして、尻尾の扉に觸る音が聞えたか聞えぬかに、矢庭に扉を引開けるこゝ、後向きに尻尾を振りあげた狐は、機みを喰つて闖越しに土間に轉け轉んで來るので、直ぐ手捕りする事が出来る。

以上狐狸退治の秘傳、親類縁者たりこも極内證の事ノ、

高野の英靈塔

工學博士田邊朔郎氏は、軍人軍屬のためには靖國神社を始め、色々の鎮魂の道具があるのに、學者や藝術家にはそんな設備が少しも無いのは國家として國民として片手落な次第だ。これだけは是非何とかしなければいふので近々高野山に素晴しく大きな英靈塔を建立する考へださうだ。考へは結構だが、自體學者や藝術家なさいふ連中には、旋毛の曲つたのが多いから、英靈塔を建てたからさいつて、其儘成佛はしなからう。尤も學者や藝術家は生前忙しく暮した故で、まだ高野山を見ないで死んだ輩も多からうから、博士の手で無賃乗車券でも配つたら、其人達の靈魂も一度は屹度登山するに相違ない。

高野山には色々な人の骨がたんまり納まつてゐる。那は彌勒出世の曉には、弘法大師が皆の手を執つてお迎へに出られる誓願があつたからださうだが、大師の考へでは高々三十人位の積らしかつたが、今のやうにたんまり納まつては始末に困るだらう。そんな事から彌勒菩薩も今では一寸顔出しが出来なくなつたらしい。

むかし熊阪長範が山で一稼ぎする積りで、夜が更けて高野へ登つた事があつた。大きな伽藍は皆門を閉ぢてゐるなかに、唯一つ小さな灯の見える所がある。覗いてみるに、敷くちやな坊さんが一人立つてゐて、附近には人間の骨がごろ／＼轉がつてゐる。長範は自分が盜賊に來た事も忘れて理由を訊くに、坊さんは例の彌勒出世の大師の誓願を説いて聞かせた。

長範はそんな事なら、自分も御一緒に願ひ度いと言ひ出した。長範の腕は盗みをするだけに寸も長かつたし、納骨には打つて附けの代物であつたが、山でもまだ一稼ぎしなければならぬので一寸出し惜しみをした。で、石でもつて前歯を一つ叩き折つた。

『ちや、前歯を一つ納めて置ませう。何卒お忘れのないやうに。』
と言つて駄目をおして、其の齒を坊さんの掌面に載けた。前歯はこれまで幾度か嘘をついた齒ではあつたが、その齒が一本無くなつたからさいつて、今後嘘を吐くの別段差支へる譯でもなかつた。

長範は好い物を納めた。だが、時期が少し早過たやうだ。もつと齡をこつて、入齒をする頃にして遅くは無かつたのだ。彌勒は今だにぐづ／＼してゐられるから。

酒

少し前のことだが、Kは「いふ若い法學士が夜更けて或る料理屋の門を出た。酒好きな上に、酒よりも好きな妓を相手に、夕方から夜半過ぎまで立て續けに呷飲りつゞけたので、大分酔つ拂らつてゐた。」

街燈の灯も點つてゐない眞ッ暗がりに、Kは自分の鼻先に脊のひよろ高い男が立塞がつてゐるのを見たのだ。酔つ拂がよくするやうに、Kは丁寧に帽子を取つてお辭儀をしたが、相手は會釋一つしないので、Kは少し艶然とした。

『さあ、退いたく。成り立の法學士様のお通りだぞ。』

Kは「ろんこの眼を見据えて怒鳴るやうに言つたが、相手は一寸も身動きしようしなかつた。喧嘩早いKは、いきなり拳をふり揚げて、厭いふ程相手の頭をこやしつけた。が、相手は蚊の止つた程にも感ぜぬらしく、Kを見下してにや／＼笑つてゐる。若い法學士は侮辱されたやうに暴にいきり立つて、

『野郎、焦うして呉れるぞ。』

こ、いきなり兩手をひろげて武者振りついたと思ふに、力一ぱい頭突を食はせた。法律の箇條書で一杯つまつてゐるはずの頭は、案外空っぽだつたと見えて、雑話の空殻を投げたやうに、かんこ音がした。

Kは腦振邊を起して其儘引くり返つて死んで了つた。相手は相變らず身動もしない。身動しないのも其筈で、相手は無神經な電信柱で、酔拂らつたKは夜目に夫れを人間に見違へて喧嘩をしたのだつた。

Kは生き残つた母の手で青山の墓地に葬られたが、毎晩のやうに其の夢枕に立つて、頭の向が違つてゝいふので、母は人夫を雇つて掘返してみるに、かんこ音のした頭は果して南向に葬られてゐた。母親は泣き／＼向きを直して葬つて了ふに、それ以來また夢枕に立たなくなつたさうだ。

床

柱

最近に『東西文學比較評論』にいふ著作を公にした高安月郊氏は、飄逸な詩人風の性行をもつて知られてゐる人だが、すつこ以前自作の脚本を川上音二郎一派の手で本郷座の舞臺に上ほしたことがあつた。

ある日の事、月郊氏が暮合の時間を川上の樂屋で世間話に過してゐるこ、そこへ其の當時の大立物伊藤春畝公が金子堅太郎末松謙澄なごいふ子分を連れてぬつこ入つて來た。何でも御最良がひに劇を見に來たのだが、例の氣紛れで貞奴でも調弄はうこ思つて樂屋口を潜つたらしかつた。川上夫妻は狭つ苦しい自分の樂屋に、鷹揚な伊藤公の姿を見つけたので流石に一寸ごまごまごした。見るこ床の間の上座には作者の月郊君が坐つてゐる。公爵なごいふものは、床柱か女かの前で無ければ坐るべきものでないと思つてゐる川上は、成るべくなら、床柱か女房の眞中に公爵を坐らせてみたかつた。で、眇のやうな眼つきをして一寸月郊君の顔を見た。月郊君も何うやら川上の意は察したらしかつたが、實は伊藤公は生れて初めての同座で、今

後またこんな機會があらうこも思はれない。夫に自分は今度の劇では作者であり、伊藤公は普通の觀客に過ぎない。作者が觀客に座を譲るやうな氣弱い事では、作者冥利に盡きるかも知れないからこ、其の儘素知らぬ顔で凝り尻を落つけてゐた。

流石に伊藤公は無頓着で、悪い顔もせず、入口にどかりと胡坐を掻いたまゝ、例の女の唇を數知れず嘗めた口元を歪めながら、芝居話に興じてゐるが、お伴の小さい政治家二人は苦り切つた顔をして闕際に衝立つてゐたさうだ。

何によらず小さいのは慘なものだが、こりわけお伴の小さいのは氣の毒なものだ。

鬼

陰陽博士で聞えた安部晴明の後裔が、京都の上京に住でゐる。ある時日の暮れ方に急ぎ歩で一條戻り橋を通りかゝるこ、橋の下から『安部氏々々々』と言つて自分の名を呼ぶものがある。立停まつてみると、附近には誰一人姿に見えない。

安部氏は凝り耳を傾けた。聲は橋の下から聞えて来るらしい。掠めたやうな調子で、
 『自分のもとと洛中を騒がした鬼だが、餘り悪戯が過ぎるこあつて、貴方の御先祖安部晴明殿のた
 めに、この橋の下に封ぜられて了つた。晴明殿は其後私の事なきはすつかり忘れて了はれて、程
 なく亡くなられましたが、私こそい、災難で、橋の下に封ぜられた儘、あつたら月日を過ごして
 了つた。何うか一生のお願ひだから封を解いて貰ひ度い。』
 と言ふのだ。

安部氏は亡くなつた父親の遺言にも、鬼の事は一向聞いて居なかつたので流石に一寸驚いた。
 家へ歸つて色々古い書物を涉つて見るに、封を解く呪文だけは何うにか了解めたが、さて封を解
 いたものか何うか一寸始末に困つた。

『折角先祖が封じたものを解いて、もしか鬼が自由思想か、社會主義かを鼓吹するやうな事があ
 つては溜らないからな。』

安部氏は恚うも考へたので、其後はこんな急用があつても戻り橋だけは通らない事に定めて
 るに聞いた。

新約全書の鬼は豚の腹のなかに逃げ込んだので、豚はすつかり氣が狂つて海に入つて死んで了
 つたさうだ。安部氏も一つ思ひ切つてその鬼を戻り橋の下から引張り出して、大學の構内にでも
 追ひ込んだら面白からう。那邊には頭に鬼の入るだけの空地を有つた學者がちよつと居る筈だか
 ら。

お湯嫌ひ

最近希臘の各地方を巡遊して歸つて來た京都大學のH助教は、幾ら古い物好きなH氏だつて
 まさか希臘ばかりを見て來た譯では無からうが、希臘だけは幾度見て來たこいつても差支ない。
 希臘ほど失望させられた土地はない、那地は唯想像でだけ楽しむでるればいゝ國だ。甚くこき下
 してゐる。

H氏の言ふのによるに希臘には道路が無い、旅館が無い、山には樹が無い、河には水が無い。
 やつと旅屋を見つけて、泊り込むに、直に南京蟲がちくちく蝨しに來るので連も寝つかれない。
 留學費のなから買込む大罐の蚤取粉を、借氣もなくばら撒いてみたところ、一向利き目が無

夫から今一つの難澁は洗湯の高い事で、入浴料が日本の貨で一圓二十錢。H氏の白状による。氏は二ヶ月餘りの旅に湯に入つた事は唯の一回だけしか無かつたといふ事だが、夫も眞實の事か何うだか判らない。もしか人の悪い誰かが、

『なに、希臘では偉い學者はみんな湯に入らぬものなんだ。』

と言ひでもすると、H氏は其口の下から、

『眞實は僕も一度だつてお湯に入つた事はなかつた。』

と白状するかも知れない。

だから、希臘人といふ希臘人は皆垢まみれで、側へ寄つてみるに(考古學者だつて、偶には活きた人間の側に寄らないにも限らない)酸っぱいやうな匂ひがぶんぶんする。

『ソクラテスや、アリストオトルも、矢張あんな匂ひがしたかも知れないと思ふに厭になる。』

とH氏は鼻をしかめて厭がつてるが、そんなに厭がらなくともよからう。幾ら異教徒嫌ひの神様だつて、まさかソクラテスとH氏を同じ檻には打込むまいから。

湯好きに日本人にも、随分な湯嫌が居ない事はない。俳優の中村鴈治郎なども其の一人で、彼はこの頃よく東京の劇場へ出るが、あの通りに白粉をべた塗りする職業でありながら、一興行二十日間一度だつてお湯に入る事はないさうだ。彼はそれが爲めに清潔好きな東京の女に嫌はれるかも知れないが、持つて生れた癖だけに、平氣で垢塗れで通してゐる。

どくだみ

むかし京都の島原に五雲といふ俳諧師が居た。毎月二十五日には北野の天神へ怠らず参詣つてゐるが、或日雨の降るなかに弟子が訪ねて往くに、五雲は仰向に寝て、兩手を組んで枕に當てがひ、兩足をあけて地面を踏むやうな眞似をしてゐる。何うしたのですと訊くに、今日は北野へ参詣の例日だが、雨が降るもんだから、恙うして北野へ往復りするだけの足敷を踏んでゐるのだと言つた。

面白いは、この足敷を踏むに連れて、沿道の人家や立木やが次から次へ眼の前に幻となつて展開する事で、五雲は仰向になつて

「や、那處にいつもの兩替屋の寡婦が見える。」
 こ、獨りで娛しんでゐたさうだ。

亡くなつた上田敏氏は子供の時靜岡へ往く道中、てくてく歩きで箱根を越えた。丁度梅雨晴れの頃で、ある百姓屋の軒續きに、心臟形の青い葉が一面に蔓つてゐる畑を見て、

「おやく、藪菜がこんなに植はつて……」

と獨語をいふこ、そこに居合はした百姓が笑ひく、

「坊ちやま、これあ藪菜ぢやござりましねえ、坊ちやまの食べさつしやる甘藷でがさ。」
 こ言つて教へて呉れたさうだ。

上田氏はその後大學の教室に立つて、歐羅巴の近代文學を論ずるやうになつても、梅雨晴れの日光が硝子窓にちらちらするのを見るこ、いつも其の藪菜の葉が幻のやうに想ひ出されるこ言つてゐた。

蟲の聲

むかし公家の某が死にかゝつてゐるこ、不斷顔肥懇の坊さんが出て来て（醫者が來るのが遅過ぎる時には、きつこ坊主が來るのが早過ぎるものなのだ）枕頭で珠數をさらさら言はせながら

「早く念佛をお唱へなさらなくつちや。さもないこ中有でお迷ひになるかも判らないから。」

こ、甚く心配さうな容子で、最後の念佛を勧めにかゝつた。

看護の者がべそを搔いたやうな顔をして、

「中有と申しますこ……」

こ訊くと、坊さんは嘘をつく者に附物の小鼻を妙にびくびくさせて、

「廣い荒野でな、西も東も判りませんぢやて。」

こ低聲で答へた。

その談話を苦しい間にも病人が洩聞をした。病人は骨張つた顔を坊さんの方へ捻ぢ向けた。
 「お上人、そんな荒野にも秋が來ますと、蟲が鳴きませうな。」

お上人は急に行詰つたやうな表情をして、てれ隠しに一寸空咳をした。無理もない、中有の野に蟲が居るか居ないかといふ事は、このお經にも書いてなかつた。お上人はもしか間違つてゐたら、お布施を返す積りで獨斷の返事をした。

「さやうさ、野さいひますから、蟲もゐるにはゐませうて。」
公家は死顔に寂しさうな笑を洩らした。

「蟲さへ居る事なら、中有さやらに迷つてもいゝと思ひます。だからお念佛だけは申しますまい。」
坊さんは苦笑ひをして口の中でぶつ／＼言つてゐたが、病人はたう／＼お念佛の一遍も唱へないで亡なつてしまつた。其の中有の野さやらには蟲が居たか居なかつたか、今だにはつきりしない。上田敏博士の追悼會が、先日知恩院の本堂で營まれた時、九十餘りの骸骨のやうな山下管長が緋の袈裟を被つて、丁寧にお念佛を唱へた。そして其の聲一つで博士も淨土へ送り込まれたやうな顔をして入つて往つた。

自分は夫を見た時、博士のやうな「死」の手で騙し打に遭つたものが、念佛の聲位で成佛出来るものかと思つた。よしまた成佛出来るにしても博士は成佛すまいと思つた。

生前佛道を信じなかつたものゝ、大學教授だつたから無切符で淨土へ入れる言ふかも知れないが、博士も矢張その公家と一緒に、蟲の聲に心を惹かされてゐるに相違ない。

赤梅檀

むかし觀世家に豊和といつて、家の藝は素より香間にも一ぱし聞えた男がゐて、金春流の某こ仲がよかつた。で、閑な折に、ちよい／＼遊びに往くこ、金春家では香好な豊和への御馳走こあつて、いつも秘藏の香を炷いたものだ。

豊和はそれを嗅ぐたんびに、

『さうも素的な香だ、何でも曰く附の物に相違ない。』

こは思つたが、迂濶に言ひ出して、主人に物惜みをされても詰らないと思つて慥／＼黙つてゐた。言ふ迄もなく、金春家の主人は香道には極く素人で、今時の文學者と一緒に蚊取線香の匂ひを嬉しがる方の男だつた。

ある時、香道の家元峰谷貞重が江戸に下つて來た。豊和は峰谷の顔を見るこ、懐中から懐紙に

包んだもの取出して、蜂谷が生命より大切の鼻を引揚るやうにして夫へ押しつけた。

「一寸聞いて呉れ給へ。實は先日から君が下つて来るのを待たばれて居たのだ。」

包は豊和がこつそり金春家から取て来た香爐の灰であつた。

蜂谷は自慢の鼻を一寸その灰に當てがつたと思ふに、眼を圓くして吃驚した。

「これあ君、赤梅檀ぢやないか、何うも素的なものを炷いてるね。」

「え、赤梅檀だつて！」

豊和は然う言ふなり、直ぐ表へ駈出して往つて金春家を訪ねた。

豊和は何氣ない振で、色々世間話を持出してゐるが、ふと思ひ出したやうな口風で、

「時に近頃御無心の次第だが、先日中いつもお炷きになつてゐた那の御秘藏の香ですな、あれを少しばかり戴かれますまいかな。」

と切出して見た。

金春の主人は金でも貸せぬかと思ふに、香の話なので、

「いや、お安い御用で……」

と、その場で件の香を小指の先ほご割つて呉れた。

豊和は夫を左の掌面で戴いたと思ふと、しかと右の掌面で押へつけた。そして嬉しまぎれに大きな聲で言つた。

「や、有難う。今だから言ひますが、此香こそ名代の赤梅檀でさ。」

「え、赤梅檀だつて。」

金春家の主人はさう聞いて、直ぐ手を延ばして香を取り戻しにかゝつたが、豊和は敏捷く内懐

中にしまひ込んでしまつた。

骨董好きの富豪に教へる。いつ迄も秘藏の骨董を失ふまいとするには、自分達の家族を成るべ

く物識にしておくが一番手堅い。

隠 し 藝

蕪村の畫の門人に田原慶作といふ男がある。ある日日の暮れ方に師匠を訪ねるに、蕪村の家では戸を締め切つてゐる。宵つ張の師匠だのに、今日に限つて早寝だと思つた。(蕪村が宵

つ張なのに何の不思議もない筈だ、彼は講家であるに共に、夜更しが附物の俳諧師でもある。慶作は出直さうと思つて、逡巡してゐるに、寢鎮まつた筈の家の中から、ばた／＼物を叩く音がして、折々何か掛聲でもするらしい容子がある。

『怪體やな、一遍訊いてみよか。』

慶作はさんとん表戸を叩いてみた。

するに、内から『ごなた？』とふ聲がして、扉は静かに開けられた。確に蕪村の聲に相違ないので、慶作は不審しながら、入つて往くと、其邊ぢうに箒や塵掃が／＼取り散らされて、師匠はひさりで竊々笑つてゐる。

理由を訊くに、女房は娘は女中を連れて、逗留がけで里へ歸つた。其留守事に一寸芝居の真似をしてゐたのださうな。

『こないだ、芝居の芝居を見て、すつかり感じたもんやさかい、ちよつくら真似てみたが、なかなか出来やらんわい。』

蕪村は聲を出して笑つた。

京都のある法學者は、家族がみんな不在になるに、すつと逆立になつて、書齋からのそののそり這ひ出して来て、玄關から臺所まで一廻り廻つて来る癖がある。法學者だけに、この男も色んな事に理窟をつけないでは承知しないが、たつた一つこの逆立だけは理窟をつけてゐない。

理窟が無い筈だ、本人の積りでは逆立は藝術ださうだから。

男といふものは、女房の居る前では公然に行りかねる『藝術』を夫々もつてゐるものだ。芝居の真似事だらうが、逆立だらうが、女房が不在になつたら、さつさとお浚へをするが可い。——これは女にしても同じ事だが、女はかういふ時には、大抵パン菓子を食べるものらしい。それにしても立派な藝術だ。

油が足りない

石油王ロツクフェアラが、ある時自動車に乗つて出掛けようとするに、直ぐ側に何家の兒も知らない六歳ばかりの小娘が立つてゐて、この富豪の顔をしげ／＼と見てゐるのに氣がついた。一體富豪といふものは、十人が十人石のやうに冷たい顔をしてゐるもので、平素人形や阿母さ

んやの莞爾した顔を見馴れてゐる子供に三つては、まるで別世界の感じがするに違ひない。

「叔父ちゃん、何處へ往くの、自動車へ乗つて。」

子供は不思議さうに訊いた。もしか同じ問が紐育の新聞記者からでも訊かれたのだつたら、ロツクフェリアは急に感胃をひいたやうな顔をして、大きな噓でもしたのだらうが、相手可愛らしい子供だけに、にこ／＼して、

「さあ、何處へ出掛けようね、叔父さんは寧ろ天國へでも往きたいんだが。」

と、いつもに似けなく冗談口をきいた。

子供は夫を聞くと、吃驚したやうに眼を圓くした、そして氣の毒さうに言つた。

「お止しなさいよ、叔父ちゃん、天國へ行くには、自動車の油が足りない事よ。」

「然うか、油が足りないか。」

ロツクフェリアは子供の言つた事を繰返し／＼、首を絞められた野鴨のやうな顔をして、暫くは其處に衝立つてゐたさうだ。

「天國へ往くには油が足りない。」

子供さういふものは巧い事を言ふものさ。私は富豪でないだけに、こんな警句がよく解る。

大 き な 鼻

むかし通尖上人さういふ坊さんがあつた。内外諸宗にわたつて博識の名が隠れもなく、自分にも大分夫を自慢に思つてゐた。

ある秋の夜の事、お説教が濟んで、上人はひさく氣持が善さうな顔をしてゐた。一體お説教さか講演さかいふものは、よく出来た場合は聴衆よりも演者の方がすつゝ氣持のいゝもので、監督のやうな眞面目な男でさへ、名高い山の上のお説教を濟ました後は、すつかり好い氣持になつて、汚い癩病患者なごも直ぐ癒してやつた。だから、お説教の濟んだあごで、

「さうも素敵でしたね。皆もすつかり感心しちまつて、もつと何か聴きたさうな顔をしてまさ。」
 と言つてみるがいい。坊さんは屹度お袈裟の袖をたくしながら、手品の隠し藝でもして見せるに極つてゐる。

通尖上人はすつかり上機嫌で、この分ちやぎんな難問が出ようとも、直ぐ解いて聞かせて呉れ

る、ほんごに吾ながら偉い博識になつたものだ。高慢さうな顔つきで、附近をじろ／＼見まはしてゐると、だしぬけに隔ての障子が破れて、なかから大きな鼻が一つ飛出した。おやと思ふうちに、鼻はまたすつこ引込んで障子はもこのやうになつた。

流石の通尖も、これには度膽をぬかれてしまつた。變な顔をして暫く眼をばら／＼させてゐたが、すう／＼席を滑り下りたと思ふこ、その儘見えなくなつてしまつた。あこでよく調べてみるこ大樹寺さいふのに入つて、専修念佛の行をおこなひ濟ましてゐたさうだ。よく／＼自力には凝りたものご見える。

唾

希臘のある皮肉哲學者が富豪に饗された事があつた。哲學者が富豪に思想を説きたがるやうに富豪はまた哲學者に自分の任んでゐる世界を見せびらかしたものだ。

その富豪も皮肉哲學者に自家の邸宅を自慢したいばかりに、飾り立てた客室から、數寄を凝らし

た剪裁の隅々まで案内してみせた。

「如何でけせう、これでも先生方のお氣には召しますまいかな、俺としては相應趣向も凝した積んでけすが……」

怒ういつて、富豪はその大きな顔を、哲學者の方へ捻ぢら向けた。

哲學者は夫には何ごも答へないで、いきなり痰唾を富豪の顔に吐きかけた。富豪は西洋茄子のやうに眞紅になつて憤つた。

「何をしなさるんだ。他の顔に唾をしかけるなんて、餘りぢやごわせんか。」

皮肉な哲學者は落つき拂つたもので、

「いやはや餘り結構づくめなお邸宅なんで、唾が吐きたくなつても、何處にも恰好な場所が見つからないもんですから、ついお顔を汚しましたやうな譯で……」

こ別に謙らうごもしなかつた。

勿論いつの時代でも富豪の顔に靈魂ごは、數あるその持物のなかで、一番汚いに極つてゐるがそれに唾を吐きかけたのは、流石に皮肉哲學者の見つけ物である。

一番無難なのは、哲學者なぞ御馳走しない事だが、もし達て饗はなければならぬとするに、
 (濫澤男が孔子を先生扱ひにするやうに、一體富豪は凡て哲學者が好きらしい。何故かいつて、孔子は色難しい事を聽かせて呉れる上に、滅多に金を貸せなぞ言はないから。)何を忘れても痰壺だけは用意しておく事だ。

幽

靈

ある男が寺へ泊つた事があつた。夜が更けて眼が覺めてみるに、誰だか障子の外でひそく話を
 しをしてゐるのが聞える。氣になるものだから、起き上つて窓から見ると、あかるい月明りの下
 に男と女とが立つてゐる。男は二十四五の、草臥れたやうな顔、女は六十ばかりの皺くちやなお
 媪さんで、談話の模様でみるに、親子さうな調子があつた。
 女は幽靈か知らぬは思つたが、夫にしても二人の年齢が一向合點が往かないので、その儘夜明
 を待つた。東が白んでから、二人が立つてゐた附近へ往つてみるに、小さな合葬の墓があつて無
 縁になつてゐる。訊いてみるに、墓の主人は大分以前二十四五で亡くなり、その女房は久しく生

き延びて、洗濯婆になつて暮しを立てゝるたが、二三年前に六十幾つかで死んだので、こゝに合
 葬したのでさうだ。

夫を聞いた寺の住職は、

「無縁だし、加之に月がよいので、二人も遊びに出たのだつしやる。」

と言つてゐるたが、二人も丁度亡くなつた年齢相應の姿をしてゐたのは笑はずには居られな
 かつた。

男にせよ、女にせよ、連添に死別してから、四十年も生き延びてゐると、色々な面白い利益に
 なる事を覺えるものだ。洗濯婆さんだつて六十迄も存へてゐるうちには、大英百科全書にもない
 やうな智識も獲たに相違ない。さういふ智識から見れば、二十四五で死んだ亭主は全て子供のや
 うで喰ひ足りなかつたらうと思はれる。

夫を思ふに、情死する場合の他は、相手に二世の約束だけはしない方がよい。多くの場合、女
 は男よりも長生をするものだが、來世で皺くちやな女の顔を見るのは、男に比べて胃の薬を飲む
 よりも辛からう。だが、夫れよりも辛いのは、色々な事を知つた女が、生で無垢な昔馴染の男に

出會つた時の事で、女はそんな時には、極つたやうに頭の地を掻きく、其後昵懇になつた男の
數を懷中で數みながら、
『もう何時でせうね。』
ご時間を訊きたがるものなのだ。よく言つておくが、女が時計の針を氣にするのは、大抵逃げ出
したい時に限る。

鐵

扇

今は故人の松下軍治がした、か者だつた事は知らぬ者もないが、譬へば、金でも借りようとか
蔓でも發見やうかといふ目論見で人を訪ねる事があるとする。(松下が金と蔓と、此の二つの用事
以外で人を訪ねやうなごまは夢にも思はれなかつた事だ。)
先づ應接室に通されて、暫くするご隔ての襖が開いて、主人の顔が見える。
『や、入らつしやい。お久しぶりですな。』
松下のやうな男には、誰でもが挨拶だけは成るべく叮嚀にしようとする。挨拶には別に資本が

掛らないで済む事だから。
『何うです。此頃の暑さは、随分殿しいぢやありませんか。』
恙う言つて、主人はにこ／＼顔で椅子に腰を下さうとする。
この時松下は腹一杯の聲で、
『御主人……』
ご喚くご同時に、手に持つた鐵扇で、思ひ切り強く卓子を叩しつける。(松下はこんな訪問には、
いつも『體面』を置いて往く代りに、机の抽斗から鐵扇を持ち出す事に定めてゐる)
主人は卓子の上の葉巻入と一緒に、吃驚して椅子から飛び上らうとする。松下はじろりご夫を
尻目にかけて、
『お氣の毒だがお冷水を一つ下さい。』
ご靜かに言ふ。この場合お冷水だらうが、持參金つきの娘だらうが、相手の氣に入る事なら、主人
はごんな物でも調へようご思つてゐる、恙うなるご、もう占めたもので、松下は希望通り相手の
魂でも引抜く事が出来る。

松下の行り方は、他人を見れば敵と思つた封建時代の遺習で、型としては既う微が生えてゐる。往時の閑人はこんな輩に驚かないやうに、武士道や禪學で膽を練つたものだが、今の人達は、武士道や禪學の代りに、お蔭で『生活難』で鍛へられてゐる。「貧乏」は鐵扇の音に吃驚しないばかりか、鐵扇を質に入れる事さへ知つてゐる。

涙

東京三越の『山之水』展覽會に、故人角田浩々歌客が世界の各地から集めた石と一緒に、塚本博士が出品した瓶詰の黄河の水があつた。

英國のある停車場の驛長は、グラッドストーンが落して往た履の踵を拾つて、丁寧に箱入にして藏つておいたさういふから、黄河の濁り水を克明に瓶に入れて持つて歸つたからさういふつて、別に咎め立もしないが、同じ持つて歸るなら、もつと美しい物を見つけて欲しかつた。

波斯で、亭主に死別れた許しの新しい未亡人さんを訪ねるに、屹度棚の上に大事さうに瓶が置いてあるのが目につく。他でもない、波斯では未亡人さんさういふ未亡人さんは、亭主に死別れて

からは、毎日々々涙を一滴零さないやうに小瓶に溜めておいて、それが二本溜まるに、喪を慶める事になつてゐるからだ。

一雫も零さないやうにするのは、何も追懐の涙が神聖なからでは無い。成るべく早く瓶を詰めて、喪服を着更へてしまひたいからだ、多いなかには亭主の事を追懐しても一向涙など出ないのがある。(夫に不思議はない筈だ。涙は亭主の生きてゐる間に、みんな絞り出してしまつたのだから) そんな輩は涙脆い女を見つけて、一瓶幾らさういふ値段で涙を買取つて、一日も早く喪を済ませさうにする。

ある皮肉家が、昔の詩人は血で書いた。中頃になつては墨汁で書いた。それが極近頃になつては墨汁に水を割つて書くやうだと言つたが、涙にしても水を割つたら、直ぐ瓶に詰まりさうなものだが、さうは仕ないで、縁もゆかりも無い者からでも、矢張正眞物の涙を買ふころに、一寸女房の情が見えて可笑しい。

目薬瓶に涙一杯！ 良人にまつて申分のない値段である。

紋

紋所といふもの、もこは車の紋から起きたといふ説があるが、眞實の事か何うか知らない。徳川家が葵を紋所に用ゐるやうになつたのにも、色々な拵へ物の傳説がある。

酒井家の説によるこ、家康の祖父清康が岡崎にゐた頃、戦があつた。酒井家の主人は氣の利いた男だこ見えて、その折圓盆に勝栗を盛つて主人の前へ差し出した。清康は夫をしつこく見て

「ほう、勝栗ぢやの、これは縁起がい。」

こいつて、硬つばしい掌面に夫を取り上げたこ思ふこ、ばりばり音をさせて噛んだ。

栗の下には葵の葉が二三枚布いてあつた。その日の戦は無事に徳川家の勝ちなつたので、清康は記念に葵の葉を紋所に使ふやうになつたこいふのだ。

本多家ではまた異つた傳説を持つてゐる。本多家の祖先某は、もこ加茂の社家であつたが、豊後の本多莊に流されたので、本多を名乗るやうになつた。

加茂の社家だつただけに、本多家では二葉葵の紋所を使つてゐるこ、夫を清康が見て、

「いゝ紋ぢや、俺の家で使ふ事にしよう。」

こ言つて勝手に取り上げて了つた、もこく加茂の二葉葵には長い葉莖がくつ附いてゐるのだが清康はそんな物は無益だこいつて摘み切つてしまつた。家康の祖父さんだけにこんな事にも儉約だつたこ見える。

ラフカチオ・ヘルン又の名小泉八雲氏は、時偶日本服を着る事があつたが、羽織の紋にはヘルンこいふ自分の名からもじつて、蒼鷺をつけてゐた、鷺はヘルン氏の紋こして恰好な動物であつた。

京都にある若い畫家があつた。畫が拙かつた故か、度々女に捨てられた。だが、何うしても絶念められなかつたこ見えて、羽織の紋所には、捨てられた女五人の名前を書き込んで平氣で夫を被つてゐた。羽織は最初に見捨てた女が拵へてくれたので、地は薄かつたが、女の心よりは長持ちもしたし、價段も幾らか張つてゐた。

男裝婦人

獅子や驢馬も共同生活を営んでるた佛蘭西の女流畫家ロザ。ボナルは、何處に一つ女らしい點のない生れつきで、夕方野路でも散歩してゐるミ、野良がへりの農夫達は、

『へい、檀那樣、今晚は。』

ミ可憐にお辭儀をして、別れ際に後をふりかへつてみて、

『那の小柄な檀那衆は、いつも今時分此邊を徜徉いてるな。』

ミ朋輩に言ひ言ひしたものださうな。

米國にメエリイ・ナルカアといふ有名な婦人がある。この婦人は他の事でもつミ聞えてもよい

のだが、幸か、不幸か、いつも男裝をしてゐるので、夫で一層名高くなつてゐる。

なぜ男裝してゐるかに就いて、この婦人の答へは至極はつきりしてゐる。

『私にミつては女着の袴よりも、ツボンの方がすつミ氣持がよござんすから。』

尤もな理窟で、恚ういふ勇氣のある婦人は、素足がツボンよりも氣持がいゝ事を知つたら、思ひ

切つて其のツボンをも脱ぎ捨てても知れない。

ある時この婦人がマサチウセツツの某市へ旅をした事があつた。途中で道を迷つて甚く當惑してゐるころへ、農夫が一人通りかゝつた。農夫といふものは、どんな時にでも、どんな所へでもよく通りかゝるもので、基督がお説教をしたがつてゐる時にも、追剥が物を欲がつてゐる所にも、

得て農夫がそこへ通り合はせる。そして靈魂を奪られたり、外套を引つ剥かれたりする。農夫といふものは、四福音書へ出るにも、探偵小説へ出るにも、極日當が廉くて、加之に物が解らない

から手数が掛らなくていい。男裝婦人は其の農夫に訊いた。

『一寸お訊ねしますが、某市へはこの道を往きますか。』

『あゝ、おつ魂消た。』

農夫は眼をこすり、言つた。

『俺はあ、何にも知んねえだ。お前様のやうな女子みたいな男初めて見ただからの。』

西依成齋

獨身儒家

西依成齋は肥後生れの儒者で、京都の望楠書院で鳴らし、攝津の今津へも十年ばかり住んで弟子取をしてるので、京阪ではよく名前が通つてゐる。

その成齋の弟子に、度々色街へ出掛けて、女狂ひに愛身を賣してゐる男があつた。いろいろに両親が意見をしてみても、一向効力が無いので、

「一つ先生様の御力で……」

こいふ事になつた。成齋はその弟子を呼びつけた。そしてたつた今朱文公に會つた歸り途だこいふやうな生真面目な顔をして、

「お前は此頃頻りに色町に出深くさうだが、怪からん事だ、以後は屹度慎んだがよからう。」

こい高飛車に吐りつけた。弟子は先生の劍幕がひきいので、兩手を膝の上に揃へて、鼠のやうに縮み上つてゐるこ、成齋

は變な眼つきをして、その手首を見つめた。若い弟子の手首は、妓の握り易いやうに繊細に出来てゐた。

「麻通こいふものは、第一金が掛るばかりでなく、身體の養生にならない。俺なごはそんな遊びを止めてから、今年でもう廿年にもなるが、其故かしてこんなに達者になつた。」

こいつて、先生は大きな兩手を、弟子の鼻先でふり廻してみせた。成程腕つ節は勁さうに出来るが、その二十年こいふもの金なぞたんまり握つた事の無ささうな掌面だなこ弟子は思つた。

弟子は怖る／＼先生の顔を見た。「有難うございました。お言葉は夢にも忘れないやうに心掛けませう。」

こいつて叮嚀にお辭儀をした。「で、一寸伺ひますが、先生は當年お幾つでいらつしやいます。」

成齋は案外吐言の効力が早かつたのこ、自分の達者な腕つ節に満足したらしく、聲を揚げて笑つた。「俺かの、俺は當年九十三になる。」

俳優の家

『してみると……』

弟子は先生が道楽を思ひ止つたといふ二十年前の齡を繰つてみた。そして眼を圓くして驚いた。言ひ忘れたが、成齋は生涯獨身で暮した男である。

ある時門司で若い藝妓が病氣で亡くなつた。流行つ妓だけあつて生きてゐる間には、色々な人に愛相よくお世辭を言つてゐたが、亡くなる時には誰にも相談しないでこつそり息を引取つた。枕許に坐つて看護をしてゐた妹藝妓が、何か言ひ残す事は無いかと訊ねるに、

『三毛猫を空腹がらさんやうに頼みまつさ。』

と言つて寂しさうに笑つた。呉々も言つておくが、其の藝妓が最後まで氣にかけてゐたのは、三毛猫の事で、最良筋のお醫者さんや、辯護士やを空腹がらせな言つたのでは更々ない。

その事が土地の新聞に載つたのが、ふとした事で大阪俳優のGの目に止まつた。Gはその折玉屋町の自宅で、弟子に按摩を揉ませながら新聞を讀んでゐた。で、その藝妓の亡くなつた記事が

目につくミ『呀』と言つたが、直ぐ顔を揚げて悴のCを呼んだ。

『C公、C公は居やへんか。』

C公は隣の室から返事をした。

『何や、阿爺さん。』

Gは聲のする方を覗き込むやうに一寸首を伸ばした。

『そこに居よつたんか。お前那の門司の△△はんミ關係があつたんやろ。そやなあ。』

C公は他事でも訊かれたやうな軽い調子で答へた。

『ふん、關係しとつた。何うしたんや、夫が。』

『△△はん、死によつたぜ。』

『さやか。』

C公は起き上らうとしなかつた。彼は腹這になつて、舶來の玩具を弄くつてゐるのだ。

親子が顔をも根めないで、平氣で自分の情事を話し合つてゐるのが俳優の家庭である。舞臺で人生を演活するためには平常から慙うした囚はれない情態が必要なのか、それこそ舞臺の心持が家

庭生活にまで傳染つてゆくのだらうか。
孰方とも眞實だらう。そしてつゞき眞實なのは、親子のどちらにも取つてこれが一番都合がよ
いからであらう。

果物

馬來半島にツリヤンといふ果物のある事は、一度でも船で那處を通つた事のある人は皆知つて
ゐる筈だ。素敵に美味い上に、素敵に臭味をもつてゐる果物で、一度でもその臭味を嗅いだが最
後、一生懸つたつて、夫が忘れられる物ではない。

だが、喰べ馴れて來るに、そんな臭味でさへ堪らなく懐しくなつて來るさうで、ツリヤンが市
場に出盛る頃には、女郎屋町でさへが不景氣になるといふ事だ。美味い果物を鱈腹食つて女買を
したところで、夫を喧しくいふ印度の神様でもないが、ツリヤンが餘り美味いので、つい財布の
底を叩くやうな始末になるのだ。

獨逸軍の毒瓦斯に對して、ツリヤンを砲彈代りに使つたら、聯合軍に勧めた者がある。命中つ

たが最期殺の刺毛で人間の五六人は殺せるし、命中ならなかつた所で、巧く爆けさへすれば激しい
臭味でもつて、一大隊位の兵士を窒息させるのは朝飯前だといふのだ。

土人達の習慣によるに、ツリヤンを盗んだ者は重く罰せられるが、熟れて自然に落ちたのを拾
つた者は、飛んだ幸福者として羨まれるさうで、氣の長い土人達は、ツリヤンの鈴生に生つた木
蔭で、朝つばらから煙管を啣へて一日凝り待ち通しに待つてゐるさうだ、巧く落ちたのを拾ふ事
が出来れば、美味い果物にありつけるし、落ちて來なかつた處で少しの損もない。そんな時には
定つたやうに晝寝をする事を知つてゐるから。

胃の腑

ラフェエル前派の詩人ロゼツチが、自分の詩集を亡き妻の棺に納めて葬つたのを、後になつて
友達の勧めに隨ひ、妻の墓を掘かへして、詩集をとり返したのは名高い話だ。

新納武藏守は薩摩武士の生粹で、例の戯談好きな太閤様の歌にある、ちんちろりんのやうな長
い鬚を生やした男だつたが、矢張り薩摩者に有りうちの、ちんちろりんのやうに雌を可愛がるの

で聞えた男だった。

ちんちろりんは随分な嫉妬焼きで、唯が他の雄談話でもしてゐるようなものなら、いきなり相手を後脚で蹴飛ばすさうだが、薩摩者もこの點ではちんちろりに劣らぬ道徳家である。

新納武藏に可愛がれてゐた若い小間使があつた。ある日雨の徒然に自分の居間で何だか認めてゐるに、丁度そこへ武藏が入つて來た。(男さういふものは、猫のやうによく女の内證事を發見するものなのだ。)

はつと思つて、女が袖の下へ夫を隠すに、武藏は険しい顔で袖の下を覗き込む。するに、女は意地になつて、よく小娘がするやうに其の反古を口の中に嚙みしめて、ぐつと嚙み下してしまつた。

武藏は女が隠し男に遣る文でも誤解へたものか、激しい嫉妬で顔は蟹のやうに眞紅になつた。そしていきなり女を手打にして胃の腑のなかから其の反古を引張り出した。

反古には優しい筆の蹟で、
『人ならば浮名やたゞん小夜ふけて枕にかよふ軒の梅が香』

認めてあつた。武藏も少しは歌を詠んだ男だけに、ちんちろりんのやうな顔に涙を流して不憫がつた。

歌反古だつたから泣かれたやうなもの、鷹のなかから鷺中櫛の勘定書でも出たらそんな顔をしたものか、一寸始末に困るだらう。

女と薪

この頃發賣禁止になつた、『ボヴリイ夫人』の著者フロウベエルが、ある婦人に戀をした事があつた。婦人はある時伊太利語を彫りつけた葉巻入をこの小説家に贈つた所が、フロウベエルは小説の女主人公が自分の情夫に贈物をする時に、その伊太利語をその儘借用させた。

それを見た戀女は、眞剣な自分の戀を馬鹿にしてゐるさいつて艶くれ出した。溫和しいフロウベエルは色々に辯解をしたが、嫉妬焼きの女は何しても承知しないので、小説家もたうま本氣になつて怒り出した。そして薪ざつ棒をふり上げて擲り倒さうとした。(小説家ださいつて薪ざつ棒を揮りあけないものでもない。ニイチエは女を訪問する時には鞭を忘れなさいつたが、鞭を忘れた

時には薪ざつ棒でもふりあけねばなるまい。

フロウベエルは薪ざつ棒をふりあけた。女は部屋の片隅に顔へながら、まだ野鴨のやうに我鳴り立てゝゐる。この時小説家の頭に若しか擲り倒したら、女は直ぐ告訴するだらうなこいふ考へが矢のやうに走つた。フロウベエルは薪ざつ棒を足もこに投げ出した儘、ふいこ室を飛び出したが、それきりもう歸つて来なかつた。

女が口喧しいからこいつて、警察の手に引渡した男はない筈だ。それなのに男の手に薪ざつ棒を見るこ、女は直ぐ法律の腕に縋らうとする。武器としての女の口は、薪などこ比べ物にはならない、薪は間違つて肉體を叩き潰すかも知れないが、女の舌は一度に靈魂を窒息させてしまふ。

洋

傘

先日物忘れの事を書いたが、獨逸の歴史家モムゼンは専門以外のこゝは何でも忘れつぽいので聞えた男で、ある時大學から歸つて自分の書齋に入るこ、何を思ひ出したものか、卓子の周圍を掃除し出した。見ると寝椅子の上に古綿のやうなものがあるので、ぶつ／＼言ひながら夫を引つ

纏むで反古籠のなかに投げ込んだ。

古綿は急に蛙のやうな聲をして鳴き出した。古綿が蛙に化けるなどは、羅馬の帝政時代にも無かつた事なので、流石にモムゼンも吃驚した。で、側へすり寄つてよく見るこ、古綿のやうな物は、其頃生れたばかりの孩兒であつた。お蔭で學者は細君に小つ酷く吐り飛ばされてしまつた。無理はない、そんな學者の事業だつて、女の生む「孩兒」に比べるこ、ほんの無益物に過ぎないのだから。

早稲田のT博士が、今の高田文相などこ一緒に高野に上つた事があつた。見物も一通り済んでいよ／＼下山こいふ事になるこ、博士はお寺の土間をうろ／＼して、何だか捜し物でもしてゐるらしい。

『何か忘れ物でもあるんですか。』

高田氏は應揚に訊いたが、いつも出掛には夫人にさう言はれつけてゐるので、言葉の調子に何處か女らしい點があつた。

『洋傘が見えないんです、先刻ここへ置いたと思ふんですが……』

博士は薄暗い土間の隅っこを、鶏のやうに脚で掻き捜してゐる。

『洋傘だつたら、君が腋に挟んでるぢやありませんか。』

高田氏は笑ひ笑ひ言つた。氣がついてみるに、博士は大事のく、繻子張の洋傘を小腋に挟んだまゝ、もう一本捜してゐるのだつた。

洋傘は二本あつても、一本を高田氏に呉れてやつたら事は済む。

『眞理』が二つあつたら、博士は首を縊めなければならぬ。

明恵と雑炊

梅尾の明恵上人は雑炊の非常に好きな人であつた。ある時弟子の一人が師僧を慰める積りで、極念入の雑炊を拵へた。念入だといつたところで、何も経節を使つたといふ譯ではない。経節は猫と眞宗寺の好物で、明恵はあんなものは好かなかつた。

明恵は何氣なく膳に對つたが、好物の雑炊が目につくに、につこり笑つた。そして、『今日は御馳走だな。』

こいつて、弟子の顔を見た。弟子は師僧の氣に入つたのが嬉しいと見えて、蒟蒻球のやうな頭を下けてお辭儀をした、

『お上人様が平素からお好きでいらつしやいますから。』

明恵は箸を取て一口頬張つたと思ふに、箸を取つた右の指先で障子の棧を目にも止まらぬ速さで一寸撫でた。弟子は吃驚して見つめてゐるに、明恵は何喰はぬ顔で其の指先を嘗めて、それからまた雑炊を食べようとした。

『盃だらうかな。』

弟子は考へたが、これまで一度だつてそんな眞似は見た事が無かつたので、不思議さうに訊いた。

『お上人様、つかぬ事をお訊き申すやうですが、たつた今貴僧様は障子の棧を撫で、夫をお嘗め遊ばした。那は何のお盃でございます。』

明恵は尼さんのやうに口を窄めて笑つた。

『いや、盃でも何でもない、其方が拵へて呉れた雑炊が餘り美味いものだから、つい障子の埃

を嘗めたのだ。」

成程障子の棧を見るに、埃が白く溜つてゐた。埃は正直なもので、掃除を怠けるに、直ぐ溜るものだなと、そんな場合にも弟子は思った。だが、雑炊が美味いからこいつて、その埃まで嘗めなければならぬ理由が判らなかつた。

明恵は言つた。

「餘り雑炊が美味いので、つい染着心でも出来ては怖ろしいと思つたものだから、そんな事の無いやうに一寸埃を嘗めたまでさ。」

その後弟子が雑炊を煮る時、わざわざ埃を鍋のなかへ掴み込んだか何うか、そんな事は私の知つた事では無い。

道成寺の石段

むかし徳川初代の頃に本願寺の役人に下間某といふものがあつた。亂舞にかけては却々の巧者で、徳川家の前まで、いつも召されて亂舞を舞つてゐた。

ある時、この男が紀州の道成寺に詣つた事があつた。その折も例のやうに拍子を踏みく石段を數へてゐたが、ふと立停つて、不思議さうな顔をして道伴に言つた。

「この鐘樓の石段は、一つだけ土にでも埋もれてゐるんぢや無からうか。今一つ宛踏んでみるのに、何うしても段拍子に合はない。」

道連は可笑しな事を言ふとは思つたが、相手が那の通りの巧者だから、笑つてばかり濟ます譯にも往かないので(世の中には笑つて濟まされる事は澤山ある。)土を掘り下けてみるに、案の定下から石段が一つ出た。

京都の桂離宮は小堀遠州が豊太閤に頼まれて、一世一代の積りで拵へた名園だが、すつと後になつて遠州の孫が、その結構を見に庭へ入つた事があつた。木戸口を潜つて庭石を二つ三つ踏むだと思ふに、ひよいと立停つた儘、

「さうも解らない。」

と、じつと考へ込んでしまつた。

案内の男が、

「何かお解りになりませんか。」
と訊く。

「いや、この石だが、もう少し右に置いてなければならん筈なのだ。」
と獨語のやうに答へた。考へてみるに、一二年前に庭木を入れる事があつて、その折件の庭石を引つ剝したまゝ、植木屋の手で勝手に据え直してあつたのだ。

このやうに、物にはちやんこ拍子といふものがある、この拍子を見別けるやうになるに、物の巧者だといへる。だが斷つておくが、諸君の夫人の顔立が拍子に適はないからといつて、夫は私の知つた事ではない。大きい聲では言へないが、一體女は初つ端から拍子に合つたやうに拵へられてはゐないのだから。

栗

鼠

ある薩摩の殿様に、九十を過ぎてても色々の道樂に憂身を窶さないでは居られないやうな達者な人があつた。

數ある道樂のうちで、殿様は一番變り種の小鳥や獸が好きで、自分の力で手に入れる事が出来る限り、いろんな物を飼つて娛んでゐた。

英雄僧マホメツトも甚く小猫を可愛がつたもので、ある日なぞ衣物の裾に寝かしておくに、不意に外へ出掛けなければならぬ事件が持ち上つた。だが、可愛い猫は起したくなしといふので、わざ／＼大事の衣物の裾を缺でつみ切つて起ち上つたといふ事だ。

政治家のリセリウもまた愛猫家として聞えてゐるが、死ぬる時には遺言で、莫大の遺産金まで猫に呉れてやつた。猫がその遺産金を何う費つたかは、自分がその相談に與らなかつたから、よくは知らないが、唯愛國婦人會や赤十字社に寄附しなかつた事だけは事實らしい。

薩摩の殿様は、ある日籠のなかから、栗鼠と鼻鼠を取らせて喧嘩をさせてみた。栗鼠も鼻鼠も詮事なしに喧嘩をおつ初めたが、栗鼠はふだん殿様が自分を可愛がつて呉るのは、自分の藝が見たいからだらうと思つて、籠のなかで鬪斗返りばかり稽古してゐたので、こんな喧嘩にはすつから用意が缺けてゐた。で、鼻鼠のために啄々に啄かれた。

栗鼠は逃足になつて、いきなり殿様の懷中に飛び込んだが、悔しまぎれに厭しい程主人の脚

を囓んだ。
殿様はその故で四五十日ばかり傷療治をしなければならなくなつたが、傷が治つた後でも別段賢くはなつてゐなかつた。賢くなるには餘りに齡を取り過ぎてゐたから。老人といふものは、こんな場合にも、栗鼠が狂者だつたさか、臍がうっかりしてゐたさか、得て言譯をしたがるものなのだ。

女博士

ケエリイ・トオマス嬢といへば、かなり聞えた女博士で、今は威耳斯のプラン・モウル大學の校長を勤めてゐる。

トオマス嬢はある日の夕方、美しく刈込まれた學校の校庭を散歩してゐた。晩食は消化のいい物でうまく食べたし、新調の履は繊細な足の裏で軽く鳴つてゐるので、女博士はすつかりいゝ氣持になつた。そして出来る事なら天國へ往く折にも、こんな消化のいい物を食つて、こんな軽い履を穿いてゐたいと思つた。

だしぬけに寄宿舎の一室から、けたたましい騒ぎが聞えた。拍手の音さへ夫に交つてゐる。

『何事だらう。』

女博士は静かな眉尻に一寸皺を寄せた。そして天國の黄金の梯子でも下りるやうな足つきをして、かたここ廊下を歩いて、騒ぎの聞える一室の前に立つた。

トオマス嬢はごん／＼扉を叩いた。

『あなた。』

内部から誰かと訊いた。

『It is he. ミス・トオマスですよ。』

女博士は静かに返事をした。

『違つてよ。』

ミなかから突走つた聲が聞えた。

トオマス博士だつたら『It is he.』なんて仰有らずに『It is I』と仰有るわ。』

女博士は困つたなと思つて、其の儘そつと逃出さうとしてゐるミ内部から扉が開いて、悪戯盛

りの女學生が『ばあ』と言つて顔を出した。
 岩野清子のやうに、自分の離婚問題をも、婦人全體のためだに氣張つてゐる女は、恚ういふ折には屹度『We』でも言ふだらう。ああいふ女は、物を考へる折には『私』といふ事を忘れて、新聞の論説なごゝ同じやうに『We』といつて考へ出すことになつてゐるから。

臺灣と考事

岡松参太郎博士の言葉によるに、滿洲に居る時は、頭がはつきり澄んで細かい考へ事や計算やも極樂に出来るが、臺灣へ出掛けるに、頭がぼんやり草臥れてしまつて、考へ事はさんちんかんに、計算は間違ひだらけになる。臺灣に三日も過すに、滿洲に三十日も居た程疲れが出るさうだ。

臺灣のある製糖會社に大學出の支配人がある。年に一度同窓生の會合があるに、いつも遙々東京まで出掛けて来る。そして會が始つて、皆の者が何か議論がましい事でも言ひ出すに、怪訝な顔をして夫に聞きこられてゐるやうだが、暫くするに椅子に凭れた儘ぐうぐう鼻をかいて寢入つて

しまふ。

一頻り喋舌り疲れた連中が、どしんこ一つ卓子を叩いて、

『△△君、君のお考へは何うだね。』

と訊くに、慌て、椅子から飛び上つて、

『さうですね、僕の考へは……』

さいつて、極つたやうにポケットから鉛筆を引張り出し、ちよつと卓子の上に立てゝみて、誰でも構はない、夫が倒れかゝつた方の味方をする。

心安立の友達が、鉛筆もまんざら悪くはないが、いつも那では、餘り無定見ぢやないかといふに、支配人は砂糖臭い大きな欠伸を一つして、

『でも、僕には皆の喋舌つてゐる事が、てんで解らないんだもの。僕も今ぢやすつかり臺灣向きだよ。』

この支配人のいふのでは、臺灣では考へ事は何うしても出来ない。唯二つの選擇があるばかりだ。譬へていつたら執事晩、總督ミ生蕃、砂糖ミ樟腦、成功ミ失敗ミいつたやうなもので、夫を

選ぶにしても、鉛筆は人間の頭よりも、すみ公平に判断するさうだ。

苜

苜

北歐のある詩人は、外へ出掛ける時には、いつも両方のポケットに草花の種子を一杯詰め込んで、根の下りさうな土地を見かけるに、所構はず何處へでもふり撒いて歩いた。

京都の御所を通つた事のあるものは、御苑の植込に、所構はず西洋種の苜苜が一面に生へ繁つてゐて、女子供が皇宮警手の眼に見つかからないやうに、そのなかに躡躡んで、珍らしい四つ葉を捜してゐるのを見掛けるだらう。

この苜苜は、丹羽圭介氏が明治の初年歐羅巴へ往つた時、牧草としてはこんな好い草はないといふ事を聞いて、其種子をしこたま買ひ込んで歸つた事があつた。さて日本に着いてみるに、牛ごころか、まだ人間の始末もついてゐない頃なので、歐羅巴で考へたのとは大分見當が違つた。

さうかさいつて、苜苜を京都人に食べさせる譯にも往かなかつたので（京都人は色が白くなるさへ言つたら、どんな草でも喜んで食べる）丹羽氏は折角の種子を、みんな其邊へぶち撒けて

しまつた。それが次から次へに蔓つて、今では御苑の植込は言ふに及ばず、京都一體にぎこの空地にも、苜苜の生へてない土地は見られないやうになつてしまつた。

苜苜によく似た葉で、淡紅色の可愛らしい花をもつ花酸漿も京都にはよく見かける。この花の原産地は阿弗利加の喜望峯だといふ事だが、何處を何う通つて京都の山のなかにまで來たのか一寸判らない。

蜜

蜂

ある蜜蜂飼養家が何かの用事で印度へ渡つて見るに、野にも山にも花さいふ花が咲きこぼれてゐるので、蜜蜂飼養家は躍り上つて喜んだ。

『印度つてこんな花の多い土地は知らなかつた。こゝで蜂を飼つたら、しこたま蜜が穫れるに相違ない。』

そして、急いで國へ歸るなり、蜜蜂をもつて又印度へ出掛けて往つた。恰ど金持を見つけた賭博打が、骰子を持つて又酒店へ出掛けて往くやうに。

假子ほご意地の悪い物は無い。蜜蜂は箱から取り出されて、美しい香気を嗅ぐに、狂気のやうに花の中を駆け廻つたが、何時まで待つても蜜を拵へようとはしなかつた。それも其筈で、印度のやうに何時でも花のある土地では、蜜の臍線を拵へておく必要も無かつたのだ。蜜蜂飼養家は大事な蜂を失つた代りに、幾らか賢くなつて、郷土へ歸つて来た。人間といふものは賢くなるためには、從來持つてゐた何物かを失はなければならぬとするに、女房や馬に憑けられるよりは、蜜蜂を失くした方がまだ仕合だつた。

文學者のH氏は、文士や畫家が片手間の生産事業としては、養蜂ほご好いものはないといつて一類りせつせき蜜蜂の世話を焼いてゐた。そして蜂に整されない用意だといつて、細君が着古した面帕をすほりこ頭から被つてゐたが、蜂には整されない代りに、たうこ細君に整されてしまつた。

蜜蜂を扱ふのに面帕が要るやうだつたら、女を扱ふには夫を二枚重ねなければならぬ。臆病者に限つて、劍は長いのを持つてゐる世の中だから。

楊

柳

攝津の大物が浦に、片葉の蘆しか生きないといふ傳説は、古い蘆刈の物語に載つてゐる。

むかし基督がエルサレムの何ミかいふ郊外を通りかゝつた事があつた。暖い日で額が汗ばむ程なので、基督は外套を脱いで、そこらの楊の木に引掛けた儘、岡を上つて多くの群衆にお説教をしに出掛けた。

空には小鳥が鳴いてゐるし、お腹には弟子達が焼いて呉れた犢の肉が一杯詰つてゐるし、で、基督はこれ迄にない上機嫌で、親父の神様に代つて、姦通のほかは、大抵の罪はかけ構ひなく、大負に負けて天國へ通してやつてもいゝやうな事を言つた。實際其日はぶらん／＼天國へ旅立でもするには持つて来いといふ日和だつた。

楊の木は自分の頭にすつほり被せかけられた外套を見た。どこかの金持の女が寄附したらしい立派な毛織で、神様の一人息子が着るのに不足のないものだつた。楊の木は自分にもこんな外套が一枚あつたらなあと思つた。聞くともなしに聞くに、基督は今姦通のほかは大抵の罪は許して

もい、やうなお説教をしてくれる。楊の木は片足踏み出したと思ふに、外套を袂いだ儘こそく逃
 け出して往つた。
 お説教が済むに、基督はいゝ氣持で岡の下へおりて来た。見るに外套も無ければ、楊の木も見
 えない、てつきり持逃げされたなと思ふに、基督は楊の木を呪はずには居られなかつた。それ以
 來その郊外には楊の木は育たなくなつたさうだ。
 自分も基督に劣らぬ上等の外套を一着持つてゐる。此頃の暖い春日和には、夫をいろんな木
 に懸けて休むが、一度だつて盗まれた事が無い。日本の木は日本の婦人のやうに、むやみに外套
 を欲しがらないものに見える。

魔法使

役人に嘔吐が多いやうに、瓜哇人には魔法使が多い。日本の女で馬來半島に住んでゐる佛蘭
 西人の妾が、ある時國許に送つて遣らなければならぬ筈の金銭の事で心配してゐるに、そこへ瓜
 哇の魔法使が通りかゝつて、

「お前は金銭の事で屈託してゐるらしいが、さう心配するが物はない、今日午過に、お前の主人
 が頭が痛めるこいひ出す、その折お前は何もなく睡つほくなるだらうから、夫をきつかけに主人
 に相談してみる、屹度金銭は出来る。」
 と言つて教へて呉れた。

女は不審しながらも、魔法使の事は豫て聞いてゐるので、幾分待た居るに、午過になつて、
 案の定主人が頭が痛めるこいひ出し、自分も睡つほくなつて来た。こゝぞと思つてお金銭の一件
 を相談するに、主人は二つ返事で重い財布を投げ出して呉れたさうだ。

瓜哇の魔法使は又かういふ事をする。多くの人の見る前で、砂を盛つた植木鉢へコスモスの種
 子なごを蒔いて、じつに祈禱を凝らす。するに種子が弾けて芽はぐんぐん、砂を上げて頭を出して
 来る。一寸二寸と瞬く間に莖が伸びたと思ふに、最後に小さい花がばつと開く。莖を立たせた基
 督だつて、これ以上の不思議は出来まいと思はれる程だ。言ふ迄もなく基督は神様のお坊ちやん
 で、瓜哇の魔法使は乞食坊主である。

食物と格言

むかし瀧川雪堂といふ男が百人組の頭になつて、當直の行厨につかふ食器を新しく拵へた。その蓋に食事をする度に、見て心得になるやうな文句を書いて欲しいと、學者の大郷信齋に頼んで寄した。信齋は佐藤一齋等の先輩で、鯖江侯のお抱へ儒者であつた。

信齋は自分の學問の底を叩いて、色々利益になりさうな名句を拾ひ集めては比べてみたりした。そして漸く出来上つたのが、平の蓋に、

「咬得菜根百事可做」

汁の蓋に、

「不素餐兮」

飯の蓋に、

「粒々皆辛苦」

こいふ固苦しい文字であつた。言ふまでもなく汪信民や、朱雲や、李紳の往事から拾つて来て戒

めたのだ。

役人や、會社の重役やの辨當箱には、是非書いておきたいやうな文句だが、普通の人には一寸咽喉に支へさうで可くない。こんな文句を毎日眼の前におきながら、辨當をばくつてゐる雪堂

といふ百人頭は、性來齒齲の勁い、胃の腑の素敵に丈夫な男だつたらしい。

そこへ持つて往くと、賣酒郎噲々が、所謂七重の絹で七度濾した酒を飲ませたまひふ、東山の

竹醉館は、表の招牌も、

「この肆の下物、一は漢書、二は雙柑、三は黃鳥一聲」

こいふ洒落た文句で、よしんば摘み肴一つ無かつたにしろ、酒はうまく飲ませたに相違ない。

飯を食ふにも、酒を飲ませるにも、夫と一緒に想像を喰べさせなければ嘘だ。肉皿に新しい野菜

菜と想像を一緒に撮む事の出来る細君にして、初めてお臺所を委せる事が出来る。

毒草の味

幸田露伴氏の話によると、氏が今のやうに文字の考證や、お説教やに浮身を窺さない頃には、

郷長 蓮の葉

春になるに、饗庭篁村氏なご、一緒に面白い事をして遊んでゐたさうだ。それは他でもない、仲間が五六人行列を作つて、味噌を盛つた小皿を、掌面に載せて野原に出る。そして真先に立つた一人が、其邊の道傍に芽ぐんでゐる草の葉を摘むで、夫に味噌をつけて食べるに、後に續いた者は順繰りにその葉を摘取つて食はなければならぬ。

先達は仲間を懲らさうとして、慇懃名も知らぬ草の葉に手をつけるが、夫がどんな變てこな草だらうが、先達が食つたさあれば、仲間も夫を口にしなければならぬ。

偶には見る／＼先達の唇が腫上るやうな毒草にも出會したが、仲間は滅多に閉口しなかつた。『なに、文久錢三蟹の甲殻の他だつたら、味噌さへ附ければ、どんな物だつて食べられませう。』

こんな事を言ひ合ひながら、負けぬ氣になつて、味噌をつけてはばり／＼毒草の葉を噛んだ。丁度後になつて、こんな物事にも理窟をつけては噛み込み、噛み込みするやうに。

で、物の五丁も歩くに、今後は先達を代へて、また同じやうな事を繰返すのだ。間の悪い日になるに、夕方家に歸る頃には、皆の兩唇が腫み上つて、碌に物も言へなくなつたやうな事さへあつた。

『お蔭で食べられる草に、食べられない草の見別はちやん／＼附くやうになりました。』
露伴氏は今でも言ひ／＼してゐるが、眞實に結構な事さ。人間はひよつとした神様の手違で、後の世に牛か馬かに生れ代る事が無いに限らないのだから。

十三年目

洋畫家の鹿子木孟郎氏は、結婚した當座いふもの、子供が無いのを甚く苦に病んでゐるが、巴里で祕方の藥でも授かつたものか、二度目の洋行から歸つて來るに、程なく花のやうな女の兒を儲けた。それは恰も結婚後十三年目に當つてゐるが、其の後間もなく男の兒を生んで、今では立派な子持になつてゐる。

その初めての産があつた時、同じ畫家仲間の某が、こんな婦人でもたつた十ヶ月で爲る仕事を、畫家にもいはれるものが物の十三年も懸つて、漸く仕上げるなんて、そんな間拔な事があるものか、嚴い抗議を申込んだのが、その頃の笑ひ話になつて残つてゐる。

小説家の柳川春葉氏は、大の子供好きだが、自分には子供が居無いので、狸ころや小猫を可愛

がつて、お客の前をも厭はず土足の儘で上下しをするので、清潔好きのお客のなかには、氣を悪くする向きもあつたが、近頃は何うした事か、そんな物も餘り掛け構はなくなつたばかりか、友達の顔を見るに、よくこんな事をいふ。

「君、僕は既う結婚後十三年になるよ。」

「へえ十三年にもなるかな。それはお慶い。」

「有難う。何しろ十三年目だからね。」

「早いもんだな。」

「ほんまにさ。十三年目なんだからね。」

「可笑しいぢやないか、十三年目が何うかしたのかい。」

「うん何だか子供が出来さうなんだよ。何しろ十三年目だからね。」

聞けば柳川夫人はもう臨月に間もない身體ださうで、お慶い譯である。春葉氏の説によるに、結婚後一二年で直ぐ出来るやうな、極安手な早上りは別として、少し遅い子供は、七年目か十三年目か、ちゃん三年期を追うて出来るものなのださうだ。

してみると、子供の無い者も、心配は十四年目から始めてもまだ遅くない。

新 畫

トルストイは「藝術とは何ぞや」といふ書物のなかで、佛蘭西の新しい詩人を攻撃しようとして作家達の詩集から例證をあげるのに奇抜な方法を選んだ。夫はいろんな詩集から廿八頁目の詩を引こ抜いて來るといふ方法なのだ。

茶話子は散歩をするのに、四つ辻へ來るに、手に持った洋杖なり蝙蝠傘なりを眞直に立て、みて、それが倒れる方へ歩き出す事がよくある。

近頃新畫の展覽會があちこちで開かれるが、作家ミ繪の出來榮について、何の好悪も持たない今の成金のなかには、眼を閉ぢて番組を押へるさか、又は從來自分に縁起のよかつた、251か23ミかの番號に當つてゐるのを捜すさかして、夫を買取る事にきめるのがある。

そんな時には何うかすると、同じやうな買手が顔を出すもので、互に意地を張つた末が、定つたやうにぢやん拳で縁極めをする。よく新畫の展覽會へ出掛けるに、一つの畫幅の前で火喰鳥の

やうな鋭い顔をした男が三四人、ぢやん拳をして、きやつ／＼乾躁ぎ散らしてゐるのを見掛ける事がある。

なかには地所を買ふより割高になるといつて、展覽會があると、繪など一目も見ようとはしないで、電話でもつて何號から何號まで、總高幾千を取除けて置いて貰ひたいミ、恰で勸業債券でも買込むやうな取引をするのがあるさうだ。

流石は結構な美術國だ。

佛

畫

早稻田大學の某氏は、近頃眞黒に燻つた佛畫を持ち廻つて、頻りに購客を捜してゐる。幾らだこ訊くミ、

『まあ、やつこ見切つた所で一萬圓。』

こいふので、大抵の人は肝腎の佛畫は見ないで、某氏の顔を見て笑つて済ましてゐる。某氏は遅緩かしくなつて、友達仲間を説き廻つて、

『誰でもいい、この畫を一萬圓に周旋つて呉れたなら、手数料として千圓位出しても可い。』
こいふので、仲間の美術通や畫家などは、血眼になつて得意先を駈けやり廻つてゐる。言ふ迄もなく美術通や畫家などいふものは、閑暇がある代りに金銭が無い連中である。

一體佛畫こいふものはざらにあるが、名高い二十五菩薩來迎や山越の阿彌陀なまを除けるミ、何れも凡作揃ひで、お談話にもならぬが、美術の好きな者には盲目が多く、盲目には富豪が多いから、下らぬ佛畫に萬金を投しても悔いしないのだ。

某氏の佛畫はまだ見た事もないし、夫に賣物の事だから彼は言はうこも思はないが、一體何を標準に一萬圓こいふ賣値をつけたのだこ訊いてみるミ、亡くなつた岡倉覺三氏が其の畫を見て、米國へ持込んだから屹度三萬圓には賣れるだらうといつた、其の一言を標準に、大負けに負けて一萬圓こいふのださうな。

岡倉覺三氏は邦畫の鑑定にかけては、随分鋭い鑑識を持つてゐた人だから、那の人の鑑定つきだつたら、三萬圓位投り出す富豪があつたかも知れないが、さうかこいつて今さら地獄へまで鑑定書を取りにも往けまい。尤も大隈伯にでも頼んだら、二つ返事で地獄の門番に添書だけは書い

て呉れるかも知れない。那の人は人に親切を盡すといふ事は、添書をつける事だに辨へてゐるのだから。

その一萬圓が手に入つたら、件の某氏は眞面目に支那書を研究したいと言つてゐる。支那書も善いには相違なからう。人間といふものは、金銭が手に入らない間は、いろんな善いことを考へつくものだから。

緑

青

ある畫家の使つてゐる紅の色が、心憎いまで立派なので、仲間は吸ひつけられたやうに其の畫の前に立つた。そして不思議さうに訊いた。

「素晴らしい色彩ぢやないか、一體何店で掘出して來たんだね。」

畫家は夫に答へようもしないで、牛のやうに黙りこくつて、せつせし仕事に精出してゐるが畫が描けるに連れて、身體はだんだん衰へて來た。そして仕場に今一息といふ際い時になつて刷毛を手にした儘、畫の前に突伏して倒れてゐた。仲間が死骸を片付ようとして見るに、畫家

は耶蘇のやうに胸に孔があいて、孔からは眞紅な血が流れてゐた。仲間は夫を見ると、

「色彩だと思つたのは、自分の血だつたのか。」

聲を揚げて驚いたといふ話がある。

四條派の名家だつた望月玉泉が、晩年に京都のある高等女學校に、邦畫の教師として一週幾時間か、酸漿のやうな眞紅な顔を覗けてゐた事があつた。普通の繪具は生徒が買合せの安物の水繪具で辛抱してゐるが、綠青と群青だけは、自分の宅から懷中に捻ぢ込んで來て、夫を生徒に賣つてゐた。

「これは綠青と群青やで。ごつちやも高い繪具やが、貴女方はお弟子やさかい、廉う賣つて、一度分五錢にしこままつさ。」

玉泉はこんな言つて、その綠青と群青を使った生徒からは、その場で五錢宛受取つて袂に投げ込んでゐた。

生徒が草花の寫生でもするに、玉泉はじつと覗き込んで、

「よう出來よつたな。それに綠青をお塗りやすに、やつし引立ちよる、お塗りやすいな、綠青を

……』
といつたやうな調子で、つい懐中の縁青を押賣する。
もしか自分の血が好い繪具になら事を知つてゐたら、玉泉さんは縁青や群青の代りに、萎びた自分の胸を切賣したかも知れない。

畫の鑑定

或人が海北友松の畫を田能村竹田に見せた事がある。
一中井履軒さんの鑑定書がついてゐるさかい、正眞物に相違おまへんて。』
さいふ自慢なのだ。竹田がその鑑定書を見るに、
『海北の畫、驚目候、相違はあるまじく存候。さりながら素人の目、醫者、士藏は眞實あてにならぬ物、聞及び候。』
と書いてあつたさうだ。
富岡鐵齋の畫を持合せてゐる男が、鐵齋の畫には随分贋作が多いと聞いて、鑑定書を添へて置

いたら、賣物に出す時に便利だらうと思つて、息子さんの許に夫を持ち込んだ事があつた。
息子さんは其の男、豫ねて知り合のなかだつたが、眼鏡越しにじろり、畫を見て、ちよつと舌打をしたと思ふに、
『眞赤な贋物でさ。』
と吐き出すやうに言つた。
畫の持主は吃驚した。
『でも君、いつだつたか君の居る前で鐵齋翁に畫いて頂いたんぢや無いか。夫をそんな……』
『夫をそんな……』
こは言つたが、絶念のいゝ人だつたからその儘持つて歸つて、押入に突込んでしまつた。
息子さんにしても少しも無理はない。世の中には忘れるさいふ事がある。そしてまた鑑定違、いふ事もある。

天井畫

本阿彌光悦が書た本法寺の額は、『法』といふ字の扁が二水になつてゐるので名高いものだ。光悦はあゝいふ洒落者だけに、本法寺の門前を流れてゐる水を、その一水に象つて、わざと然うしたのだといふ説もある。

むかし天龍寺塔頭のある寺にあつた書院の杉戸は、探幽の筆として聞えてゐたが、戸には李白一人が畫であつて、瀧らしいものが一向に書いてなかつた。これは嵐山の戸無瀬の瀧を目の前に控へてゐるので、瀧は態を描かなかつたのだ。

池坊の祖先某は、六角堂に立花の會があつた時、自分の花に態正心松を缺いで活けておいた。何故だらうと夫が一座の人の噂の種になつてゐる頃、池坊は

『松は今御覽に入れます。』

と云つて、障子を引明けるに、庭にある好い枝振の松が、うまく立花のなかに取入れられたさうだ。流石に池坊式で、之には拵へ事の態とらしさがある。

竹内栖鳳氏は東本願寺の天井に、天人飛行の繪を畫く約束で、もう幾年かといふもの考へ込んでゐるが、まだなか／＼出来上らない。往時ある處に狩野永徳の描た空飛ぶ鷹の間といふのがあつた。何でも襖障子一面に、葦と雁を描き、所々に鷹が羽叩して水を飛揚つてゐるのを配つた上、天井には雁の飛ぶのを下から見上げた姿に、雁の腹と翼の裏を描いて居つたといふので名高かつた。この傳で往く、栖鳳氏の天人は臍の孔から、櫛つたい腋の下の腋まで描かねばならなくなる。

畫家と商人

東京の繪畫商人の某が、京都で展覽會を開くために、ある四條派の老大家の許へ、半切の揮毫を頼みに出掛けた。高が半切だに聞いて、畫家は會はうもしない。

『先生はお忙しうおすさかい、なか／＼お出来になりまへんぜ。』

と玄關番は闕に突立つた儘、欠伸をしい／＼言つた。玄關番といふものは、主人が奥で欠伸をする時分には、自分も極つて夫をするものだ。

商人は四條派の畫家に、よく金を欲しがる持病があるのを知つてゐたから、

「それでは伺つた印に、潤筆料だけ承はつて参りませう。」

と言つた。玄關番は商人の前に片手を擴げてみせた。

「半切一枚五十圓ごつせ。」

商人は懐中から財布を取り出した。

「それでは茲に五十圓差上げて置きますから、お氣に向いた時に一枚御揮毫を願つておきます。」

玄關番は夫を見るに、急ににこにこ出した。

「そんなら最一度頼んで来まつさ。なに理由を話したら、先生の事やさかい、半切の一枚や二枚ちよつくらちよつと書いて呉りやはりますやろ。」

然ういつて奥へ隠れたと思ふに、玄關番はまた表へ飛び出して来た。

「唯今先生がお會ひになりますさかい、まあ何卒お上り……」

今度は商人が承知しなかつた。

「折角ですが、私は繪をお頼みに上りましたんで、先生にお目に懸りに来たのではありませんか

ら。」

と言つて、その儘すた／＼と歸つてしまつた。

流石に商人は目が敏捷かつた。繪は賣る爲めに註文したので、畫家に會つた爲めに賣値を崩すやうな事があつても詰らなかつた。實際畫家のなかには、その人に會つたが爲めに、折角描いて貰つた錦鶏鳥の畫までが厭になるやうな人も少くなかつた。

「先生はお忙しうおすさかい……」

先生がお忙しいのは、先生自身に取つても、お客に取つても勿怪の幸福であつた。孰方も損をしないで済む事なのだから。

畫家と書物

京都大學の某教授は、日本畫家の作物を難して、畫家はさうしても本を讀まなければ駄目だと言つたさうだ。畫家に本を讀めといふのは、大學教授に鬚を剃れといふのと同じやうに良い事は相違ない。だが、剃立の顔が學者に似合はない事もあるやうに、さうかすると本に食中りをす

る畫家もある事を忘れてはならない。某教授は本を読む畫家の代表として富岡鐵齋をあけて、那の人の畫には氣品があるといつたさうだが、よしんば氣品はあるにしても、鐵齋の畫には畫家の敏感がよく出てゐない。畫家に本よりも大切なのは敏感である。

むかし今津に米屋與右衛門といふ男が居た。富豪の家に生れたが學問が好きで、色々の書物を貪り讀んだ。珍らしい働き手で、酒男と一緒に倉に入つてせつせと稼いだから、身代は太る一方だつたが、太るだけの物は、道修繕、橋普請といったやうな公共事業に費して少しも惜まなかつた。亡くなつた時には方々の人がやつて来て聲を立て、泣いた。なかに一人智恵の足りない婆さんが交つてゐて、おろおろ聲で、

『これ程學問してさへこんな好いお方だつたから、もしか學問なまじなかつたら、みんなに立派なお人だつたらうに。』

と言つたさうだ。

婆め、なか／＼皮肉な事を言ひをるわい。

馬車の葬式

巴里の辻々にある圓太郎馬車が廢められて、自動車に代るやうになつた時、その會社員を始め乗りつけのお客さん達が、サン、シユルビスのお寺で乗合馬車の葬式を行つた事があつた。

舊教の坊さんが勿體ぶつて聖書を朗讀すると、會葬者は聲を合せて『アーメン』と唱へた。惻かな耶蘇だつて、まさか乗合馬車のお葬ひまでしようとは思はなかつたらうから、夫に相應した文句は残さなかつたらうが、巴里の坊さんは別に引導には困らなかつたらしい。何故かいつて、聖書で見るミ、みんな馬車だつて、人間のやうな罪の重荷は背負はなかつた筈だから。

式が済むと、圓太郎馬車は送られて火葬場へ往つた。二里餘りの道中を絹帽を被つた會葬者はぞろぞろと續いた。路傍の見物人は、恰で名士の葬式にでも出會つたやうに、克明に帽子を脱いでお辭儀をしたさういふ事だ。

日本では往時から文塚、筆塚、針塚といったやうな物があつた。東京新聞の漫談家が寄集まつて、島田三郎氏の漫談葬式をやつたのも面白い企てであつた。大阪のやうな土地柄では、名妓の

落籍される場合などには、以前の關係筋が寄つて集つて葬式をするのも面白からう。坊さんには、矯風會の林歌子女史など打つて附の尼さんだらう。那の人はお説教を聞かないでも、顔だけ見れば悲しくなりさうだから。

呂昇の咽喉

耳鼻咽喉科専門醫N氏の説によるに、藝妓といふものは大抵慢性喉頭加答兒に罹つてゐる。夫は無理に聲を使ひ、無理に酒や煙草を飲み、無理に夜更しをし、無理な借錢や、無理な戀をするといつた風に、凡てが無理づくめなからさうだ。唄でも謡ふ時は鶯のやうに消かだが、談話をするに曳白のやうな平べつたい聲をするのは、咽喉を病んでゐる證據ださうだ。

N氏は一度呂昇の咽喉を見た事がある。凡て女の聲帯は細いのに、呂昇のは男と同じ程度に大きく、咽喉もよく發達してゐるが、扁桃腺が非常に肥つて、どんなに最良目に見ても、健全な咽喉とは言ひ兼ねたさうだ。餘つ程扁桃腺を切らうかとも思つたが、其拍子に淨瑠璃を傷つけても思つて見合せたさうだ。素人の淨瑠璃は鼻の先に集つてゐるが、呂昇のやうな黒人ののは、何處

に隠れてゐるのか、醫者にも一寸判らないといふ事だ。

雲右衛門の咽喉は、滅茶々に荒れてゐて、聲帯は手の着けやうも無い。一體浪花節語りは、首を縊められた野鴨のやうに、一生に一度出せばよい聲を、さらに絞り出すので誰でもが病的になつてしまふ。

先年大隅太夫が聲が出なくなつて、約束の席に差支へた時、高峰博士のアドナリンの聲帯注射を試みて、無事に席を濟ませた事があつた。これは聲帯の充血を一時的に散らすので、長い効能は無いが女でも口説かういふものは、その三十分前にこれを注射して見るのも面白からう。だが、或人の説によるに、そんなに手数の要する事をするよりも、その注射代だけ手土産を持つて往つた方が、屹度女の氣に入るといふ。

雷

雷雨が明けて雷が鳴る頃になつた。雷こいへば上州あたりには、雷狩をして、捉へた奴を、料つて食べる土地があるけに聞いてゐる。雷こいふのは、多分雷鼠の事で、打捨つておくに、

芋の根を喰ひ荒して仕方がないさうだ。

不思議なのは、雷狩をした年の夏は、屹度雷鳴が少い事だ。この雷狩は山や野原でする許りでなく、また海つ邊でもやる。雷鼠が、翡翠のやうに寂しい海岸に穴を掘つて、そこから顔を出して遊んでゐるのを漁師が捉まへる事がある。

政治家が餘り喋り過ぎて大臣の椅子から滑り落ちるやうに、雷も時偶圖に乗り過ぎて海へ落ちる事がある。さういふ折に漁師が水棹を貸してやらなければ、空へ歸る事が出来ないで、亂暴者の雷も漁師だけには極素直だといふ事だ。

京都は三方山に降られてゐるので、夏になるに雷が多い。空がごろごろ鳴り出すと、京都の女はチヨコレトを食べさせて、蠶のやうにふるふるつと身體を顫はせる。

「貴方はん、また雷鳴さつせ。さないしまほ、妾あれ聞くに頭痛がしまつさ。」

實のところは、雷は嫌ひでも何でも無い、唯慙ういふと、男の眼に優しく美しく見られるといふ事を、女の本能から知つてゐるのだ。男は鈍いもので、此瞬間女を飛切り美しいものに見

京の水

るばかりでなく、自分をも非常な勇者のやうに思違へをする。

むかし京都で物好きな男が三人集つて、鴨川のほとりで茶を煎じて遊んだ事があった。菅茶山が言つたやうに、京都は物静かで遊ぶには持つて來いの土地柄だが、さりわけお茶と戀をするには一番都合がよい。

水の講釋にかけては、人一倍やかましい茶人達の事にて、あつちこつちの名水を瓶に入れて、各自に持寄りをする事にきめた。で、集まつた水一つ宛煮て味はつてみたところが、矢張加茂川の水が一番美味かつたさうだ。

或る通人が夫を聞いて、

「尤も至極の事で、他所の水は、瓶に貯へて持ち寄りをしたのだから、時間が経つて死水になつてゐる。加茂川のは揃み立だけに、水が活きてゐる。美味いに不思議はない筈だ。」

と言つた。

久保田米僊は、大阪の鱧も、京都へ持つて来て、一晚加茂川の水へ漬けておくに屹度味がよくなると言つてゐたが、米僊は私に一度も鱧の御馳走をしなかつたから、嘘か眞實か保證する限りでない。

京都俳優の随一人阪田藤十郎は、よく江戸の劇場へも出たが、その都度江戸の水は不味くて飲めないからさいつて、態々飲み馴れた京の水を幾つかの大樽に詰め込んで、江戸まで持ち運んだものださうな。水自慢は繰繰自慢と一緒に、自慢する人自身の拵へ物でないだけに面白い。

親

奥繁三郎氏の母親は九十近くの老齡で、今だに達者であるが、孝行者の奥氏は、東京へでも旅をする時には、一番に母親へ挨拶に往く事を忘れない。するに母親は、定つたやうにいふ。

『東京へお行きやす言つて、誰ぞお伴でもおすのかいな。』

『いえ、私一人です。』

『あんた一人で東京までようお行きやすか。』

母親はもう涙を一杯眼に浮べて、

『繁も可憫さうに、お伴が些こも出来よらんのかいなあ。』
とそつこ溜息をする。

奥氏はどんな旅行をするにも、母親の前では屹度、

『一週間旅へ往つて来ます。』

といふ。すると其の翌日から、母親はもう、

『繁はまだ歸つて来やはらんかいな。』

と訊くので、

『まだ昨日お發ちやしたのやおへんか。』

といふ。

『さうかいな、もう一週間も経つたやうに思へるさかい。』

と、其邊を捜してもするやうにうろくする。

親といふものは有難いもので、神様が人間を罪人扱ひにするのに比べて、親はいつ迄も其の子

を子供扱ひにする。親が神様になつては可けないやうに、神様も親になつては可けないが、親には神様が眞似の出来ない長所がある。夫は子供の爲には「馬鹿」になるさういふ事で、神様より人間の偉い點は確にこゝにある。丁度「愚痴」を持つてゐる女が、夫を持合はさない男より強いやうなものだ。

帽子

英國の文豪キプリングが、ある時米國の雑誌が見たいから、五六種送つて欲しいと、紐育にゐる友達の許へ頼んでよこした事があつた。

米國の雑誌は、いづれも廣告の頁がさつさりあるので知られてゐる。キプリングの友達は、幾らか郵税を節約したい考へから、廣告の頁だけ引裂いて、残つた内容を一纏めにして送つて寄した。

キプリングは包みを解いてみるに、雑誌はみんな廣告の頁だけ引き裂かれてゐる。何故だらうとキプリングは小首を傾けたが、それが郵税の節約からだを聞いて文豪はぶつぶつ憤り出した。

キプリングの言ひ條では、米國の雑誌は廣告欄が面白いので取柄がある。内容と廣告と孰方にも新智識が多いと訊かれたら、誰だつて選擇に迷はない筈だ。

『そんなに郵税が節約したかつたら、内容の方だけ引裂いて呉れ、ばよかつたに。』と、友達まで不平を申込んださうだ。

世の中には米國の雑誌みたいない人も少くない。法隆寺にゐた北畠男爵などはその一人で、暴風のやうな那の人一流の法螺は一寸困り物だが、夏帽だけはバナマの良いのを着けてゐる。もしかキプリングの友達のやうに、郵税を節約しなければならぬとすると、「男爵」は捨て、しまつても、那の帽子だけに残しておきたいものだ。

玄關

そのむかし、池大雅が眞葛原の住居には、別に玄關といつて室も無かつたので、軒先に暖簾を吊して、例の大雅一流の達者な字で「玄關」を書いてあつたさうだ。上田秋成が南禅寺常林庵の小家にも、入口に暖簾をかけて、「鴛屋」をたつた二字が認めてあつたといふ事だ。

拗ね者の金龍道人は、自分の戸口に洒落た一聯を懸ておいた。聯の文句は恚ういふのだ。
 「貧乏なり、乞食物貰ひ入る可からず。」
 「文盲なり、詩人墨客來る可からず。」
 乞風物貰ひも五月蠅くない事もないが、それでも詩人墨客よりはまで愈な場合が多かつた。何故かいつて、乞食は物を呉れて遣れば、素直に歸つて往くが、詩人墨客は自分が納得出来るまで無駄話を押賣しないでは滅多に歸らなかつたから。
 自分の知つてゐる某氏は他の家へ出人をするのに、がらりミ入口の扉を開けはするが、その手で滅多に閉めた事は無い。尤もこれには主義のある事で、自分が出入するのには、扉は是非開けなければならぬが、夫を閉めて置かなければならぬ何等の理由も發見出来ないからださうだ。恚ういふ來客に取つては、大雅や秋成のやうな暖簾の玄關は手数が要らないで可い。

墓 石

亡くなつた市川齋入は茶人だけに、紫野の大徳寺にある千利休の塔形の墓石に甚く感心をし

て、
 「成程、那の墓石に耳を當てがふに、何時でも茶の湯の沸る音がしてまん。私も併優甲斐に落た墓石が一つ欲しうおまんね。」
 と言つてゐるので、或人が、
 「君は幽霊や宙釣りが巧かつたから、墓石にも一つケレンを仕組んでみたら何うだい。」
 と冷かすに、
 「阿呆らしい。」
 と皺くちやな顔を歪めて絶くれたさうだ。
 だが、夫は齋入が物を識らないからで、徳川時代の洒落者の多かつた江戸町人の墓石には、故人が好物の形に似せた墓も少くなかつた。墓好きの墓に墓石を墓盤に拵へ、墓笥を花立に見立てたのや、酒飲みの墓を徳利形や、酒樽形に刻んだのもあつた。可笑しいのは賭博が好きだつたらこいつて、墓石に骰子の目まで盛つたのがあつた事だ。夫を考へて倅の右團次も亡父の墓を幽霊の姿にでも刻んだら面白からう。

風

藥

蚯蚓が風邪の妙藥だといひ出してから、彼方此方の垣根や塀外を穿くり荒すのを職業にする人達が出来て来た。郊外生活の地續き、猫の額ほごな空地に、十歩の春を娛まうとする花いちりも、恚ういふ輩に遭つては何も角も滅茶苦茶に荒されてしまふ。

箏曲家の鈴木鼓村氏は巨大胃を有つた男として聞えてゐる人だが、氏は風邪にかゝるに、五合飯と味噌汁をバケツに一杯食べて、夫から平素餘り好かない煙草を暴に吸ふのださうな。

「さうするに、身體ちうの何處にも風邪の匿れる場所が無くなつてしまふ。」

と言つてゐる。

昆蟲學者として名高い、夫がためにノobel賞金をも貰つた佛蘭西のアンリ・ファブル先生はいつも風邪をひくに、自分の頭を灰のなかに突込むといふ事だ。するに一頓り咳が出て風邪はけろり癒つてしまふ。

「随分荒療治すな。」

強 制 妊 娠

「或人がいふに、ファブル先生済ましたもので、何でもありません。一寸風邪のお葬式をやつたのです。」

獨逸では戦争から起る人口の減少を氣遣つて、戦線に立つてゐる元氣な壯丁に、時々休暇を呉れて郷里に歸らせ、婦人を見れば無差別に子種を植付けようとしてゐる。

先日京大のM博士と大阪大学のK博士とが或所で落合つた時、K氏がこの話を持ち出して、

「まさかとは思ふが、眞實か知ら。」

「いふに、M氏は自分がその下相談にでも與つたやうに、

「眞實だともさ、實際行つてゐるんだよ。」

「きつぱり答へた。」

「でも……」とK氏は兎のやうな長い耳を一寸傾けた。

「戦線に立つてゐる兵士の多くは、女房や娘やを持つてゐるだらうが、自分の家族がそんな目に遭つ

てるのを、黙つて辛抱出来るだらうか知ら。」

『それは出来ようともさ、國家の爲めだからね。』

「この齡まで細君をも迎へず、一人で研究室に閉ぢ籠つてゐるM博士は、モルモツトの話でもしてゐるやうな平氣な調子で言つた。

『兎に角行つてるのださうだ。』

『だが、まあ考へてみ給へ。』

K氏は大きな掌面で汗ばんだ鼻先を一氣に撫で下した。鼻はその邪慳さに腹立でもしたやうに眞赤になつた。

『もしか君自身に奥様やお嬢さんがあるとして、君はその人達が、そんな酷い目に遭つてるのを平氣で辛抱してゐられるかね。』

『然うさなあ。』

M氏は初めて氣がついたやうに、K氏の眞赤な鼻先を見つめた。

そして、

『吾輩自身の事にしてみるこ……』

「獨語のやうに言つてゐるが、急に笑ひ出した。

『成程こいつは逆も辛抱出来ないわい』してゐるこ、獨逸もそんな亂暴なこは行つて居らんかな。やつぱり噂だけで、眞實は行つてないんだらうて。』

學者に教へる。帽子を買ふ時には自分の頭に被つてみる事だ。履物を買ふ時には自分の脚に穿いてみる事だ。そして男女問題は眞先に自分の細君なり、戀人なりに當てはめて考へてみる事だ。唯こんな場合には、醜い細君よりは、美しい方がすつこ恰好なものだ、丁度帽子を被る頭は、禿けたのよりも髪の毛の長いのが恰好なやうに。

狸

中橋徳五郎氏は類こ狸の焼物を集めてゐる。京都の高臺寺焼を始め、いろんな瀬戸物屋へ自分で出掛けて往つて、狸だこ見るこ値段を問はず買ひ込んで來るので、今では百幾つも溜つてゐるこいふ事だ。

成程よく見るに、中橋氏の顔はまごか狸に肖たところがある。然ういつた所で何もむきになるにも及ぶまい。ソクラテスに、

『先生のお顔は、ブルドックに肖てますね。』

まいつた處で、まさか決闘を申込はしなかつたらう。それどころか那の哲學者の事だもの、
『そんな狗がまごに居るね。』

ま其の足で直ぐ訪ねて往つて、幼昵懇のやうに狗と一緒に轉け廻つたかも知れない。

中橋氏は實業家（氏は今ではもう政治家の積りかも知れない、恰も水龜が鹽辛蜻蛉になつたやうに）には珍しく書物を讀むが、狸にしても文字をよく知つてゐるのがある。むかし植木玉屋の親類に居た狸なまごは其のいゝ例である。

この狸は家の者の見ぬ間には、下手な字で障子襖に皆の棚下しをする。

『誰こわくない、誰少しこわい』

まいつたやうな調子で。ある時來客がその噂を聞いて、能勢の黒札を狸が怖がる話をするに、いつの間には後の障子に、

『黒札こわくない。』

ま書いてゐたさうだ。

その家の女房が、芝居の八百藏が大の最辰だったが、その頃不入續きで情氣でゐるに、狸は、

『八百藏大へいこ。』

ま書いて濟ましてゐたさうだ。

中橋氏の狸も、例の金澤の選舉無効を聞いて、

『徳ちゃん大へいこ。』

ま書く位の洒落氣はあつてもよからう。

節用集を食ふ

先日七十三の老齡まで、女遊びをしたまごいふ西依成齋の事を書いたが、成齋の生れた家は、熊本の水吞百姓で、両親は朝夙から肥桶を擔いで野良へ仕事に出たものだ。

そんな間に育ちながら、成齋は野良仕事を助けようまごはしないで、日がな一日青表紙に嚙りつい

てゐた。親爺は幾度か叱り飛ばして、漸々芋畑に連れ出しはしたが、成齋は颯のやうにいつの間にか畑から滑り出して、自分の家に歸つてゐた。百姓だけに仇花は拗つて捨てるものと思ひ込んだ親爺は、さう成齋を家から投げ出す事に決めた。

成齋は泣く泣く家を出たが、それでも出かけに節用集一巻を懐中に捻ぢ込む事だけは忘れなかつた。節用集さいつただけでは、今時の若い人には解らないかも知れない。ある大學生が國史科の教授に、

『先生赤穂義士の仇討さいふのは一體京都であつた事なんですか、それとも東京なんですか。』

と訊いた事があつたさういふ程だから、節用集さいふのは今の小百科全書の事だと言ひ添へて置きたい。

成齋はその節用集を抱へ込んで、狗兒のやうに鎮守の社殿の下に潜り込んだ。そして節用集を讀み覺えるさ、その覺えた個所だけは紙を引拗つて食べた。書物を讀み覺える頃には、腹もかなり空いてゐるので、節用集はその儘飯の代りにもなつた譯だ。で、十日も経たぬ間に、たうさ大郎な節用集一冊を食べてしまつたさういふ事だ。

灰屋紹益は、自分が生命までも思ひを掛けた吉野太夫が死ぬるさ、その骨を墓のなかに埋めるのは勿體ないからと言つて、酒に混ぜてすつかり飲み盡してしまつた。

だが、恚ういふ事は餘り眞似をしない方がいい、今時の書物は鶴呑にするさ、頭を痛めるやうに胃の腑をも損ねる。それから女の骨を飲むなごは以ての外で、四十九日目に簞笥の抽斗から、亭主をこき下した日記を發見したからさいつて、一度嘔み下した後では、何うさも仕兼ねるではないか。

そして、そんな女なぞ居ないさ誰が請合ふ事が出来るのだ。達て嘔みたかつたら、三回忌を過ぎてからでも遅くはない筈だ。

角田川

大阪美術俱樂部で催された故清元順三の追悼會に、家元延壽太夫が順三の幼馴染を懐ひ出して、病後の窶れにも拘らず、遙々下阪して來たのは美しい情誼であつた。

延壽太夫はその席上で、『角田川』を語つた。清元としては甚く上品なもので、何も判らない筈

衆は、何れも手を拍つて喜んでゐるが、自分は獨り欺かれたやうな氣持がしない事もなかつた。意氣で、うまみで持つてゐる清元を、強て上品に拗曲やうにするのは寧ろ當流音曲の自殺である。四代目お葉は二代目の不思議な横死が、富本の手で行はれたかも知れないといふ疑一つで、富本の紋章に縁のある櫻の花は、生涯家に植させなかつた程だ。家の藝が自分で首を縊らうとするのを見たら、ごんなに言ふだらう。

先代の延壽は道樂といふ道樂を仕盡して、ごごの果には舌切情死までしようとした。さういふ遊蕩的分子をその血にたんご持傳へてゐるから、舌切雀のやうに情死で損じた舌をも、何うにか工夫して獨吟ごなるご、聽客の魂を吸ひつけるやうな離れ業も出来たのだ。清元に無くて叶はぬものは、この遊蕩的分子である。

今の清元は、所謂上流夫人といふ階級の氣に入らうごして、清元を『角田川』のやうなお上品なものにしようごしてゐる。今の上流夫人の好くものは、お手製の西洋菓子ご、オペラ袋ご、新音曲ご——孰れもお上品で軽い物づくめである。

記者の口む

トルストイ伯は、その名著『アンナ・カレニナ』のなかで、塞爾維亞對土耳其の紛糾から、もしか戦争でもおつ始まるやうだつたら、筆一本で啞しく主戦論を吹き立てた人達だけで、別に中隊を組織して、一番前線に夫を使ふ事にした。

「するご、屹度素晴らしい中隊が出来る。ご皮肉を言つてゐる。

イダ・ハステッド・ハアバア女史といふご、婦人參政權の賛成論者ごして相應名を賣つてゐるが、この女が最近 組育の有名な新聞記者に會見を申込んで来た。それはこの記者を生擒にして、新聞紙の上で熾に賛成論を書き立てさせたら、屹度効力があるだらうご思つたからだつた。

「婦人參政權ですつて？今時そんな下らない……」ご新聞記者は吐き出すやうに「もしか私達の國が、歐洲戦争に引張り出されるごして、誰が武器一つ取る事を知らない輩に投票なんかするもんですか。」ごそつ氣なく言つたが、相手の險しい顔色を見るご、一寸調弄つて見たくなつて「奥様、貴女だつたら何うなさいます、もしか戦争でも始まりませんか。」

「はい、貴方のしてゐらつしやる通りに遣りますわ。」夫人は急に雌馬のやうに鼻息を荒くした。「お國の爲めだからつて、他の人達はみんな戦線に立つて血を流すやうに書き立てゝさ。そして自分一人は編輯室の安樂椅子に踏ん反りかへつて居ませうよ。」

もつと善い物

ある小説家が歐羅巴漫遊の途に上つた時、その小説家顔肥態のある某いふ本屋は、往く道すがらの觀光記の原稿が貰ひたさに、態々見おくるのだといつて、神戸から門司まで、その小説家と一緒に薄汚い汽船の三等室に滑り込んだ。

船が播州沖を出かゝるに、色々の世間話に取り交せて、夫もなく原稿の事を切り出してみるに小説家は圓い色眼鏡の奥から、じろく／＼本屋の顔を見つめた。本屋は魚のやうな冷い顔をしてゐた。

「原稿も原稿だが、それよりももつと善い物をあげませう。」
小説家はこんな言つて、立上つて甲板へ出た。

本屋は一刻も早く其の『善い物』が見込みに、後から蹤いて甲板に出た。船の前には撮んで投じたやうな島が幾つか轉がつてゐる。小説家は一寸後を振向いて見て、

『いゝ景色ですな。』

と言つたきり、大きな腕を胸の上で拱んだ儘、大跨に其邊を歩き廻つてゐるが、いつの間にか姿が見えなくなつた。

本屋は慌てゝまた船室へ歸つてみた。小説家は薄暗い室の隅つこで、膝小箆を抱へ込んだ儘、こくりこくりと居睡りをしてゐる。附近には見眷らしい荷物が一つ限で、何處にも其の『善い物』は見つからなかつた。

船が門司に着かうとする時、本屋の主人は夫もなくまた原稿の一件を切り出して見た。するに小説家は急に思ひ出したやうに、

『さゝでしたつけな。いや、原稿も原稿だが、夫よりももつと善い物をあげませう。』

また同じ事を繰り返した。

「原稿より善い物つて何ですか。」本屋は直ぐに訊きかへした。

男のお産

「信仰です。」小説家はトルストイのやうな口元をしてきつぱりと言つた。願にトルストイのやうな髭々した髭のないのが口惜しかつた。

「先づ神をお信じなさい。其の外事はみんな語りません。」

本屋の主人は眼を圓くして小説家の顔を見た。そして鸚鵡返しに、

「先づ原稿をお呉んなさい。その外事はいづれ考へてからにませう。」

と言ひたかつたが、相手を怒らせても、その儘別れて小蒸汽船に乗つた。

むかし大森元孝といふ醫者があつた。すべて醫者といふものは、診断が拙からうが、學問が無からうが、唯病家へ往つて落つき濟まして居さへすれば、夫で良い評判を取る事も出来るものだが、不仕合せにも、この元孝は性來ひさい慌て者だつた。

ある時、松平大學頭の徒士が病氣に罹つて招びに來た。元孝は二つ返事で飛んで往つた。そして仔細らしい顔つきで、病人の腹を診てゐたが、一寸小首を傾けて、

「お産後でございますか。」

「醫者らしい丁寧な言葉で訊いた。」

徒士は變な顔をしたが、まさか醫者が自分を産婦に取違へもすまい、これは吃度自分の間違へに相違なからうと思つたので、「然うです。」言つて軽く頷いてみせた。徒士はこんな醫者でもが、病人が自分の診断通りに返事をして呉れるのを喜ぶものだといふ事をよく知つてゐた。

「醫者はじつと脈を押へたま、」

「お産はいつ頃でございました。」

「訊いた。」

病人は困つたらしく頭を掻いたが、たうと泣出しさうな顔をした。「先生、さうか御戯談を仰しやらないで下さい。私は疝氣を病んでるんですから。」

その瞬間醫者は相手の顔を見て、蠅のやうに糞くなつた。

「いや、飛んだ粗忽を申しました。實は先刻御婦人の病氣を診て、つい夫が頭に残つてゐたものですから。」

「どう言つて、二度三度お辭儀をした。頭には何も残つてゐないよ見えて、輕さうに動いた。また一人手總に宗仙といふ醫者があつた。其頃の醫學者として聞えた伊能忠敬の娘が病氣した時、聘ばれて毎日のやうに病室に入つて往つた。」

或日の午過ぎ、例のやうに慌てゝ入つて來た。心安立に碌々挨拶もしないで、膝を進めたと思ふに、其處に居合はせた娘の伯父の手を取つた。伯父は密源といつて頭を圓めた僧侶であつた。

「成程、昨日よりはすつと快くなつた。もう案じる程の事はない。」

醫者が安心したやうに言ふので、密源はその手を相手の鼻先に衝きつけた。

「宗仙さん、これは拙僧の腕でござりまするぞ。」

「や、これはどうも、飛んだ粗忽を……」

「言つて、宗仙は知らぬ世界へでも來たやうに、泳ぐやうな手附で眞實の病人を捜しにかゝつたといふ事だ。」

してみるに、今の醫者が病人の手を間違はずに握るといふ事でも非常の進歩である。よしんば男の手に、産後の脈が搏たうに、それはほんの些細な事で……

音楽家の頭

パデレウスキイといへば、波蘭の聞えた音楽家だが、最近米國に渡つた時、ある日勃士敦の停車場で、汽車を待ち合せてゐた事があつた。音楽家はショパンの樂譜でも踏むやうな足つきをして、歩廊をあちこち徜徉してゐた。

十二三のちんびらな小僧が、物陰から飛び出して、この音楽家の前に立つた。

「旦那、磨かせて頂きませうか。」

パデレウスキイは立停つて、黙つて小僧を見おろした。小僧は手に靴刷毛を提げてゐる。紛ふ方もない靴磨きで、橙のやうに少々な面は、靴墨で眞黒に汚れてゐる。

音楽家は洋袴の隠しから、銀貨を一つ取り出して、掌面の上に載せた。

「靴は磨かなくともいゝ、お前の顔を洗つておいでよ。さうするにこの銀貨をあけるから。」

その折、音楽家の靴はかなり汚れてゐたが、彼はその晩直に天國の階段を上るのでも無かつたし、米國の土を踏むのには夫で十分だと思つてゐたらしかつた。

『はい、直ぐ洗つて來ますよ。』

小僧はさう言ふなり、直ぐ洗面所へ駈つけて、土塗れの玉葱でも洗ふやうに、顔中を水に突込んでごしごし洗ひ出した。

小僧は洗ひ立の顔をして、バデレウスキイの前に歸つて來た。音楽家は『よし、』と言つて、銀貨を小僧の濡れた掌面に載つけてやつた。小僧は一寸それを頂いたが、直ぐまた音楽家の掌面に夫をかへした。

『旦那、銀貨はこの儘お前さんに上げるから、これで散髪をおしよ。』

バデレウスキイは驚いて額を撫でてみた。成程帽子の下から長い髪の毛が食み出してはゐるが、夫は音楽家が自慢の髪の毛だつた。

馬が悪い

むかし矢野大膳といふ馬乗の名人が居た。ある時友達の許を訪ねようとして、馬に乗つて出掛けたものだ。晴れた美しい秋の日で、町には人間や赤蜻蛉が羽を伸ばして飛びまはつてゐた。

大膳は何を考へることもなし、馬の手綱を取つてゐた。馬は牝の事を考へてにやにやしてゐた。ふと気が附く、直ぐ眼の前を美しい女が歩いてゐる。

『いゝ女だな。さこの娘だらうて。』

大膳はその一刹那に、自分が獨身者であるのを大層幸福に思つた。——獨身者といふものは結構なもので、どんな聖母でも、どんな乞食でも結婚する事が出来る。

大膳は女の後姿に見惚れながら、じつと手綱を掻い繰つてゐたが、暫くして四邊を見る、今通りか、つてゐるのは、ついで見も知らぬ町で、友達の家は反對の方角だつた。

『はてな、何うしてこんな所へ出て來たらう。』

大膳は鞍の上で獨語を言つたが、その次ぎの瞬間に馬が勝手に女の後をつけてゐるのに気がついた。馬は鞍の上の主人には頓着なく、ずん／＼女の後を追つて往つた。

暫くして女は遊女町へ入つた。そしてある一軒の洒落たお茶屋に入つたので、初めて夫が遊女である事が判つた。馬も主人はお茶屋の門先に立つて残り惜しさうになかを覗き込むので、それから大膳は遊女買を始めた。そしてせつせつ其の女の言に通ひつめたが、暫くするに

詰まつて来た。

「困つたな、いゝ金の蔓は無いか知ら。」

大膳は思案に苦しんで、馬に相談してみたが、馬は何にも言はないで首をふつた。大膳はやがて其の馬をも手離してしまつた。馬を賣つた金は十日は残つてゐなかつた。

「切支丹へ入らう、さうすれば何許かの金になるさうだから。」

大膳は金が欲しさに切支丹に入つた。そして貰つた金で、こつそり神様に隠れて遊女屋通ひを續けてゐた。

そのうち切支丹が法度になつて、信徒は皆火灸にせられた。大膳もその數には漏れなかつた。

「俺が悪いのぢやない、馬が悪かつたのだ。」

大膳は怨う言つて、炭團のやうになつて焼死んだ。

馬だの、女房だのが悪いミ、男はよく酷い目に會ふたものだ。

畫の畫

畫家T氏の許へは、色々の人が畫を頼みに来る。ある時づんぐり肥つた、鼻先の酸漿のやうに赤い男が玄關に入つて来た。

「一つ畫がお頼み申し度くて上りました。お差支が無かつたら、ちよつくら先生にお目に懸り度いもんですな。はい、ちつこばかし註文がございますんで……。」

其の男は出来るだけ言葉を丁寧にしようとして、漸ここれだけの事を言つた。T氏は、客を座敷に通して、其註文さいふものを訊いてみた。客は酸漿のやうな鼻先に大粒の汗をかいて居た。

「外でもありません、御註文申しますのは、海のなかに怨う鳥が二つ並んでゐるところなんですな、島が二つ……。」

と言つて、客は大きな握り拳を二つ自分の鼻先に列べてみせた。

「成程島が二つ……」T氏はコロツケのやうな鼻を二つ目の前に描き出した。

「ところで、その島には松でも生やすのですか。」